

一般国道49号
阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅻ

柄目木遺跡Ⅲ

2017

新潟県教育委員会

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号

阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅻ

がら め き
柄 目 木 遺 跡 Ⅲ

2 0 1 7

新 潟 県 教 育 委 員 会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 49 号は、太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路です。また、同路線は沿線市町村と新潟市を結び、日常生活や地域経済を支える重要な基盤道路としての役割を果たしています。

しかし、現道は阿賀野市街地での幅員減少等の問題を抱え、近年の著しい交通量の増加に十分対応できておりません。その結果、交通混雑、交通騒音、交通事故の増加等、生活環境に悪影響を与える様々な問題が生じています。

そこで、阿賀野市六野瀬から同市下黒瀬を結ぶ延長 13.7km の阿賀野バイパスの建設が計画されました。同バイパスは、安全で円滑な交通の確保と都市機能活性化のために重要な役割を果たすものと大いに期待されています。

本書は、阿賀野バイパスの建設に先立ち、2014 年度から 2016 年度に実施した発掘調査を取録した、柄目木遺跡では 3 冊目となる発掘調査報告書です。調査面積はこれまでに比べ小さいものの、中世の井戸がまとまって検出され、土壌に含まれる炭化種実の分析によって中世の食生活の一端がうかがえました。また、古代の竪穴建物は、今回報告する 3 棟を含め柄目木遺跡全体で 10 棟を検出しました。一遺跡での検出数としては新潟平野でも有数と言え、古代の居住形態を研究するうえで良好な資料が得られました。

今回の調査結果が、地域の歴史を解明するための基礎資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御支援と御協力をいただいた阿賀野市教育委員会、並びに地元住民の方々、そして、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御高配をいただいた国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

2017 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 池田幸博

例 言

- 1 本報告書は、新潟県阿賀野市下ノ橋・小里に所在する栢目木遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は一般国道49号阿賀野バイパスの建設に伴い国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所（以下、国交省）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委の依頼を受けた公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が2014年度から2016年度に実施した。発掘作業、整理作業及び関連諸工事等の一部業務は、株式会社ノガミ（2014・2016年度）、株式会社古田組（2015年度）に委託した。発掘調査面積は延べ1,354㎡である。
- 4 出土品及び調査に係る各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は、調査年度と遺跡の略記号を合わせ「14～16 ガラメ」とし、出土地点・遺構名・層位等を続けて記した。
- 6 本文の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 遺構番号は種別に関わりなく調査年度ごとに通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 8 引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、第Ⅶ章を除き巻末に一括して掲載した。
- 9 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 10 調査成果の一部は、現地説明会（2016年6月26日開催）、埋文事業団の年報（2014・2015年度）、広報誌『埋文にいがた』No.96 で公表しているが、本書をもって正式な報告とする。
- 11 自然科学分析は、株式会社バリノ・サーヴェイに委託し、その結果を第Ⅶ章に掲載した。ただし、分析データの一部は省略した。
- 12 第Ⅶ章を除く執筆は小野本敦・阿部友晴（埋文事業団）、秋山泰利・湯原勝美（株式会社ノガミ）があたり、編集は小野本が行った。分担は以下のとおりである。
小野本：第Ⅰ章2 B 2）・2 C、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅴ章、第Ⅵ章1、第Ⅶ章
阿部：第Ⅰ章1・2 A・2 B 3）・2 D
秋山：第Ⅰ章2 B 1）、第Ⅳ章
湯原：第Ⅵ章2
- 13 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集は有限会社不二出版に委託した。
- 14 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚く感謝申し上げる。（敬称略、五十音順）

古澤愛史 村上章久 阿賀野川土地改良区 阿賀野市建設課 阿賀野市生涯学習課

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	2
A 試掘調査	2
B 本発掘調査	3
1) 2014年度	3
2) 2015年度	3
3) 2016年度	4
C 整理作業	4
D 調査体制	5
1) 試掘調査	5
2) 本発掘調査	5
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	7
1 遺跡をめぐる地理的環境	7
2 中世の遺跡	7
3 古代の遺跡	10
第Ⅲ章 調査の概要	11
1 グリッドと調査区の設定	11
2 基本層序	11
3 本書の記述方針	12
A 遺 構	12
B 遺 物	13
第Ⅳ章 2014年度の調査	14
1 遺 構	14
A 概 要	14
B 中世の遺構	14
C 古代の遺構	14
1) 竪穴建物	14
2) ピ ッ ト	15
2 遺 物	15
A 概 要	15
B 古代の遺物	16
第Ⅴ章 2015年度の調査	17
1 遺 構	17
A 概 要	17
B 近世の遺構	17
1) 土 坑	17
2) 溝	17

C	中世の遺構	18
1)	掘立柱建物	18
2)	井戸	18
3)	土坑	18
4)	溝	19
5)	性格不明遺構	20
D	古代の遺構	20
1)	土坑	20
2)	溝	20
3)	性格不明遺構	21
2	遺物	21
A	概要	21
B	土器・陶磁器・土製品	21
C	石製品	22
D	金属製品	22

第VI章 2016年度の調査

1	遺構	23
A	中世の遺構	23
1)	概要	23
2)	井戸	23
3)	土坑	25
4)	ピット	26
B	古代の遺構	26
1)	概要	26
2)	竪穴建物	26
3)	竃土跡	28
2	遺物	28
A	中世の遺物	28
1)	概要	28
2)	土器・陶磁器	28
3)	石製品	30
4)	金属製品	30
B	古代の遺物	30
1)	概要	30
2)	土器・陶磁器	30

第VII章 自然科学分析

はじめに	31	
1	試料	31
2	放射性炭素年代測定	31
A	試料	31
B	分析方法	31
C	結果	32
D	考察	33
3	炭化種実同定	33
A	試料	33
B	分析方法	33
C	結果	35
1)	SE1621	36
2)	SE1613	36
3)	SE1606	36
4)	SE1620	36
5)	P1608	38
6)	SI1630 カマド	38

D 考 察	42
1) 栽培植物	42
2) 周辺植生	44
4 骨 同 定	44
A 試 料	44
B 分析 方法	44
C 結 果	44
1) SE1621	45
2) SE1613	45
3) SE1606	45
4) SE1620	45
D 考 察	45

第七章 調査のまとめ	47
1 中世の調査成果	47
A 中世の柄目木遺跡	47
B 押印を有する壺器系陶器について	48
2 古代の調査成果	49
A 古代の柄目木遺跡	49
B 新潟平野周辺における古代の竪穴建物	49
〈要 約〉	53
〈引用・参考文献〉	54
〈観 察 表〉	57

挿 図 目 次

第 1 図 阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置	1	第 15 図 古代の遺物接合関係	27
第 2 図 試掘トレンチ位置と各年度本発掘調査 実施範囲	2	第 16 図 暦年較正結果 (1)	34
第 3 図 周辺の地形と遺跡分布	8	第 17 図 暦年較正結果 (2)	34
第 4 図 白河荘の範囲と地域区分	9	第 18 図 マメ類炭化種子のサイズ頻度分布	40
第 5 図 柄目木遺跡と下ノ橋館跡	9	第 19 図 炭化種実	43
第 6 図 基本層序	11	第 20 図 出土骨	45
第 7 図 『柄目木遺跡Ⅱ』の時期区分	12	第 21 図 小甕 (82) 底部外面の炭化物	47
第 8 図 遺構の平面・断面形態の分類	13	第 22 図 珠洲焼片口跡 61 の接合状況と 二次利用模式図	47
第 9 図 遺構覆土の堆積状況の分類	13	第 23 図 珠洲焼片口跡 61 の生産から廃棄まで	48
第 10 図 SB300 模式図	18	第 24 図 簾状文の分類と出土例	48
第 11 図 土師質土器の法量分布	21	第 25 図 施文部位の比較	49
第 12 図 井戸覆土模式図	23	第 26 図 古代竪穴建物の存在形態の諸類型	50
第 13 図 中世の遺物接合関係	24	第 27 図 新潟平野周辺における古代竪穴建物の 分布	52
第 14 図 遺構間接合資料の垂直分布	25		

表 目 次

第 1 表 中世の遺跡	7	第 6 表 炭化米の粒大・粒形	39
第 2 表 分析試料一覧	31	第 7 表 マメ類炭化種子のサイズ	40・41
第 3 表 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果	33	第 8 表 検出分類群一覧	44
第 4 表 炭化種実同定結果	37・38	第 9 表 骨同定結果	45
第 5 表 炭化種実出土状況	39	第 10 表 新潟平野周辺の古代竪穴建物	51

図 版 目 次

【図面図版】

図版 1	遺跡全体図
図版 2	2014・2016 年度 調査区全体図 (中世)
図版 3	2014・2016 年度 調査区全体図 (古代)
図版 4	2014 年度 遺構個別図
図版 5	2015 年度 調査区全体図・遺構個別図 (1)
図版 6	2015 年度 遺構個別図 (2)
図版 7	2015 年度 遺構個別図 (3)
図版 8	2016 年度 遺構個別図 (中世 1)
図版 9	2016 年度 遺構個別図 (中世 2)
図版 10	2016 年度 遺構個別図 (中世 3)
図版 11	2016 年度 遺構個別図 (古代)
図版 12	2014 年度 出土遺物
図版 13	2015 年度 出土遺物
図版 14	2016 年度 出土遺物 (中世 1)
図版 15	2016 年度 出土遺物 (中世 2)
図版 16	2016 年度 出土遺物 (中世 3・古代)

【写真図版】

図版 17	2014 年度 SI1410・1411
図版 18	2014 年度 調査区全景, SI1410・1411
図版 19	2015 年度 1 区全景, SB300, SK1501・1508・1518・1521・1525
図版 20	2015 年度 SK1526, SD255・330・1502・1514, SX1509・1519
図版 21	2015 年度 2 区全景, SE1530, SK1531・1578・1579, SD1532, SX1573
図版 22	2016 年度 調査区遠景 (古代面)、基本層序
図版 23	2016 年度 中世面全景, SE1606・1613
図版 24	2016 年度 SE1613・1620・1621
図版 25	2016 年度 SE1626, SK1610・1612, P1603・1608, SI1411
図版 26	2016 年度 SI1630, SF1628, P1632
図版 27	2014 年度 出土遺物
図版 28	2015 年度 出土遺物
図版 29	2016 年度 出土遺物 (中世 1)
図版 30	2016 年度 出土遺物 (中世 2)
図版 31	2016 年度 出土遺物 (中世 3・古代)

第I章 序 説

1 調査に至る経緯

国道49号は、太平洋側の福島県いわき市から日本海側の新潟市を結ぶ、物流・文化交流の大動脈である。新潟県内においては、新潟市と沿線市町の相互交流を支える幹線道路であるとともに、地域の生活道路としても重要な役割を果たしている。

国交省北陸地方整備局新潟国道事務所が2014年3月に作成した阿賀野バイパス事業資料によれば、阿賀野市保田から同市中央町1丁目間は19,800台/日の交通量があり、大型車が13.1%を占める状況にある。しかし、現道は阿賀野市の市街地を通過しており、かつ幅員が狭小なため、その交通量に対応できず、交通混雑・騒音・事故等、都市機能や生活環境に与える影響が問題となっている。これらの諸問題を解決するために安田バイパス・水原バイパスが計画された(第1図)。

2004年4月1日、安田町・京ヶ瀬村・水原町・笹神村が合併し阿賀野市(人口約48,000人)が誕生した。この合併に伴い、安田バイパス(延長5.6km)と水原バイパス(延長8.1km)を合わせて「阿賀野バイパス」と呼称することとなった。このうち、阿賀野(安田)バイパス(阿賀野市六野瀬～同市寺社)については、1985年11月19日までに六野瀬方面から延長4.3km分、2006年11月24日に寺社までの延長1.3kmが開通し、暫定2車線が既に供用されている。

阿賀野(水原)バイパスは1999年の都市計画決定から2005年度に工事着手に至った。国交省から阿賀野(水原)バイパス17工区(阿賀野市月崎(国道460号線)～同下黒瀬)の試掘調査の依頼を受けた県教委は、2007年度に埋文事業団に調査を委託した。この試掘調査により、3か所で古代・中世の遺構・遺物を検出し、柄目木遺跡・村前東A遺跡・村前東B遺跡として周知化した。

その後、国交省・県教委・埋文事業団の三者で遺跡の取り扱いについて協議し、2008・2009・2011年度に柄目木遺跡の本発掘調査を行うこととなった。

また、2011年度の調査成果から県教委は、遺跡が市道京ヶ島町道線下(以下、市道)及び隣接する水路下に延伸することを確認し、カルバートボックス工事に先立ち本発掘調査が必要であると報告した。同時に、2011年度調査区北東部に



第1図 阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置
(国土地理院発行「新潟」「新津」1:60,000 原図)

位置し、道路法線に対し斜位に位置する農道下についても本発掘調査が必要であると報告し、この部分は2014年度に調査を行った。

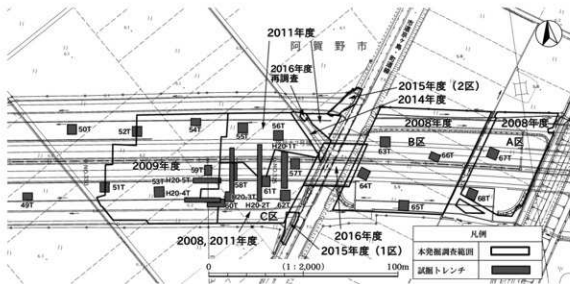
カルバートボックス工事範囲の調査を行うにあたり、市道及び用水路を調査対象地の外側に切りまわす必要が生じた。そこで2015年度には、用水路の仮設により遺跡に影響が及ぶ範囲を先行して調査した。続く2016年度には、用水路・市道を切り回し（仮設市道下は調査対象外）、カルバートボックス工事範囲の調査を行った。

2 調査と整理作業

A 試掘調査

バイパス事業の進展に合わせ国交省は2003年3月、県教委に事業地内の遺跡の有無を照会した。県教委は、埋文事業団に遺跡分布調査を依頼した（平成15年3月27日付け教文第1319号）。埋文事業団は、2003年12月に水原町寺社から京ヶ瀬村下黒瀬間8.1kmの遺跡分布調査を実施した。分布調査の結果、周知の遺跡は事業地に含まれていなかったが、23か所で古代を中心とした土器を採集し、未知の遺跡の存在が予想された。このことから水原バイパス事業地のほぼ全域、約470,000m²において試掘調査が必要であると県教委に報告した。

柄目木遺跡に関わる試掘調査は、2007年7月5日～8月10日（実質23日）に実施した。阿賀野市下黒瀬から小里までの調査対象面積199,260m²に対し、96か所のトレンチ（以下、「T」とする。）を任意に設定し調査した。実質調査面積は2,147m²で確認率は1.1%である。旧小里川の左岸から市道を挟んだ55Tから68Tの範囲7,700m²について古代の遺構と遺物（須恵器・土師器）を検出したことから本発掘調査が必要であると県教委に報告した。ただし、市道の西側55T～62Tの範囲（C区）には遺物包含層が残存せず、遺構・遺物の時期が不明で遺跡の時期を確定できないことから、本発掘調査と並行して確認調査を行い、取り扱いを決めることとなった（第2図）。遺跡名は小字名から「柄目木遺跡」とし、周知化した。



第2図 試掘トレンチ位置と各年度本発掘調査実施範囲

B 本発掘調査

2014年度の調査は、民間調査組織を埋文事業団が監理する形態で実施した。2015・2016年度の調査は、埋文事業団職員を調査担当者とし、一部の業務を発掘調査支援組織に委託する形態で実施した。以下に各年度の現地作業と最終年度の整理作業の経過を記す。

なお、2016年度に、2014年度との重複部分を調査中、2014年度の最終調査面が古代下層（Ⅵ層。基本層序は第三章を参照）に達していない疑いが生じた。このことは、重複部分を若干掘り下げた地点から遺物が出土し、さらにピットが検出されたことで決定的となった。測量士が成果簿を再点検したところ、2014年度の調査で使用した標高値が実際より10cm低く設定されていたことが判明した。結論的には、2014年度にはほぼ古代上層（Ⅴ層）の上面までしか調査を行っていなかったことになる。本書に使用した図版類は標高値を修正して掲載しているが、以下の調査経過は当時の作業の記録としてそのまま掲載する。事実誤認の可能性のある箇所は下線で示した。

1) 2014年度

9月28日、本発掘調査に伴う起工測量を行い、基準点を打設した。10月1日午前、現況測量を行い、表土掘削を開始した。Ⅲ層上面（中世の遺構確認面）で遺構精査を行い、46H22グリッドと46I1グリッドでピット2基を検出した。埋土はⅡb層ないし、Ⅱb層の色調をやや暗くした色調であることから、本来の掘り込みはⅡb層からⅢ層直上と考えられ、中世の遺構と認識した。10月9日、中世の遺構掘削を終了した。10月10日、完掘状況の全景写真を撮影し、平面測量を行った。

10月15日から間層の人力掘削に入り、10月20日からⅤ層（古代遺物包含層）の掘削を行った。46Hグリッドで、Ⅴ層出土の遺物が一定の範囲で認められた。遺構検出の際の指標にもなる考え、即日の取り上げをせず、養生して原位置に留め、周辺の遺構精査を繰り返し行った。10月27日、Ⅴ層（古代遺構確認面）45F・Gグリッドでピットを検出し、サブトレンチを設定し、遺構掘削を開始した。10月28日、焼土粒・炭化物・遺物の分布状況により竪穴建物SI1410とSI1411を認識した。10月29日、サブトレンチを設定し、順次、竪穴建物の掘削を開始した。10月31日、ピットの掘削と竪穴建物の機能面までの掘削を終了し、全体写真の撮影を行った。11月4・5日、竪穴建物の加工面までの掘削を行った。11月5日午後、すべての遺構掘削を終了し、平面測量の後、県教委による終了確認を受けた。

11月6日午前、SI1410の主柱穴の検出とSI1410とSI1411の床貼りの構架材と思われる灰白色粘質シルトの由来層を検出する目的で、SI1410及びその周辺を1.5m程度重機で掘り下げたが、検出できなかった。これをもって本発掘調査は終了した。同日午後から埋戻しを行った。SI1411は、調査区外東側に延びていることから、県教委との協議により、塩化ビニールシートを敷き、川砂で埋め戻した。11月10日、埋め戻し作業と並行して用水側溝据付（復旧）を行った。11月12日、農道の復旧を完了した。

2) 2015年度

調査区が南北2か所に分かれるため、水路上流側（南側）を1区、下流側（北側）を2区とした。周辺の状況から1区は中世、2区は古代の土地利用を予測して調査に臨んだ。

8月5日より調査区の設定や現地の草刈り、資機材搬入などの準備工を開始し、7日から表土掘削、17日から遺構検出に着手した。1区は表土直下に中世の遺構の存在が予測されたことから人力で表土掘

削を行った。なお、1区には使用中の小水路が存在したため、まずはこれを残して調査を開始し、8月26日に撤去して調査区を拡張した。1区では2009年度に調査された溝の延長部や掘立柱建物の一部など、中世の遺構を検出した。2区では中世の溝・井戸、古代の土器集中部・土坑・小穴等を検出した。

9月8日に1区の調査が終了し、9日に県教委による終了確認を受けた。2区については、古代の遺構と地山との見分けがつきにくく、調査が難航したため、12日まで期間を延長した。16日に1・2区とも埋め戻しを完了した。

3) 2016年度

4月1日から準備工を開始し、4月18日から重機による表土掘削を進めた。4月25日から作業員を投入し、調査区のはぼ東西方向に土層確認用のベルトを設定し深さ1mのトレンチ掘削を行った。

中世の遺構は、IIa層上面、IIb層上面、III層上面で検出した。井戸5基などを検出し、遺物は珠洲焼や土師質土器などが出土した。5月25日に、中世の遺構・遺物が集中する調査区の南側を中心に、IIb層上面の撮影を行った。III層上面まで調査を完了した後、遺構の見落としの有無を確認するためIV層上面まで掘り下げ、5月31日に中世面の全体撮影を行った。6月1日に県教委による中世の調査の終了確認を受けた。

古代の遺構・遺物は、調査区西側で検出した。V層上面で遺物が集中的に出土した範囲については、若干掘り下げたところでSI1630のプランを認識した。その後、VI層まで掘り下げ、ビット数などを検出した。なお、古代の調査と並行してVI層上面より5cm程度低い旧水路の基底部を精査したが、遺構は検出されなかった。

6月21日に県教委による古代の調査の終了確認を受けた。また、同日、空中撮影を行った。6月26日には、現地説明会を開催し、76名の参加を得た。その後、古代の遺構検出域をさらに掘り下げるとともに、中世の井戸を重機で断ち割り、掘り残しがないことを確認し、調査を終了した。

6月29日、県教委の立会いのもとに2014年度調査区の一部を再度掘削した。その結果、調査を終了した面より下層から古代の土器片が出土したため、下層が未調査であったことが確定した。しかし、出土遺物はわずかで遺構も検出されなかったため、それ以上の拡張は行わず記録を取って埋め戻した。7月4日に現地で国交省へ現場の引き渡し手続きを行った。

C 整理作業

整理作業は、2014・2015年度は遺物の洗浄・注記等の基礎的な作業を現地で発掘調査と並行して進めた後、年度末まで遺構図面の整理や遺物の実測等の作業を行った。2016年度にはこれに加えて3か年分の報告書の作成を行った。編集作業は、有限会社不二出版に各種原稿・原図・レイアウト図案を支給し、印刷用データで納品を受け、2016年度末に印刷・刊行した。

D 調査体制

1) 試掘調査

【2007年度】

調査期間	2007年7月5日～8月10日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）		
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	木村 正昭（事務局長）	調査総括	藤巻 正信（調査課長）
管理	斎藤 栄（総務課長）	調査担当	田海 義正（担当課長代理）
庶務	長谷川 靖（総務課班長）	調査職員	田中 一穂（嘱託員）

【2008年度】

調査期間	2008年7月23日～7月25日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）		
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	木村 正昭（事務局長）	調査総括	藤巻 正信（調査課長）
管理	斎藤 栄（総務課長）	調査担当	高橋 保雄（担当課長代理）
庶務	長谷川 靖（総務課班長）		

【2009年度】

調査期間	2009年9月7日～9月11日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）		
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	木村 正昭（事務局長）	調査総括	藤巻 正信（調査課長）
管理	斎藤 栄（総務課長）	調査担当	田海 義正（担当課長代理）
庶務	松原 健二（総務課班長）		

2) 本発掘調査

【2014年度】

調査期間	2014年10月1日～11月6日		
整理期間	2014年11月7日～12月24日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 高井 盛雄）		
調査	公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	土肥 茂（事務局長）	調査総括	高橋 保（調査課長）
管理	熊倉 宏二（総務課長）	監理	田海 義正（担当課長代理）
庶務	仲川 国博（総務課班長）		
支援組織	株式会社ノガミ		
指導	戸根 与八郎		
調査担当	秋山 泰利		
現場代理人	戸田 哲雄		

2 調査と整理作業

調査員 福山 俊彰 大越 直樹
補助員 熊野 敦子

【2015年度】

調査期間 2015年8月17日～9月12日
整理期間 2015年9月14日～2016年3月31日
調査主体 新潟県教育委員会（教育長 高井 盛雄）
調査 公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括 土肥 茂（事務局長） 調査総括 鈴木 俊成（調査課長）
管理 松田 祐（総務課長） 指導 沢田 敦（担当課長代理）
庶務 仲川 国博（総務課班長） 調査担当 小野木 敦（調査課班長）
支援組織 株式会社古田組
現場代理人 陶山 詔行
調査員 城前 喜英 渡邊 大士
補助員 岡村 彩子 笹井 彩

【2016年度】

調査期間 2016年4月1日～6月29日
整理期間 2016年6月30日～11月30日
調査主体 新潟県教育委員会（教育長 池田 幸博）
調査 公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括 土肥 茂（事務局長） 調査総括 鈴木 俊成（調査課長）
管理 松田 祐（総務課長） 指導 沢田 敦（担当課長代理）
庶務 星野 美奈（総務課班長） 調査担当 小野木 敦（調査課班長）
調査職員 阿部 友晴（主任調査員）
支援組織 株式会社ノガミ
現場代理人 戸田 哲雄
調査員 湯原 勝美
補助員 石倉 栄輝 浅井 宏子 坂口 理恵

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡をめぐる地理的環境

柄目木遺跡が所在する阿賀野市の地勢は、東の五頭連峰と笹神丘陵、西の阿賀野川とその支流が造り上げた沖積平野によって構成される。五頭連峰の西側には、標高100m前後の笹神丘陵が約18kmにわたって広がり、五頭連峰と笹神丘陵の間には、標高30～40m前後の村杉低地帯と呼ばれる狭長な平地が南北方向に延びている。また、笹神丘陵の南西には標高約20～30m前後の上野林段丘がある。五頭連峰に源流を発する折居川・大荒川・安野川・都辺田川などの河川は村杉低地帯と笹神丘陵を横断して北西・西方向へ流れ、これらが運搬する土砂が五頭山西麓・笹神丘陵裾部に扇状地を形成している。

阿賀野川は、長い年月をかけて氾濫を重ねながら徐々に東から西へと流路を変え、沖積平野に旧河道の痕跡とこれに沿う自然堤防を残してきた。柄目木遺跡周辺においても、中世以降3回の変遷を経て現在の流路に落ち着いた様子が地形からうかがわれる。第3図に示した旧河道①は「百津湯」として近世の絵図や現在の地名にその名をとどめている。

2 中世の遺跡

白河荘は、こうした自然条件のもとに成立した中世荘園である。中野豈任は、白河荘の四至と史料に見える上条（水原・船江条、山浦四箇条）、下条（安田条）を第4図のように比定しており〔中野1976〕、これに従って柄目木遺跡は上条に位置することになる。

文献史料から見た白河荘の成立と展開については先行研究や自治体史に詳しい〔荻野1986、樋口2004、田村2004〕。これらによれば、白河荘の在地支配の流れは、城氏が活躍した12世紀以前、大見氏が地頭として入部以降の13世紀～14世紀、越後守護上杉氏の一族が山浦条に進出する14世紀後半以降に区分できる。柄目木遺跡に集落が営まれた期間は、大見氏の時代とほぼ並行する。この時代の拠点的な集落である塚塚遺跡（64）では、阿賀野川の旧河道①と水原市街地方面をつなぐ幅員6mの道路跡と

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	新日本	古代・中世	18	町道上	中世	35	日沢沢中野集落	鎌倉～室町	53	北郷	平安～南北朝
2	滝沢屋敷跡	室町	19	岩倉場	中世	36	道合野中野集落	鎌倉～室町	53	六野集落跡	南北朝～室町
3	字屋敷跡	不明	20	石堂	中世	37	今板	室町	54	赤山山内集落	中世
4	城山跡	室町	21	下条跡	室町	38	村杉城跡	室町	55	藤原川	古墳・古代・中世
5	橋越跡	室町	22	水原跡	室町	39	野地城跡	室町	56	谷本杉	平安・鎌倉
6	長崎（城館）	室町	23	山口野中	縄文・古代・中世	40	山浦城跡	室町	57	塚塚	古代・中世
7	細池寺道上	平安・中世	24	下ノ橋跡	室町	41	福越跡	室町	58	大野瀬	縄文・弥生・中世
8	愛宕塚	縄文・平安・中世	25	山口	弥生・古代・中世	42	大空城跡	室町	59	狐塚	弥生
9	大間跡	中世	26	二道橋	弥生・古代・中世	43	鶴屋甲	平安・中世	60	真木山田	古代・中世
10	長崎跡	室町	27	七島跡	不明	44	分田跡	室町	61	真木山C	古代・中世
11	藤原	古墳～中世	28	藤岡城跡	南北朝	45	大坪	縄文・弥生・平安・中世	62	村前東A	古代・中世
12	北沢	中世（鎌倉）	29	女堂跡	室町	46	物見山磐跡	不明	63	村前東B	中世
13	長兵工沢跡	室町	30	免堂跡	室町	47	藤崎経塚群	不明	64	塚塚	縄文・弥生・古代・中世
14	藤林安堂跡	室町	31	免沢中世集落	室町	48	手代山磐跡	不明	65	新町	平安・鎌倉・室町
15	土居内西	平安・中世	32	藤原兵沢跡	室町	49	滝山	室町	66	養久	平安
16	城館跡	不明	33	曾中央堂跡	鎌倉	50	安田城跡	室町～江戸	67	青根	縄文・古墳・古代・中世
17	大野	中世	34	経沢中世集落	鎌倉～室町	51	赤松山城跡	不明	68	藤木	平安・中世

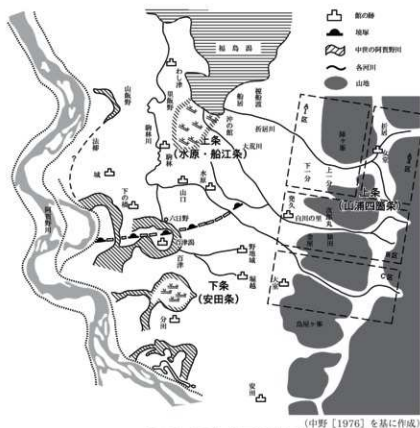
第1表 中世の遺跡



第3図 周辺の地形と遺跡分布

(国土地理院地形図「新発田」「新津」「津川」1:50,000を改変)

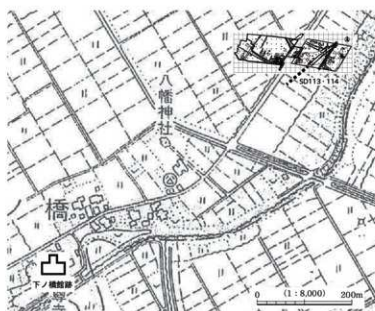
(建設省北陸地方建設局「阿賀野川水害地形分類図」・新潟県教育委員会「福島島」近世の干拓地を合成、改変)



第4図 白河荘の範囲と地域区分

それに方向を描いた建物群、やや離れた位置で堀に囲まれた居館などを検出し、川湊と結ばれた町並みが明らかとなった〔荒川ほか2012・2016、古澤ほか2011〕。居館付近の大型井戸SE1007は井戸側の年輪年代学的分析によって1301年に伐採された木材で構築されたことが判明し、町場の形成への大見氏の関係が想定された〔荒川ほか2012〕。

白河荘域には中世の館跡が数多く存在する。堀越館跡(41)では、火災に伴う廃土坑から14世紀



第5図 橋目木遺跡と下ノ橋館跡(水原町全図を改変)

後半～15世紀前半の良好な一括資料が得られ、応永の大乱における堀越要害の落城(1427年)との関連が想定できる〔小田ほか2001〕。橋目木遺跡の周辺では、南西に約500mの地点に下ノ橋館が立地する。橋目木遺跡の2008年度調査では、覆土に多量の礫を含み、幅3～5mを保ち70mにわたって続く2条の溝(SD113・SD114)が検出されている〔佐藤ほか2010〕。両溝は八幡神社の参道前を通過して下ノ橋館へ向かうことから、石敷きの道路遺構の可能性が指摘できる(第5図)。ちなみに、八幡神社を天保15年

(1844) に建て替えた際の史料には、源頼義の参詣や建武年間の兵乱による破壊などが記されている〔京ヶ瀬村 1969〕。真偽は不明だが、少なくとも建武年間は柄目木遺跡の年代と矛盾せず、八幡神社へ至る道が存在した可能性はある。柄目木遺跡と類似する道路遺構は境塚遺跡や新町遺跡でも見つかっており、拠点集落や城館が水路と陸路によって結びついていた状況が復元できる〔小野木 2016〕。

管仲丘陵では諸種の生産活動が活発に行われた。窯業は、13 世紀前半に須恵系陶器を生産した背中炭窯跡 (33) があり、続いて 13 世紀中葉から 14 世紀初頭にかけて権兵衛窯跡 (32)、赤坂山中世窯跡 (54)、狼沢中世窯跡 (31) などで瓷器系陶器が生産された。阿賀野川河岸に位置する六野瀬遺跡 (58) は赤坂山中世窯跡の製品の積み出し場と考えられる〔鶴巻 1992〕。また、時期は定かでないが製鉄遺跡も多く分布しており、鍛冶に関わると考えられる木炭窯も存在する。

中世以来雲峰として崇められた五頭連峰の山麓には華報寺石造物群をはじめ経沢中世墓域 (34)、目洗沢中世墓域 (35)、蓮台野中世墓域 (36) など墓地・宗教関連遺跡が展開する。文明九年 (1477) に再興された華報寺の起源は明らかでないが、経沢中世墓域からは輸入陶磁器等を用いた蔵骨器が、目洗沢中世墓域からは 14 世紀初頭前後の紀年銘をもつ経筒や蔵骨器が見つまっている。また、葬送に関する遺構としては、柄目木遺跡でも見つまっている火葬土坑の発掘例にも注目できる〔加藤ほか 2013〕。

3 古代の遺跡

律令期の柄目木遺跡周辺は越後国沼垂郡に属したと考えられる。『倭名類聚抄』によれば、沼垂郡には足羽・沼垂・加地の 3 郷があったとされるが、所在地については諸説あり一致を見ない。

福島潟の東岸に立地する曽根遺跡 (66) は、掘立柱建物を主体とする奈良・平安時代の大規模集落遺跡であり、円面硯、墨書土器、木簡などの存在から官衙関連遺跡と考えられる。福島潟へ流れ込む小河川の上流に位置する管仲丘陵には古代の窯業・製鉄遺跡が多く分布し、曽根遺跡ではその焼き損じも出土していることから、手工業製品の流通拠点としての役割も想定される〔鶴巻 2015〕。

発久遺跡 (67) からも大量の木簡や墨書土器が出土しており、特に健児の在動を示す木簡の存在が注目される〔相澤 2004〕。また、「水人」と記された墨書土器の存在は、遺跡と水運との関連を示唆する。遺跡は五頭山麓を発する小河川により福島潟南岸と結ばれており、曽根遺跡と同様、水運と結びついた官衙関連遺跡と考えられる。

阿賀野市域でも阿賀野川の氾濫原に近い旧水原町・京ヶ瀬村のエリアでは、古代の遺跡分布は福島潟周辺に比べ希薄であったが、阿賀野バイパス関連の発掘調査により少しずつ様相が判明してきた。旧小里川を挟んで柄目木遺跡の東側に位置する山口遺跡 (25) では、石製巡方や国内で初例となる唐三彩の玩具が出土した〔荒谷ほか 2010、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2011〕。蕪木遺跡 (68) では、桁行 6 間で総柱の大型掘立柱建物を検出した〔公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015〕。また、民間開発に伴い発掘調査が行われた三辺稲荷遺跡 (26) では、竪穴建物から多くの墨書土器や緑釉陶器が出土した〔阿賀野市教育委員会 2008〕。これらの遺跡は、官衙関連あるいは有力者の居住地と推定される。一方、柄目木遺跡や村前東 A 遺跡 (62) 〔加藤ほか 2010〕は竪穴建物を主体とする小規模な集落遺跡であり、一般的なムラと評価できよう。なお、古代の遺構を伴う遺跡でなくても、発掘調査において古代の土器は普遍的に出土していることから、バイパス事業地の周辺に多くの集落が存在する可能性は高いと言える。

第三章 調査の概要

1 グリッドと調査区の設定

既往の調査区との継続性の観点から、2008年度調査以来使用している世界測地系に準拠したグリッドを踏襲する。大グリッドには、西から東へ向けて算用数字(1, 2, 3...60)が、北から南へ向けてアルファベット大文字(A, B, C...M)が与えられている。大グリッドは2m四方に分割して25個の小グリッドとし、北西隅から南東隅へ1~25の番号を付した。グリッド名はこれらの記号を組み合わせ、大グリッドは「47I」、小グリッドは「47I15」のように表記する。なお、このグリッドは柄目木遺跡の西に位置する村前東A遺跡を基準(1A杭)に設定しているため東西に非常に長く、柄目木遺跡の調査範囲は34列~58列に相当する。今回報告する調査区は43~48E~Mに位置し、ほぼ中心にあたる46Jグリッドの座標はX=203820.000(北緯37度50分5.7640秒)、Y=61250.000(東経139度11分45.3925秒)である。

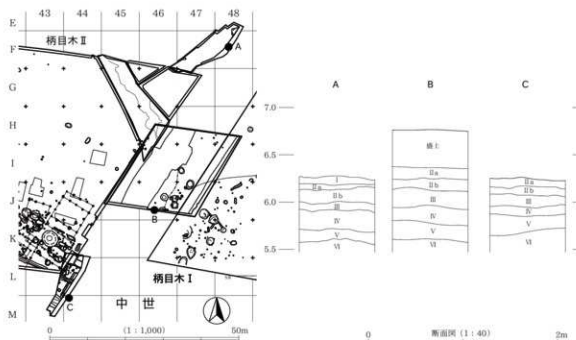
2 基本層序

『柄目木遺跡Ⅱ』に従い、次のように分層した。

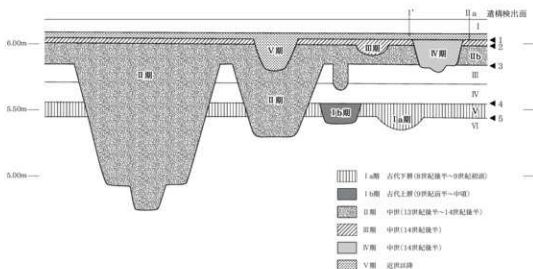
I 層：暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)水田耕作土。

IIa層：灰黄褐色砂質シルト(10YR6/2)霜降り状の模様が見られる。しまりは強い。

IIb層：にぶい黄褐色砂質シルト(10YR5/4)炭化物をごくまばらに含む。



第6図 基本層序



第7図 『栢目木遺跡Ⅱ』の時期区分

Ⅲ 層：にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) Ⅱb層よりやや明るい色調。霜降り状の模様は見られず、均質。

Ⅳ 層：にぶい黄褐色粘質シルト (10YR5/4) 均質で、しまりが弱い。

Ⅴ 層：灰黄褐色シルト (10YR4/2) 遺構の周辺では炭化物・焼土粒が認められる。

Ⅵ 層：黄褐色粘質シルト 均質でしまりが強い。

『栢目木遺跡Ⅱ』では、遺構検出層位の違いから、古代を2時期、中世を3時期に細分している(第7図)。しかし、第1章で述べたように、『栢目木遺跡Ⅱ』でIa期の所産とした8世紀後半～9世紀初頭の竪穴建物を2014・2016年度調査ではⅤ層上面で検出している。また、2016年度調査においてⅡb層上面で検出した遺構は、分布状況や出土遺物の年代観から『栢目木遺跡Ⅱ』のⅡ期に相当する可能性が高い。このように今回報告する調査区では従来に比べ相対的に高い層位で遺構を把握できたことになる。これは、2014年度の標高値の誤り(第1章参照)という偶然にも一因があるが、既往の調査成果から複数の検出面の存在を予測して調査に臨んだことや、調査区が狭く壁セクションの参照が容易であったことも影響していると思われる。いずれにしても、検出層位の差を単純に時期差に置換することはできなくなったため、本書では古代・中世以下の時期の細別は行わず、遺構検出層位を適宜記述することにした。

3 本書の記述方針

A 遺 構

調査年度ごとに、新しい時期の遺構から順に記述する。遺構名は種別の略号(掘立柱建物=SB、井戸=SE、土坑=SK、ピット=P、溝=SD、性格不明遺構=SX、焼土跡=SF)と番号を組み合わせで表記した。遺構には種別に関わらず通し番号を与え、調査年度の下二桁をとって2014年度を1400番台、2015年度を1500番台、2016年度を1600番とした。

土層の観察は『新版 標準土色帖』(2003年度版)に基づき行った。含有物は10～20%を基準とし、これより少ない場合は「少量」「ごく微量」、多い場合は「多い」「非常に多い」等に区別した。また、含有物の粒径や状態(ラミナ状・ブロック状等)及び層の「しまり」「粘性」は、顕著な場合のみ記した。た

だし、調査年度や担当調査員により表記方法に若干の違いがある。

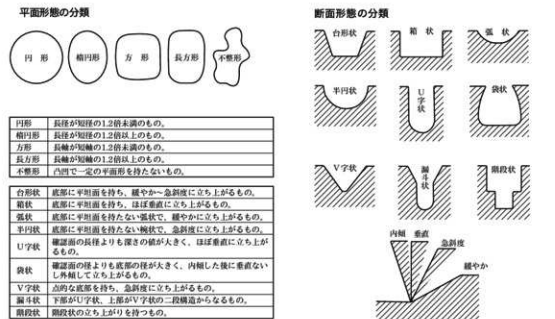
観察表における遺構の平面形態・断面形態・覆土の堆積状況の分類は第8図・第9図によって行った。遺構の切り合いによる新旧関係は不等号で表し、「>X」は当該遺構がXより新しいことを意味する。遺構平面形の主軸方向は、経線を基準として時計回りに20度振れるものは「N-20°E」と表現した。

図面図版は、1/1000の遺跡全体図、1/200の調査年度別調査区全体図、1/40の遺構平面図・断面図・エレベーション図を基本とし、それぞれスケールを添付した。写真図版は、本文中で解説した遺構を中心に掲載した。

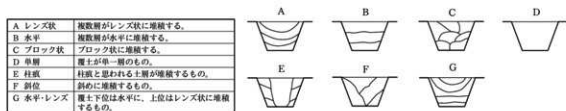
B 遺物

調査年度ごとに、新しい時期の遺物から順に記述する。調査年度によって遺物出土量が異なり、有効な記述方法が異なるため、器種別・遺構別などの具体的な記述順は各章の概要を参照されたい。遺物には、調査年度の古いほうから通して図版番号と個別番号を与えている。本文中で遺物を記述する際は、個別番号で表記する。なお、遺構間で接合した遺物については、観察表・図版では最も大きな破片を出土した遺構に帰属させた。

土器・陶磁器の器種分類や年代観などについては、貿易陶磁器は[山本 2000・2005・2010]、珠洲焼は[吉岡 1994]、瓷器系陶器は[小田 1999、鶴巻 1991・2005]、土師質土器は[水澤 2005・2007]、古代の土器は[春日 1999]を参考にした。



第8図 遺構の平面・断面形態の分類 [荒川・加藤 1999]



第9図 遺構覆土の堆積状況の分類 [荒川_{as} 2004]

第IV章 2014年度の調査

1 遺 構

A 概 要

中世の遺構はIV層中(上位)で検出した。これは、調査前現況である農道及び水田耕作に係るU字溝敷設によって削平され、遺構の下部が遺存していたことによるものである。遺構の覆土は、IIb層に由来するもので、本来の遺構検出面はIII層上面と考えられる。

古代の遺構は竪穴建物とピットである。2棟の竪穴建物は、直接の切り合い関係にはないものの、その規模・形態と位置関係から、若干の時期差が存在すると考えられる。なお、SI1411については、2016年度調査の所見も合わせてここで記述する。

B 中世の遺構

P1401とP1402(図版2)は、本来の掘り込み面が削平されていることから、遺構の深さは不明であるが、底面標高の差が4cm程度で、平面もほぼ同規模である。最深部間の距離が2.9mを測る。2008・2011年度調査で検出した側柱構造の掘立柱建物の柱間寸法が3mを超えるものもあることから、掘立柱建物を構成するピットの可能性がある。ただし、柱痕や柱の抜き取り痕は認められなかった。

C 古代の遺構

1) 竪 穴 建 物

SI1410(図版4・17・18)

45・46H、46Iグリッドに位置する。長軸4.4m、短軸3.4m(カマドの突出を除く)を測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。西隅はわずかに調査区外へ延びる。

覆土は、1層は径1mm以下の焼土粒が極微量、最大で約2cm角の炭化物が極微量含まれる。1層と3層の層界が機能面である。3層は炭化物や焼土粒が1層に比べて多く含まれ、土師器片が出土している。構築時に粘性のある土を混ぜたのだろうか、3層にはやや粘性のある灰白色シルトブロックと埋没後の覆土に供給された水分によるものと考えられる酸化鉄が多く含まれる。機能面は、硬化していない。加工面は凹凸がある。人力掘削での調査終了後、バックホウで掘削し、再度精査を行ったが、柱穴は確認できなかった。

カマドは南西辺のやや西寄りに位置する。遺存状態は悪い。にぶい褐色シルトブロック、焼土・被熱ブロック・炭化物の堆積層(天井部の崩落土)があり、これを除去すると焼土が約37×27cmでかなり硬化した状態で検出された。焼土・火床の範囲及びその中心は南西辺よりも内側に入り込んでいる。火床の掘り込みは最大5cmで、暗赤灰色を呈した被熱が認められる。カマド部分も貼床が認められ、床貼りののちに掘り込まれているが、加工面までは違っていない。機能面と火床面とのレベルを比較すると、火床面の方が高位である。

カマドの北東に床面からの深さ14cmのピットを検出した(SI1410-P1)。1層は焼土・被熱ブロックと

炭化物を多く含む緩やかに立ち上がるように堆積する。2層から土師器甕(6・7)が出土した。約10cm角の破片が重なるように内面を上にして出土している。覆土の状況や出土状況から、カマド内から掻き出した排土や不要となった煮炊き具を廃棄したものとする。

46H12・17グリッドに機能面からの深さ8cmの落ち込みが存在する(SI1410-P2)。検出当初は、焼土ブロックと炭化物を少量含む、貼床土に比べて暗い色調をしていることから、柱穴と考慮して断面観察を行ったが、明確な掘り込みは認められなかった。

遺物は覆土中に多いが、接合・復元が可能な遺物は機能面に多い。カマド左側(北側)の機能面から土師器鍋(4・5)・須恵器杯(2)、1層から土師器鍋(3)が出土した。5は、内面同士が向き合い、潰れたような状況で出土していることから、遺棄したものと判断する。カマド覆土から、土師器長甕片が出土している。遺構の存続時期は出土遺物の年代観から8世紀後半～9世紀初頭と考えられる。

SI1411 (図版4・17・18)

46H13～15、18～20グリッドに位置する。長軸3.5m、短軸3.4m(カマドの突出を除く)を測り、平面形態はやや南辺が短い隅丸の台形状を呈する。北東隅はわずかに調査区外へ延びる。

覆土は2層に分かれ、1層が自然堆積、2層が貼床と考えられる。加工面は凹凸がある。

カマドは西辺のやや北寄りに位置する。遺存状態は悪い。焼土ブロックと炭化物を微量含む覆土4層ブロックがカマドを覆うように充填されている。焼土は硬化しており、中央が窪んだボウル状をなしている。焼土・火床の範囲及びその中心は、西辺よりもやや内側に位置する。火床の掘り込みは約8cm認められる。火床の下部は約2cm被熱し、暗赤灰色を呈している。

カマドの右側(北側)に機能面からの深さ18cmの貯蔵穴を検出した(SI1411-SK1)。底部は平坦面を有し、ほぼ垂直に掘り込んでいる。遺構検出面で土師器長甕(11・12)が出土した。

遺物は、火床部右側(北東側)から土師器小甕(14)が機能面よりもやや浮いた位置で出土した。北西コーナー部では、須恵器杯(8・9)が機能面から出土した。

2) ビ ッ ト

16基検出した。覆土の堆積形状は3種に分類され、単層のものが3基、レンズ状が1基、柱痕が7基である。P1420(図版4)の覆土2層は、ほかのビットの柱痕に土質・粘性が類似することから、柱痕と判断した。上位に2層土が認められないのは、根入り部の地表面により近いところの腐食が著しかったものとする。根入らないものは、根入り部分が斜めの状態で土壌化した可能性も考えられるが、断面観察のために設定したサブレンチに大半を切られ不明である。

2 遺 物 (図版12・27)

A 概 要

出土量は、中世の土器が3点、古代の土器が浅箱(内寸:536×333×90mm)で1箱、金属製品が1点と少ない。中世の土器は珠洲焼で、1の壺を除き小片のため図示しないが、いずれもIIb層から出土している。古代の土器は土師器が多く、ほとんどが竪穴建物から出土したものである。古代の土器は8世紀後半～9世紀初頭に属する。金属製品は刀子である。以下、古代の遺物は遺構内・遺構外出土に分けて報告する。

古代の須恵器の胎土については[春日ら・2004]を参考に、A・Bに分類した(第VI章も同じ)。

胎土A群:胎土そのものが相対的に粗く、石英・長石・金雲母を多く含む。器面はざらついたものが一般的で、含まれる鉱物の粒子は金雲母を除くと比較的大きい。五頭山麓窯跡群のほか、村上市元山窯跡群、胎内市松山窯跡群、新発田市下小中山・貝屋窯跡群・ホーロック沢窯跡群で生産された須恵器に一般的に見られる。

胎土B群:胎土そのものが精良で、白色小粒子を多く含む。器面に黒色の斑点、吹き出しの見られるものが多い。器種によって胎土が異なり、無台杯と小型の有台杯は胎土が特に精良で器面は滑らかであるが、そのほかの器種は砂っぽくややざらついた胎土である。佐渡小泊窯跡群(やや離れた地点の大木戸窯跡も含む)で生産された須恵器と考えられる。

B 古代の遺物

SI1410(2~7) 2は須恵器杯である。胎土はA群である。ロクロの回転方向は右で、底部外面にヘラ切り痕が残る。3~5は土師器鍋である。3の口縁はロクロナデで整えられている。4・5の口縁端部は上方へつまみ上げられている。体部外面は二次焼成によってわずかに剥落している。4は内外面にハケによる調整が施される。体部外面は煤けており、頸部内面を境に口縁部と体部とで色調の違いが明瞭である。5は底部が緩やかな丸底で、安定して自立しない。体部外面は、帯状に煤けている。底部はススがとんでおり、頸部下にはススとスス酸化の境が明瞭である。カマドの掛け口にかけた使用痕だろうか。内面の痕跡は、外面のススとスス酸化に対応する。頸部内面には、水平にコゲが顕著に見られる。噴水線上のコゲと考えられる。

6・7はP1から出土した土師器長甕である。口縁端部はわずかに上方へつまみ上げられ、ロクロナデで整えられている。内外面にカキメによる調整が施されている。6は口縁端部~口縁内面の一部が雨漏れのように変色する。7は内面の一部が変色しており、その状態から焼成時の痕跡と思われる。

SI1411(8~12) 8・9は須恵器杯で、焼成不良で軟質である。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。9のロクロの回転方向は右回転で、底部外面はヘラ切り後にナデられている。10は土師器小甕で、器面の剥落が顕著である。口縁端部はわずかに上方へつまみ上げられている。器厚が薄いせいか断面がコゲたように変色するが、口縁部内面には噴水線上と思われるコゲが付着していることから使用時の痕跡である。

11・12はSK1から出土した土師器長甕である。口縁端部を上方へつまみ上げている。11は胴部が張らず、口縁は短い。被熱によるものだろうか、胴部外面の一部が剥落する。12は口縁部片で、口縁は緩やかに段を有する。内面は上方までコゲている。

遺構外出土遺物(13~15) 13は須恵器杯の口縁部片である。胎土はB群で、内面に黒色の斑点が見られる。口縁部に重ね焼きの痕跡が残る。14は土師器杯で、胎土には赤色粒子が顕著に見られる。15は、平棟造りの鉄製刀子である。切先側の刀身部と茎尻側の茎部を欠損する。木質(柄)は残存していない。身元は錆化し、身元幅や間の形状は不明である。

第V章 2015年度の調査

1 遺 構

A 概 要

1区では、近世の土坑2基・溝2条、中世の掘立柱建物1棟(柱穴2基)・土坑4基・溝4条・ピット15基、性格不明遺構2基を検出した。

近世の所産としたSK1508・1518、SD255・1505はⅡ層中で検出した遺構で、近世陶磁器が出土した。SD255は2008・2011年度調査のC区から続く溝である。重複する遺構との新旧関係はSD255>SD1505>SK1518、SD255>SK1518であり、最低3時期の変遷が認められることから、ある程度の時間幅を有すると考えられる。

このほかの遺構はⅢ層上面で検出したもので、中世の所産と考えられる。SB300の東妻の柱穴列(P12・13)とSD330はC区から続く遺構である。性格不明遺構としたのは浅い方形の掘り込みを有するSX1509とSX1519の2基である。これらはC区で検出されたSX279と形状・主軸方位が類似しており、関連性が想定できる。

2区では、中世の井戸1基・土坑1基・溝1条・性格不明遺構1基・ピット3基、古代の土坑3基・性格不明遺構1基、ピット39基を検出した。隣接地区の状況から中世の遺構・遺物がほとんど存在しないと想定されたため、調査期間が短いこともあり、V層の上面まで重機で慎重に掘削を行った。この過程で、中世の井戸(SE1530)、土坑(SK1531)を検出し、重機掘削と並行して調査した。その後、V層上面とⅥ層上面で古代の遺構を検出した。古代の遺構の覆土は、基本土層と酷似する含有物の少ない均質なシルト層を主体とする。遺構の検出は困難であったが、わずかに炭化物を含み、周辺より軟質であることを目安とした。V層上面で多数のピットを検出し、一部には柱の痕跡も認められたものの、調査区が狭小なこともあり配列は特定できなかった。

B 近世の遺構

1) 土 坑

SK1508 (図版6・19)

1区の43L10、44L6グリッドに位置する。西側はC区の開渠に切られる。底面は平坦で緩やかに立ち上がる。覆土は炭化物を多く含むにぶい黄褐色シルトの単層である。釘(37)が出土した。

SK1518 (図版6・19)

1区の44L12・17グリッドに位置し、東側は調査区外へ延びる。底面は平坦で急斜度で立ち上がる。覆土は2層に分かれ、底面付近に炭化物を多量に含む。1層から釘(38)が出土した。

2) 溝

SD255 (図版5・20)

1区の43L15、44L11・16・17グリッドに位置する。C区から直線的に延び、1区の中央を通過して

南東方向に続く。方向は北が約53度西へ傾く。断面形は漏斗状を呈し底面は平坦である。覆土は4層に分かれ、1層は現代の水田耕作土に類似することから、比較的最近まで埋まりきっていなかったと考えられる。土師質土器・珠洲焼、3層から肥前系磁器の皿(16)・椀(17)が出土した。

SD1505 (図版5)

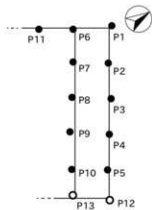
1区の43L10・15・20・44L6グリッドに位置する。方向は北が約34度東へ傾く。覆土は褐色シルトの単層である。油煙の付着した土師質土器の小皿(18)・泥面子(29)・肥前系磁器が出土した。

C 中世の遺構

1) 掘立柱建物

SB300 (図版6・19)

1区の44L1・6グリッドに位置する柱穴2基(P12・13)である。重複する遺構との新旧関係は、P12がSD1502、P13がSD1505・SK1508より古い。柱筋の延長方向に対応するビットが認められないことから、SB300の南東側妻柱と考えられ、建物の桁行は5間となる(第10図)。桁行の方向は、北が約57度西へ傾く。P12が下屋柱、P13が上屋柱に相当するが、深度はほぼ等しく、C区で検出された柱穴よりも20～30cm深い。P1～P11は隣接する柱間が桁行・梁行とも約2mであるのに対し、P5とP12、P10とP13の柱間は約1.5mとやや寸詰まりとなることから、南東面にも下屋の付く建物の可能性がある。P12の2層から釘が出土した。



第10図 SB300 模式図

2) 井 戸

SE1530 (図版7・21)

2区の48E23・24、48F3グリッドに位置する。IIb層上面から掘り込まれている。上面はSX1580とほぼ重複し、これより古い。東側半分が調査区外の水路側へ延びており、全容は不明であるが、平面形は円形と想定される。水路が倒壊する恐れがあったため、掘り込み面から約1.6m掘り下げたところで掘削を断念した。ボーリング調査によればさらに1.2m程度の深さがあるものと想定される。掘り下げた範囲では井戸側は存在しない。覆土は5層に分かれ、1～3層は周辺からの崩落土である。4・5層は炭化物をわずかに含むオリーブ灰色シルトとにぶい橙色シルトである。遺物は出土していない。

3) 土 坑

SK1501 (図版6・19)

1区の44L6・11グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。掘り込みは浅く、底面は平坦で緩やかに立ち上がる。覆土は褐色シルトの単層である。釘が出土した。

SK1521 (図版6・19)

1区の43L25・44L21グリッドに位置する。重複する遺構との新旧関係はP1576より新しく、SD1514より古い。平面形は楕円形を呈する。底面は凹凸があり、東側がやや下がっている。覆土は炭化物や褐色シルト粒を含む暗灰黄色シルトの単層である。

SK1525 (図版6・19)

1区の43L25グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。覆土は2層に分かれ、1層は炭化物を含む灰黄褐色シルト、2層は褐色シルト粒を含む黄褐色シルトである。土師質土器が出土した。

SK1526 (図版6・20)

1区の44L16グリッドに位置する。重複する遺構との新旧関係はSD1514より古い。平面形は長方形を呈する。覆土は2層に分かれ、1層は炭化物を含む灰黄褐色シルト、2層は黄褐色シルトを主体とし、いずれも褐色シルトを含む。

SK1531 (図版7・21)

2区の47F16・17グリッドに位置する。重複する遺構との新旧関係はSD1532・SX1573より新しい。Ⅲ層掘削中に検出したことから、中世の所産と考えられる。平面形は長方形を呈する。断面形は台形状で、底面はやや丸味があり、側面は急角度で立ち上がる。覆土は3層に分かれ、2層は炭化物をわずかに含む。2層から土師質土器の小皿(48)が出土した。

4) 溝

SD330 (図版5・20)

1区の43L25、43M4・5・9グリッドに位置する。C区から直線的に伸びる溝である。方向は北が約55度西へ傾く。覆土は7層に分かれ、4層から7層は多量の炭化物を含む。2・3層間から凹石(30)を含む大量の礫が出土した。これらには同一母岩の破片もあり、同時期に投棄された可能性が高い。なお、C区においても同遺構内の礫集中地点が報告されているが、本例の方が出土層位が上層で、集中度も散漫であることから、関連性は薄いものと判断する。ほかに2層から青磁、4～7層から釘(39・40)、5・6層から土師質土器の小皿(19)と皿(20)、6層から珠洲焼の片口鉢(21・22)・砥石(31)・漆器の破片が出土した。

SD1502 (図版5・20)

1区の44L1・2グリッドに位置する。方向は北が約79度西へ傾く。東端がSD1520と接続し、方向も一致するが、SD1502のほうが浅く、覆土の様相も異なることからSD1520より古い別遺構と判断した。そのほかの重複する遺構との新旧関係はSB300P12より新しい。覆土は2層に分かれ、いずれも褐色シルトを主体として1層には炭化物、2層には青灰色シルトをわずかに含む。1層から土師質土器、2層から鉄滓(41)が出土した。

SD1514 (図版5・20)

1区の43L25、44L7・11・12・16・21グリッドに位置する。方向は北が約30度東へ傾く。重複する遺構との新旧関係はSK1521・1526・P1576より新しく、SD255より古い。覆土は2層に分かれ、1層は炭化物を多量に含むにふい黄褐色シルト、2層は炭化物をわずかに含む褐色シルトである。1層から土師質土器・珠洲焼・青磁・釘、2層から土師質土器(23)が出土した。

SD1520 (図版6)

1区の44L2・7・8グリッドに位置し、東側は調査区外へ延びる。重複する遺構との新旧関係はSX1509より古い。覆土は地山ブロック・炭化物を含む暗褐色シルトの単層である。土師質土器が出土した。

5) 性格不明遺構

SX1509 (図版6・20)

1区の44L2・3・7・8グリッドに位置し、東側は調査区外へ延びる。重複する遺構との新旧関係はSD1520・SX1519より新しい。平面形は長方形を呈し、主軸方位は北が約62度西へ傾く。底面は貼床がなされ、中央が固くしまる。覆土は4層に分かれる。1・3層は灰黄褐色シルト、2層は暗褐色シルトを主体とし、2・3層は炭化物を含む。4層のぶい黄褐色シルトは貼床の構築土である。1層から釘(34・35)・鉄洋(36)、2層から土師質土器の皿(24)・珠洲焼・磨石(32)が出土した。

SX1519 (図版6・20)

1区の44K22・23、44L2・3グリッドに位置する。北・東側が調査区外へ延び、南側をSX1509に切られるが、西辺が直線的でSX1509と方向が揃うことから方形の竪穴状遺構と判断する。覆土は3層に分かれ、1・2層は灰黄褐色シルト、3層は褐色シルトである。SX1509のような貼床は認められない。1層から土師質土器・珠洲焼(25)・軽石製品(33)・不明金属製品が出土した。

SX1580 (図版7)

2区の48E23・24、48F3グリッドに位置する。調査時には平面的に検出できず、SE1530の上層覆土と認識していたが、整理段階で再検討した結果、SE1530を切る方形竪穴状遺構と認定した。構築面はSE1530と同様Ⅱb層の上面である。主軸方位は北が約73度東へ傾く。覆土は5層に分かれ、5層から珠洲焼の片口鉢(26)が出土した。

D 古代の遺構

1) 土 坑

SK1578 (図版7・21)

2区の47F12・13・17・18グリッドに位置する。検出面はⅥ層上面である。重複する遺構との新旧関係はSK1579より新しく、SX1573・その他のピットより古い。平面形は不整形で、南東側が細く突出する。覆土は炭化物・焼土粒・焼土ブロック、焼けた粘土塊などを多量に含むが、土坑の底面や側面に被熱した様子は認められない。

SK1579 (図版7・21)

2区の47F12・13・17・18グリッドに位置する。平面形・覆土の特徴などはSK1578とよく似ているが、掘り込みはやや浅い。

2) 溝

SD1532 (図版5・21)

2区の47F17・18・22・23グリッドに位置する。検出面はⅤ層上面である。2008年度調査〔佐藤ほか2010〕で検出された中世の溝SD119の延長線上に位置するが、本例の方が標高が約20cm低く、中世の土坑(SK1531)と古代のピット(P1575)に切られることから、別遺構と判断した。SX1573よりは新しい。方向は北が約58度西へ傾く。底面の深度はおおむね一定である。

3) 性格不明遺構

SX1573 (図版5・21)

2区の47F・Gグリッドに分布する遺物集中地点である。当初、SK1578をカマドと想定して遺物の分布範囲を竪穴建物と考えたが、SK1578の底面や壁面に被熱した痕跡がないことや竪穴住居のプランが確認できないことから単独の性格不明遺構とした。遺物は220点出土した。すべて古代の土師器製の破片であり、同一個体と考えられるが、摩滅が著しく、接合した破片はわずかである。出土標高は5.33m～5.6mであり、47F22グリッド付近を中心としてごく浅いレンズ状に堆積する。SK1578・1579を最終的に覆うV層からも出土することから、遺物が散布した時期はSK1578・1579よりも新しいと考えられる。

2 遺物 (図版13・28)

A 概要

遺物は浅箱(内寸:536×333×90mm)に換算して4箱分が出土した。ほとんどが1区からの出土である。2区ではSX1573から同一個体と推定される多量の土師器片が出土したが、細片のため図示できない。SX1573を除くと古代の遺物は存在しない。点数が少ないため、遺構ごとには分けず種別ごとに記述する。

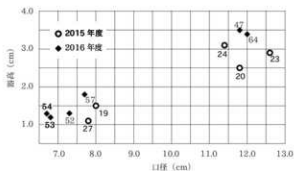
B 土器・陶磁器・土製品

近世陶磁器は2点を図化した。16は皿、17は碗である。ともにSD255から出土した。16は17世紀後半～18世紀前半、17は18世紀前半の肥前産である。

土製品は、近世の泥面子(29)が1点、SD1505から出土した。

土師質土器は6点を図化した。いずれもロクロ成形で底部はヘラ切りである(RH種)。第11図に、2016年度調査で出土したのもも合わせた土師質土器の法量分布図を示す。口径12cm前後のものを皿、口径8cm以下のものを小皿とした。法量分布はSD330出土土器〔加藤ほか2013〕とおおむね一致する。皿3点のうち、20と23は胎土が白色で焼成が硬質であるのに対し、24は軟質であり、生産地が異なる可能性がある。18は内面に油煙が付着しており、燈明皿に利用されたことがわかる。

珠洲焼は4点を図化した。21・22はSD330、25はSX1519、26はSX1580から出土した。22・25・26は古岡編年IV期の所産と考えられる。21は卸目が認められない点から、やや古相に位置付けられる可能性がある。



第11図 土師質土器の法量分布

C 石 製 品

石製品は4点を図化した。いずれも1区の中世の遺構からの出土であるが、中世の遺物とは断定できないものもある。

30・31はSD330から出土した。30は砂岩並門礫の一面の中心に、長径2.2cm・短径1.5cm・深さ0.8cmほどの窪みが付く。縄文時代の凹石に似る。片手で握って窪みを突起物に押し当て、圧力を加えるような使用法が想定できる。31は凝灰岩製の砥石である。

32はSX1509から出土した砂岩製の砥石である。破砕しているが磨面がわずかに残存する。

33はSX1519から出土した軽石製品である。水に浮かかないため、浮子としての用途は想定できない。

D 金 属 製 品

鉄製の釘やその残欠と思われる棒状製品が多く出土した。全形がおおよそ判明する8点を図化した。34・35はSX1509、37はSK1508、38はSK1518、39・40はSD330、42・43は遺構外からの出土である。いずれも断面方形の頭巻釘である。折損するものが多くサイズは不明確であるが、3寸を超えるもの(39・40)と2寸未満のもの(それ以外)に大別できそうである。

鍛冶に関わる遺物として鉄滓が3点出土した。36はSX1509、41はSD1502、44は1区のIIb層からの出土である。

第VI章 2016年度の調査

1 遺 構

A 中世の遺構

1) 概 要

Ⅱa層上面でピット3基、Ⅱb層上面で井戸4基、土坑3基、ピット5基、Ⅲ層上面で井戸1基、ピット9基を検出した。ここでは計5基を検出した井戸を中心に概要を述べる。

5基すべてが素掘りの井戸であり、水溜の曲物なども出土しなかった。掘削深度は基本的に標高4.5m前後を底面とするが、SE1606はさらに1m程度掘り込まれている。SE1620・1621は覆土に泥炭質の黒色土が層をなして堆積しており(第12図)、土壌を洗浄したところ炭化種実類や淡水魚骨が含まれていた(第VII章参照)。

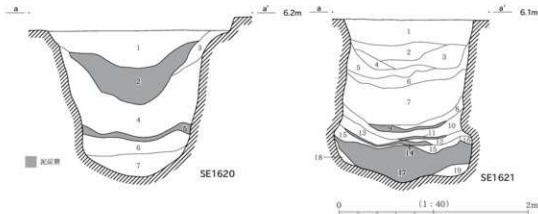
第13図に、遺物の平面的な出土位置と接合状況を示す。過年度調査分との接合作業を行ったところ、B区の出土遺物と多く接合した。

遺構間接合資料の垂直分布は第14図のようになる。容積の近い井戸と土坑についてみると、SE1613とSK1614、SE1606とSE1620はそれぞれ覆土上・中層に遺構間接合資料を共有しており、ほぼ同時期に埋没が完了しつつあったことがわかる。一方、SE1613とSE1620では、前者の覆土上・中層と、後者の覆土中・下層の出土遺物が接合することから、前者の埋没が先行したことが推定できる。従って、以上の4遺構の埋没は、重複期間を含みながらもおおむね[SE1613・SK1614]→[SE1606・SE1620]の順に進行したと考えられる。

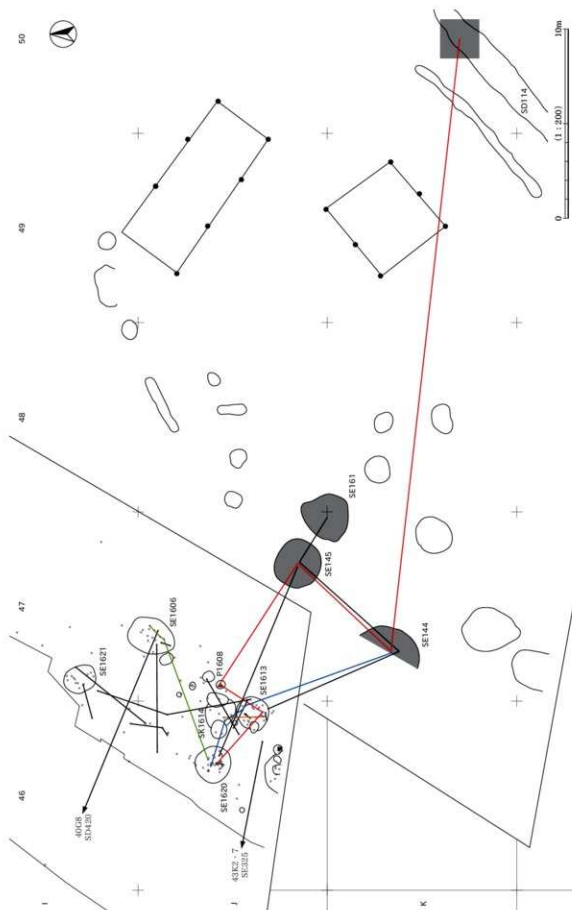
2) 井 戸

SE1606 (図版8・23)

Ⅱb層上面で検出した。47I22・23、47J2・3グリッドに位置する。植栽痕によって大きく攪乱を受けており、地山との識別が難しかったことから、最終的に重機で断ち割って底面を確認した。遺物は1・

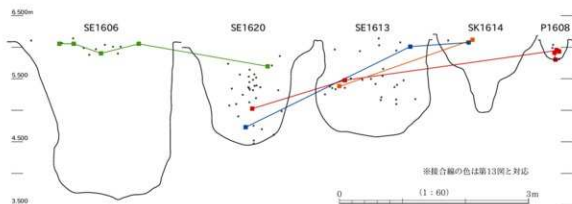


第12図 井戸覆土模式図



※ B16の遺物には出土位置の記録がないため、該当遺構・グリッドをグレーで示した。

第13図 中世の遺物発見関係



第14図 遺構間接合資料の垂直分布

2層からの出土が多く、珠洲焼片口鉢(45)はSE1620(第13・14図の緑色のライン)、珠洲焼片口鉢(46)は約74m離れたSD420と接合した。ほかに珠洲焼甕・瓷器系陶器片口鉢、釘(72)が出土した。

SE1613 (図版8・23・24)

Ⅱb層上面で検出した。46J15・20、47J11・16グリッドに位置する。重複する遺構との新旧関係はP1605より古い。覆土は一部に崩落が見られるほかは薄いレンズ状を呈する。14層は炭化物を多く含み、完形に近い土師質土器皿(47)や、白磁碗(48)、青磁碗(49)の破片が出土した。瓷器系陶器甕(51)はSE144・145・161、珠洲焼片口鉢(50)はSK1614(第13・14図の黄色のライン)、珠洲焼片口鉢(61)はSE144・145・1620・P1608・SD114と接合した(第13・14図の赤色のライン)。また、図示していないが珠洲焼甕がSE1620・SK1614と接合した(第13・14図の青色のライン)。

SE1620 (図版9・24)

Ⅱb層上面で検出した。46J8・9・13・14グリッドに位置する。遺物は各層で出土しており、遺構間接合資料は第14図以外に、図示していないがSE145と接合した瓷器系陶器甕がある。ほかに珠洲焼甕、土師質土器皿、土師質土器小皿(52～54)、鉢(73)、輪状製品(74)が出土した。また、最下層から重量5.28kgの礫が出土した。境塚遺跡SE3913〔荒川^{aa}-2016〕に類似があり、祭祀的な意図で礫を投棄した可能性も想定できる。

SE1626 (図版10・25)

Ⅱb層上面で検出した。46J18・19グリッドに位置する。重複する遺構との新旧関係はP1603・1604・1607より古い。遺物はわずかで遺構間接合資料はない。珠洲焼甕が出土した。

SE1621 (図版9・24)

Ⅲ層上面で検出した。47I16グリッドに位置する。覆土には、ラミナ状の間層を隔てて泥炭質の黒色土が中層と下層に認められる。遺物は各層から出土しているが遺構間接合資料はない。珠洲焼片口鉢(56)、青磁碗(55)が出土した。

3) 土 坑

SK1614 (図版10)

Ⅱb層上面で検出した。46J10・15、47J6・11グリッドに位置する。重複する遺構との新旧関係はSK1610・1612より古い。断面形は漏斗状を呈する。2層以下の覆土は地山との識別が困難であった。遺物は1層に集中し、SE1613と接合する珠洲焼甕、片口鉢(50)が出土した。

SK1610 (図版 10・25)

Ⅱb層上面で検出した。46J10・15 グリッドに位置する。掘り込みは浅い。ほぼ完形の土師質土器小皿(57)が1点出土した。

SK1612 (図版 10・25)

Ⅱb層上面で検出した。46J10・15、47J6・11 グリッドに位置する。掘り込みは浅い。珠洲焼甕が1点出土した。

4) ビ ッ ト

P1603 (図版 10・25)

Ⅱa層上面で検出した。46J19 グリッドに位置する。重複する遺構との新旧関係はSE1626より新しい。覆土上位から珠洲焼甕の破片と、ゴルフボール大～拳大の自然礫がまとまって出土した。類似する遺構として『柗目木遺跡Ⅱ』で報告したP468が挙げられる〔加藤¹⁾2013〕。

P1608 (図版 10・25)

Ⅱb層上面で検出した。47J11 グリッドに位置する。覆土は2層に分かれ、下層からは前記の珠洲焼片口鉢の遺構間接合資料(61)のほか、珠洲焼片口鉢(62)、珠洲焼甕(60)、壺器系陶器甕(63)が出土した。遺物はいずれも大ぶりの破片であり、意図的に詰め込まれた様相を呈する。炭化物を多く含む1層からは穀物類の種実が検出されている(第Ⅶ章参照)。1層は遺物を覆うように堆積することから、陶器片に続けて食物残渣等を廃棄したと考えられる。

B 古代の遺構

1) 概 要

竪穴建物3棟、土坑1基、焼土跡1基、ビット5基を検出した。このうちSK746は『柗目木遺跡Ⅱ』で報告した遺構の一部である。2014年度調査において完掘したSI1410及び主要部分を調査したSI1411については本書第Ⅳ章に記した。

2014・2016年度調査区の遺物の平面的な出土位置と接合状況を第15図に示す。遺物分布は竪穴建物検出地点の付近に集中するが、旧水路を隔てた46Jグリッドとも接合関係があり、本来は旧水路部分にも土地利用が展開していたことを示唆している。また、竪穴建物3棟は遺構間接合資料を共有することから、最終的な埋没はほぼ同時期と推測できる。

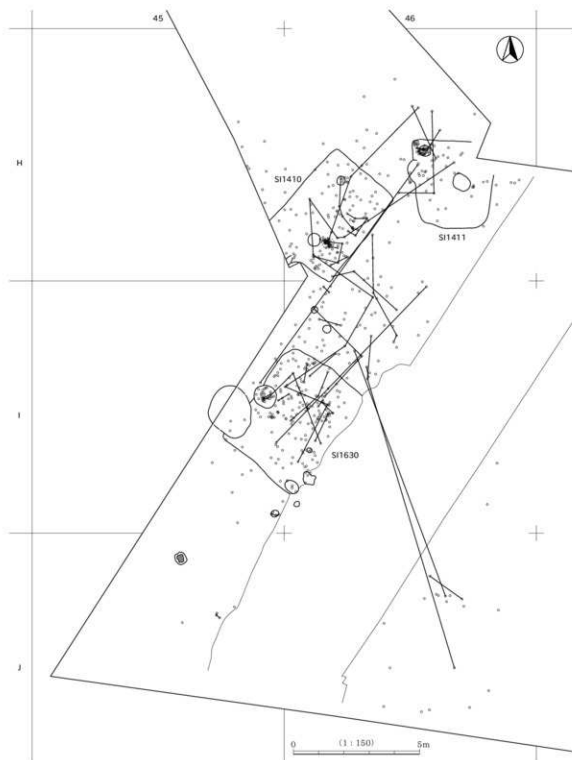
SI1630は、SI1410やSI1411と同じく2014年度の最終調査面(2014年度調査ではⅥ層上面と認識していたが実際はⅤ層上面)で検出した。しかし、SI1630出土遺物には、Ⅵ層上面で検出したP1633から出土した遺物と接合するものがあり、第Ⅲ章で述べたとおり、検出面の違いを単純に時期差とはできない。遺物の集中により比較的認識しやすい竪穴建物が上位で検出できたと考えられる。

2) 竪 穴 建 物

SI1630 (図版 11・26)

Ⅴ層上面で検出した。45・46Iグリッドに位置する。平面形は方形を呈する。重複する遺構との新旧関係はSK746より古い。主軸方向は旧水路により減失するが、主軸と直行する方向は5.2mを測り、柗目木遺跡で検出した竪穴建物で最大規模である。主軸は北が約55度西に傾く。覆土は基本土層よりわず

かに粘り気が強く、炭化物と遺物を多く含むが、識別は非常に困難であった。柱穴や周溝は認められない。南東側にピットや土坑状の窪みが存在する。カマドは北西辺の中央付近に存在する。調査時には、被熱した痕跡が希薄である点に疑問があったが、覆土から炭化したイネとアズキ類が検出されたことからカマドと判断した(第VII章)。カマド覆土に多く含まれる白色の粘土は構築材の残骸とみられる。遺物は、カマドから出土した土師器長甕(80)や遺構中央付近から潰れた状態で出土した土師器小甕(82)が遺構に伴う



第15図 古代の遺物接合関係

と考えられる以外は、他の遺構や包含層出土遺物と接合関係を有するものがある点や、小片である点から、遺構廃絶後の流れ込みと考えられる。80・82の年代観から、遺構の存続時期は8世紀後半～9世紀初頭と考えられる。

3) 焼 土 跡

SF1628 (図版11・26) 45J3・4グリッドに位置する。IV層掘削中に発見した遺構で、検出面は他の古代の遺構より明らかに上位であるが、IV層が洪水に由来する土壌という所見 [加藤^{ほか}2013] からすれば、認識できない地表の凹凸があったとも考えられる。覆土を洗浄したが、微細な炭化物以外の炭化種実等は認められなかった。

2 遺 物 (図版14～16、29～31)

A 中世の遺物

1) 概 要

中世の遺物は、浅箱 (内寸: 536 × 333 × 90mm) に換算して約4箱分が出土しており、その大半は遺構が集中する調査区南東側から出土したものである。

掘削から出土したものを除いた遺物の総数は152点で、このうち、遺構内から出土したのは96点 (IIa層上面遺構から5点、IIb層上面遺構から87点、III層上面遺構から4点)、遺物包含層から出土したのは56点 (IIa層から53点、IIb層から2点、III層から1点) である。

遺物は、土師質土器皿・小皿、白磁碗、青磁碗・杯・合子、珠洲焼甕・片口鉢、瓷器系陶器甕・壺・片口鉢、石製品 (石鉢)、鉄製品 (釘・鍔・輪状製品)、鍛冶関連遺物 (柄形鍛冶滓・鍛冶滓) などである。

土器・陶磁器の実年代については、貿易陶磁器は磁器区分C・D・E・F期 (11世紀後半～12世紀前半、12世紀中頃～後半、13世紀前後～前半、13世紀中頃～14世紀初頭前後)、珠洲焼は吉岡編年II期 (13世紀第1四半期～第2四半期)、瓷器系陶器は狼沢段階 (13世紀後半～14世紀初頭) のものが出土している。

2) 土器・陶磁器

SE1606 (45・46) 45・46は珠洲焼の片口鉢である。45は大鉢である。体部はわずかに膨らみをもって立ち上がり、口縁はそのまま開く。口縁端部は外端で面をとって方頭におさめる。卸し目は、一単位幅2.2cm、10目の櫛歯原体を用い、やや弧状となる直線文を施入する。底部外面には静止糸切り痕と板状圧痕が残る。46は中鉢である。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁はそのまま開く。内面は素文である。底部外面には静止糸切り痕と板状圧痕が残る。45・46ともに吉岡編年II期に比定される。なお、45はSE1620から出土した破片と、46はSD420 [加藤^{ほか}2013] から出土した破片 (未掲載) と接合した。SE1613 (47～51) 47は土師質土器の皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面には回転糸切り痕が残る。口縁部に油煙が付着しており、灯明皿と考えられる。法量は、口径11.8cm、器高3.5cmである。48は白磁の碗である。口縁部から体部にかけての破片で、口縁は玉縁となる。碗IV類に分類される (磁器区分C期)。49は龍泉窯系青磁の碗である。口縁部から体部にかけての破片で、体部外面には片形蓮弁文を施文する。弁の中心線には筋はない。碗II-a類に分類される (磁器区分E期)。50は珠洲焼の片口鉢である。底部の破片で、卸し目は、一単位幅2.1cm、10目の櫛歯原体を用い、直線文を疎らに

施入する。内面は使用により摩耗している。底部外面には静止糸切り痕と板状圧痕が残る。51は瓷器系陶器甕である¹⁾。口径39.0cmの大型品で、口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部の形態はN字状を呈する。肩部には、簾状文と横向き「大」とを組み合わせた押印文が帯状に施される。簾状文は、上・下端に各2条、中央に1条の合計5条の筋が入るものである。なお、50はSK1614から出土した破片と、51はSE145〔佐藤^{12a}2010〕から出土した破片（図版35-8）及びSE144・SE161〔佐藤^{12a}2010〕から出土した破片（未掲載）と接合した。

SE1620 (52～54) 52～54は土師質土器の小皿である。体部は内湾気味に短く立ち上がり、53の底部外面には回転糸切り痕が残る。分量は、口径6.7～7.3cm、器高1.2～1.3cmである。

SE1621 (55・56) 55は龍泉窯系青磁の椀である。体部の破片で、内面には草花状ないし雲文状の片彫文と柳目文を施文する。椀I-3a類に分類される（磁器区分D期）。56は珠洲焼の片口鉢である。中鉢の口縁部の破片で、口縁端部は外端で面をとって方頭におさめる。内面は素文と思われる。

SK1610 (57) 57は土師質土器の小皿である。体部は直線的に開いて短く立ち上がる。ロク口成形であるが、底部外面の調整は不明である。分量は、口径7.7cm、器高1.8cmである。

P1602 (58) 58は瓷器系陶器甕である。底径9.6cmの小型品で、底部から胴部にかけての破片である。

P1604 (59) 59は珠洲焼の片口鉢である。底部の破片で、卸し目は、一単位幅2.4cm、10目の櫛歯原体を用いて施入する。内面は使用により摩耗している。底部外面には静止糸切り痕と板状圧痕が残る。

P1608 (60～63) 60は珠洲焼の大甕で、口縁部から肩部にかけての破片である。頸部は短くコの字状に立ち上がり、口縁端部は圧縮して肥厚させる。吉岡編年Ⅱ期に比定される。61・62は珠洲焼の片口鉢である。61は大鉢である。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁はそのまま開く。口縁端部は外端で面をとって方頭におさめる。卸し目は、一単位幅2.5cm、12目の櫛歯原体を用い、入り組み技法で直線の卸し目を8条施入する。底部外面には静止糸切り痕が残る。外面には底部から体部にかけてドーナツ状にススの付着がみられ、内面は器面が剥離している。吉岡編年Ⅱ期に比定される。62は大鉢の底部から胴部にかけての破片である。卸し目は、一単位幅2.6cm、16目の櫛歯原体を用い、直線文を疎らに施入する。底部外面には静止糸切り痕が残る。63は瓷器系陶器甕である。頸部の破片である。なお、61はSE1613・SE1620から出土した破片、及びSE144・SE145・SD114〔佐藤^{12a}2010〕から出土した破片（未掲載）と接合した。

遺構外出土遺物 (64～69) II a層から出土した。64は土師質土器の皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反して端部は細くおさめる。底部外面には回転糸切り痕が残る。分量は、口径12.0cm、器高3.4cmである。65～67は龍泉窯系の青磁である。65は椀の口縁部から体部の破片で、体部外面に竊連弁文を施文する。椀II-b類に分類される（磁器区分E期）。66は杯の口縁部から体部の破片である。口縁部は横に長く屈曲させ、端部は短くつまみ上げる。体部内外面は無文である。杯III-3a類に分類される（磁器区分F期）。67は合子の身である。体部外面は無文で、口縁部内外面と底部外面は露胎となる。68・69は瓷器系陶器片口鉢である。68は口縁部の破片で、口縁端部には1条の浅い溝が走る。69は体部の破片で、内面に卸し目を施入する。なお、68は44K24グリッドⅡ層〔佐藤^{12a}2010〕から出土した破片（未掲載）と接合した。

1) 7の口縁部については、『新木道跡I』〔佐藤^{12a}2010〕でSE145の出土遺物として掲載されているが（図版35-8）、今回、SE1613から出土した胴部片と接合することが判明したため、あらためて実測を行い再掲載することにした。

3) 石 製 品

石製品は、石鉢が2点出土した。ともに遺構外から出土したもので、70はIIb層から、71はIIa・IIb層を攪拌して作土とする現代の水田から出土している。

70は外面が平坦で内面が緩く内湾していることから石鉢の底部片とした。内外面ともに器面は平滑であり、使用により摩耗したものと考えられる。71は石鉢の底部片である。体部外面と底部外面には整形時の敲打痕が残る。石材は、ともに安山岩である。

なお、SD330からも安山岩製の石鉢が1点出土している [加藤²⁰¹³: 図版 32-128]。

4) 金 属 製 品

SE1606 (72) 72は釘である。頭部と先端部を欠損するもので、L字状に折れ曲がる。胴部断面形は方形を呈する。

SE1620 (73・74) 73は握り鉄である。74は輪状製品である。径2.2cmほどの小さな製品で、断面形は平たく、幅は4～9mmと不均一である。

遺構外出土遺物 (75～79) 75は頭巻釘である。胴部断面形は長方形を呈し、先端部はわずかに欠損する。76～79は椀形鍛冶滓である。76は鍛冶滓の上面に小型の椀形鍛冶滓が重層して二段となった椀形鍛冶滓の破片である。左側は破面となる。77は左側が破面となった極小の椀形鍛冶滓の破片である。上面には1.5cm大の木炭痕が残り、下面には炉床土が貼り付いている。78は左側が破面となった極小の椀形鍛冶滓の破片である。79は極小の椀形鍛冶滓である。このほかに、小片のため図示していないが鍛冶滓が2点出土している。

B 古代の遺物

1) 概 要

古代の遺物は、浅箱(内寸: 536×333×90mm)に換算して約2箱分が出土しており、そのほとんどは遺構が検出された調査区北西側から出土したものである。

遺物の総数は120点で、このうち、遺構内から出土したのは65点(V層上面遺構から64点、VI層上面遺構から1点)、遺物包含層から出土したのは55点(IV層から1点、V層から54点)である。

遺物は、土師器杯・椀・甕、須恵器杯・甕などである。

2) 土器・陶磁器

SI1630 (80～82) 80～82は土師器である。80は長甕の口縁部破片で、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は上方へつまみ上げる。81・82は小甕である。81は口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁端部は上方へつまみ上げ、体部上半にはカキメが施される。口縁部の内外面に炭化物が付着する。82は底部から胴部にかけての破片である。体部内外面にはカキメが施される。

遺構外出土遺物 (83～85) V層から出土した。83は土師器の無台椀である。器壁が薄いもので、体部はやや内湾気味に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕が残る。84・85は須恵器である。84は無台杯で、体部は内湾気味に立ち上がり、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。胎土はA群である。85は甕の胴部破片である。

第七章 自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

柄目木遺跡（新潟県阿賀野市下ノ橋地内）は、現在の阿賀野川右岸の沖積地に立地しており、地形分類図〔鈴木 1974〕によれば、阿賀野川旧河道の右岸域に位置する。柄目木遺跡は、これまでに数次に渡って発掘調査が行われており、古代（8世紀後半～9世紀初頭）及び中世（13～14世紀）の集落跡であることが明らかとされている。また、平成28年度の発掘調査では古代の竪穴建物や中世の井戸跡などが検出されている。

本報告では、平成28年度の発掘調査で検出された遺構の年代、遺構埋積物（覆土）の水洗選別により回収・抽出された炭化種実や骨片の同定、及び動・植物利用（食性）に関わる資料の作成を目的として、放射性炭素年代測定、（炭化）種実同定、骨同定を実施した。

1 試料

試料は、中世の井戸跡やピット、古代の竪穴建物に設置されたカマドなどの埋積物の水洗選別により回収・抽出された炭化種実、骨片など10試料である。各試料の詳細（遺構名、層位・地点名、土壌採取層位の所見、水洗選別土壌量（乾重量：kg）、炭化種実及び骨片の重量（g）など）は、一覧として第2表に示したので参照されたい。

遺構名	層位・地点など	調査所見	乾重量 (kg)	炭化種実 (g)	遺骨骨片 (g)	遺構検出品	時期
SE1621	6層	覆土中部	黒褐色土	18.1	2.39	—	中世
	7層	覆土中部	黒褐色土	27.6	22.58	—	
	17層	覆土層下部	黒色土	40.1	26.62	0.36	
SE1613	14層	覆土中部	黒褐色シルト	39.6	5.78	0.80	中世
SE1606	2層	覆土上部	黒褐色シルト	57.1	7.85	0.06	
	11層	覆土下部	暗灰黄色粘性シルト	—	1.38	—	
SE1620	2層	覆土上部-中部	黒色土	28.3	8.74	0.38	中世
	5層	覆土中部	黒色土	10.6	1.72	—	
P1608	1層	覆土上部	褐色シルト	4.2	0.47	—	古代
SI1630	カマド (1～11層)	覆土一括		148.7	0.05	—	
合計				374.3	77.58	1.50	

第2表 分析試料一覧

2 放射性炭素年代測定

A 試料

試料は、SE1621（17層）、SE1613（14層）、SE1606（2層）、SE1620（2層）、P1608（1層）及びSI1630カマド（覆土一括）より抽出された炭化種実である。測定試料は、後述する炭化種実同定の試料確認（概査）時の所見を参考に、担当者との協議を行い、上記した6試料に共通して確認されるイネの胚乳（各試料5粒）を供している（第19図）。

B 分析方法

測定試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後、HClによる炭酸塩等酸可溶性成分の除去、NaOHによる

腐植酸等アルカリ可溶性成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶性成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。その後、超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、アルカリ処理は、0.001M～1Mまで濃度を上げ、試料の様子をみながら処理を進める。1Mの水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合はAAAと記す。一方、試料が脆弱で1Mの水酸化ナトリウムでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の水酸化ナトリウムの状態で処理を終える。その場合はAaAと記す。

次に、試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma: 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う[Stuiver and Polach 1977]。なお、本報告では、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算に対応できるよう、1年単位の値も記した。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。本報告では、暦年較正には、OxCal4.2較正プログラム[Bronk & Lee 2013]を用い、較正曲線はIntcal13[Reimer *et al.* 2013]を用いている。また、暦年較正結果は $1\sigma \cdot 2\sigma$ (1σ は統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95.4%の確率で存在する範囲)の値を示す。

C 結 果

各試料より出土した炭化種実(イネ胚乳)の同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、SE1621(17層)が760±20BP、SE1613(14層)が750±20BP、SE1606(2層)が690±20BP、SE1620(2層)が810±20BP、P1608(1層)が750±20BP、SI1630カマド(覆土一括)が1,200±20BPである(第3表)。

また、暦年較正結果(2σ)は、SE1621(17層)がcalAD 1,224-calAD 1,283、SE1613(14層)がcalAD 1,224-calAD 1,284、SE1606(2層)がcalAD 1,267-calAD 1,385、SE1620(2層)がcalAD 1,189-calAD 1,270、P1608(1層)がcalAD 1,224-calAD 1,286、SI1630カマド(覆土一括)がcalAD 731-calAD 890である(第3表、第16図、第17図)。

D 考 察

柗木遺跡は、これまでの発掘調査結果から、古代（8世紀後半～9世紀初頭）及び中世（13世紀～14世紀）の集落とされている。今回の放射性炭素年代測定の対象とされた遺構は、SI1630が古代、SE1621が中世（Ⅲ層上面検出）、SE1606、SE1613、SE1620及びP1608が中世（Ⅱb層上面）とされている。

上記した暦年校正結果（2σ）を参考とすると、SI1630カマドの炭化種実とは8世紀前半から9世紀後半頃までの暦年代範囲、中世の各遺構はおおよそ13世紀代を主体とする暦年代範囲を示しており（第17図）、調査所見と概ね調和する結果と言える。なお、中世と推定されている遺構の時期差は、Ⅲ層上面より検出されたSE1621のイネ胚乳（17層；覆土最下部）とⅡb層上面より検出されたSE1606のイネ胚乳（2層；覆土上部）やP1608のイネ胚乳（1層；覆土上部）との比較では、前者は若干の有意差が認められるものの、後者はほぼ暦年代範囲が重なる状況にあり、Ⅱb層を検出面とするSE1613（14層；覆土中部）も同様の状況である。また、SE1620（2層；覆土上部-中部）はSE1621より若干古い範囲を示すものの概ね重複する。このことから、検出面の異なる井戸跡については利用時から廃絶及び堆積物の埋積までは比較的短期間であったことが推測される。

試料名	発掘方法	暦年代 (BP)	δ ¹³ C (‰)	暦年代(暦年校正用) (BP)	暦年校正結果		測定番号
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
SE1621 17層 炭化種実(イネ胚乳)	AAA	760±20	-22.77±0.56	756±24	1253AD (68.2%) 1280AD	1224AD (95.4%) 1283AD	IAAA-160846
SE1613 14層 炭化種実(イネ胚乳)	AAA	750±20	-27.44±0.50	753±23	1256AD (68.2%) 1280AD	1224AD (95.4%) 1284AD	IAAA-160847
SE1606 2層 炭化種実(イネ胚乳)	AAA	690±20	-24.83±0.36	694±23	1275AD (68.2%) 1297AD	1267AD (80.6%) 1304AD 1305AD (15.4%) 1305AD	IAAA-160848
SE1620 2層 炭化種実(イネ胚乳)	AAA	810±20	-24.23±0.45	807±23	1220AD (68.2%) 1256AD	1189AD (95.4%) 1270AD	IAAA-160849
P1608 1層 炭化種実(イネ胚乳)	AAA	750±20	-26.56±0.50	749±23	1259AD (68.2%) 1280AD	1224AD (4.7%) 1255AD 1242AD (90.7%) 1296AD	IAAA-160850
SI1630 カマド 炭化種実(イネ胚乳)	AAA	1,200±20	-25.06±0.36	1,198±23	780AD (68.2%) 809AD	731AD (0.8%) 755AD 769AD (94.6%) 800AD	IAAA-160851

第3表 放射性炭素年代測定及び暦年校正結果

3 炭化種実同定

A 試 料

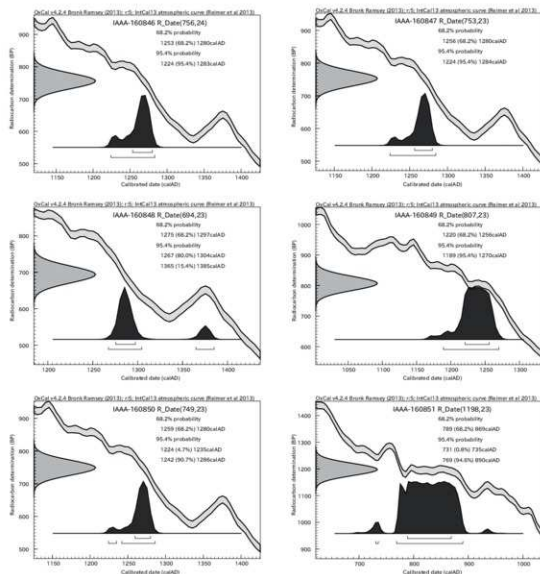
試料は、古代の竪穴建物のカマド、中世の井戸跡及びビットの覆土より採取された土壌（乾燥重量合計：374.3kg）の水洗選別により回収・抽出された炭化種実10試料（選別種実：77.58g）である（第2表）。

分析に供された炭化種実試料は、全て乾燥した状態にあり、遺構及び層別別にチャック付きビニール袋に保管されている。

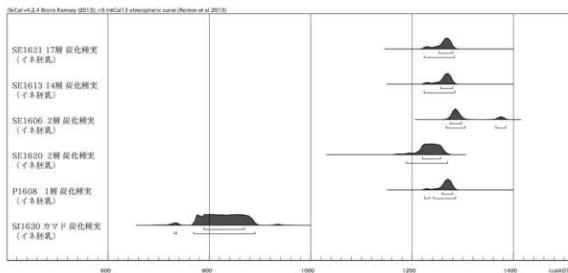
B 分析 方法

試料を篩別後、粒径の大きな試料より順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定可能な炭化種実を抽出する。

炭化種実の同定は、現生標本及び〔笠原1982〕、〔吉崎1992〕、〔椿坂1993〕、〔石川1994〕、〔谷城2007〕、〔中山2010〕、〔中山^{ほか}2010〕、〔小畑2008・2011〕、〔鈴木^{ほか}2012〕などを参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な分類群は、-（ハイフオン）で結んで表示する。同定された分類群は、写真を添付して同定根拠とする。なお、状態不良で同定が困難な穀粒は、優占分類群及び穀類主体として重量を記録する。また、保存状態が良好な栽培種等の一部を対



第 16 図 暦年較正結果 (1)



第 17 図 暦年較正結果 (2)

象として、炭化種実の重量、長さ、幅、厚さを計測し、結果を一覧表で示す。分析後は、炭化種実を分類別に容器に入れ、残渣は袋に戻して保管する。

C 結 果

同定結果を第4表、出土状況を第5表、各分類群の写真を第19図、主な炭化種実の計測値等を第6表、第7表に示す。

分析に供された6遺構の選別種実10試料(第2表)からは、被子植物39分類群(木本のクリ、クワ属、モモ、トチノキ、草本のイボクサ、イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、キビ、アワ、エノコログサ属(アワ?)、スゲ属、ハリイ属、シンジュガヤ属、フトイ類、ホタルイ属、アサ、ギシギシ属、ポントクタデ近似種、ヤナギタデ近似種、タデ属(2面、3面)、ソバ、ジュンサイ、アズキ類、ダイズ類、ツルマメ類?、ハギ属、マメ科?、メロン類、エゴマ、シソ属-イヌコウジュ属、ナス、ナス属、ゴマ、メナモミ属、オナモミ属、キク科)8,024個の炭化種実が抽出・同定された。9個は同定に至らなかったが、同分類群・部位と考えられる3個を不明種実A、2個を不明A、3個を双子葉類としている。その他、保存状態不良のムギ主体が0.7g(SE1606;2層)、ヒエ主体が計2.1g(SE1621;7層・17層,SE1613,SE1620;2層)、アワ主体が0.2g(SE1620;5層)、穀類主体が計8.4g(SE1621;7層・17層,SE1613,SE1606;2層,SE1620;2層)を量る。このうち、ムギ主体はコムギ1個の重量平均0.005g、ヒエ主体は1個の平均0.0007g、アワ主体はアワ1個の平均0.0005gとして換算し、第5表に反映している。

炭化種実以外の分析残渣は、炭化していない種実(サナエタデ近似種、マメ科、エノキグサ、キク科)や炭化材、炭化物、植物片、昆虫、骨片、岩片、土粒などが確認された。なお、炭化していない種実は、後代の混入の可能性があるので、解析より除外している。

炭化種実の保存状態は不良であり、とくにSE1606、SE1620、P1608、SI1630は極めて不良である。焼き膨れ・焼き崩れや発泡等により変形が著しい穀粒が多く、灰化類もみられる。なお、栽培種のイネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、キビ、アワの胚乳表面に顎(齧)が、ソバには果皮が残り、ヒエ、アワ、エゴマには複数個が集結した塊状を呈する炭化物も確認される。

栽培種は、モモの核、イネの顎・胚乳、オオムギの顎・胚乳、コムギの顎・胚乳、ヒエの顎・胚乳、キビの顎・胚乳、アワの顎・胚乳、アサの果実、ソバの果実、メロン類の種子、エゴマの果実、ナスの種子、ゴマの種子の他に、栽培の可能性のあるエノコログサ属(アワ?)の顎・胚乳、アズキ類の種子、ダイズ類の種子、ツルマメ類?の種子、シソ属-イヌコウジュ属の果実、ナス属の種子が確認され、炭化種実群全体の約97%と多数を占める。

栽培種と栽培の可能性を除いた分類群は少なく、木本は、高木になる落葉広葉樹で二次林要素のクワ属の核、クリの果皮・子葉と、河群林要素のトチノキの種皮・子葉が確認された。草本は、イボクサの種子、スゲ属の果実、ハリイ属の果実、シンジュガヤ属の果実、フトイ類の果実、ホタルイ属の果実、ギシギシ属の果実、ポントクタデ近似種の果実、ヤナギタデ近似種の果実、タデ属の果実、ジュンサイの種子、ハギ属の果実・種子、マメ科?の種子、メナモミ属の果実、オナモミ属の総苞・果実、キク科の果実が確認され、浮葉植物のジュンサイや抽水植物のイボクサ、フトイ類、ホタルイ属、湿生植物のハリイ属、シンジュガヤ属、ポントクタデ近似種、ヤナギタデ近似種などの水湿地生植物が多い。

以下、遺構別に出土状況を述べる。

1) SE1621 (6層、7層、17層)

17層からは、22分類群(モモ、イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、エノコログサ属(アワ?)、ソバ、アズキ類、ダイズ類、ツルマメ類?、アサ、エゴマ、シソ属-イヌコウジュ属、ナス属、クリ、トチノキ、マメ科?、オナモミ属、ホタルイ属、ポントクタデ近似種、ヤナギタデ近似種、タデ属) 3,023個+ヒエ主体0.5g(約670個)、穀類主体2.6gが確認された。イネが2,310個と極めて多く、次いでヒエが約870個、ダイズ類が195個と多い。また、モモ核は、2個とも頂部が尖り背面側に湾曲し、扁平な長楕円形を呈するなど形状が似ることから、同一系統に由来する可能性がある。

7層からは、31分類群(モモ、イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、キビ、エノコログサ属(アワ?)、ソバ、アズキ類、ダイズ類、アサ、メロン類、エゴマ、シソ属-イヌコウジュ属、ナス、ナス属、ゴマ、クリ、トチノキ、クワ属、ハギ属、メナムミ属、オナモミ属、ハリイ属、フトイ類、ホタルイ属、ポントクタデ近似種、ヤナギタデ近似種、タデ属(2面・3面)、ジュンサイ) 1,911個+ヒエ主体1.1g(約1,500個)、穀類主体1.7gが確認された。土壌水流量に対する分類群数・出土個数が10試料中で最も多い。ヒエが約1,700個、イネが1,276個と共に極めて多く、ダイズ類が183個と次ぐ。

6層からは12分類群(イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、ソバ、アズキ類、ダイズ類、ナス属、クリ、キク科、ポントクタデ近似種、タデ属) 305個が確認された。イネが204個と最も多く、次いでダイズ類が44個、ヒエが31個と多い。

2) SE1613 (14層)

14層からは、21分類群(モモ、イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、キビ、アワ、エノコログサ属(アワ?)、ソバ、アズキ類、ダイズ類、ツルマメ類?、アサ、エゴマ、シソ属-イヌコウジュ属、クリ、クワ属、ハギ属、スゲ属、フトイ類、タデ属) 903個+ヒエ主体0.5g(約666個)が確認された。ヒエが約870個と極めて多く、塊状を為す個体も確認される。次いでイネが221個、エゴマが79個、ダイズ類が77個、アサが69個であり、エゴマには塊状を為す個体も確認される。

3) SE1606 (2層、11層)

11層からは、モモが1個確認された。2層からは、14分類群(モモ、イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、キビ、アワ、アズキ類、ダイズ類、ナス属、マメ科?、シンジュガヤ属、ポントクタデ近似種、タデ属) 816個+ムギ主体0.7g(約140個)、穀類主体1.6gが確認された。ムギが約550個(コムギ328個、オオムギ78個を含む)と極めて多く、次いでイネが326個と多い。

4) SE1620 (2層、5層)

5層からは、13分類群(イネ、オオムギ、オオムギ-コムギ、ヒエ、キビ、アワ、アズキ類、ダイズ類、ツルマメ類?、アサ、メロン類、ナス属、トチノキ) 440個+アワ主体0.2g(約390個)が確認された。アワが約600個と極めて多く、塊状を為す個体も確認される。次いでオオムギ(-コムギ)が126個と多い。

2層からは、17分類群(イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、キビ、エノコログサ属(アワ?)、ソバ、アズキ類、ダイズ類、ツルマメ類?、ナス、ギシギシ属、オナモミ属、イボクサ、ホタルイ属、ヤナギタデ近似種、タデ属) 563個+ヒエ主体0.1g(約140個)、穀類主体2.4gが確認された。イネが285個と最も多く、

分析物	部位・状態 (※: 計測対象)	中央								備考	
		SR1621		SR1613		SR1606		SR1620			A/C SR1630 方式
		6期	17期	14期	2期	11期	2期	6期	1期		
木炭											
タリ	炭皮 (基部)	紙片	2	3	-	-	-	-	-	-	-
	炭皮 (基部)	紙片	-	-	4	-	-	-	-	-	-
	炭皮	紙片	1	3	6	-	-	-	-	-	-
	子葉	紙片	-	-	-	18	-	-	-	-	-
	枝	炭粉*	-	2	-	47	-	-	-	-	-
	枝	炭粉*	-	-	2	-	-	1	-	-	-
	枝	炭粉*	-	4	1	1	-	-	-	-	-
	枝皮 (基部)	紙片	-	3	1	-	-	-	-	-	-
	枝皮	紙片	-	3	-	-	-	-	-	-	-
	枝皮・子葉	紙片	-	-	2	-	-	-	1	-	-
子葉	紙片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
草炭	種子	炭粉	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	イネ	灰化層	紙片	-	83	4	-	-	-	-	-
		灰化層 (基部)	紙片	-	4	-	-	-	-	-	-
		炭 (基部)	紙片	-	25	11	-	-	1	1	-
		枝	紙片	-	10	12	-	-	3	-	-
		枝・幹丸	炭粉	1	50	64	11	2	-	10	2
		炭粉 (<2mm)	炭粉	-	-	15	-	-	-	-	-
		炭粉未満	炭粉	2	42	71	14	7	-	8	1
		炭粉	炭粉	-	5	10	1	2	-	5	1
		炭粉*	炭粉*	-	-	5	5	5	-	5	5
		炭粉*	炭粉*	30	50	95	10	10	-	15	5
		炭粉*	炭粉*	57	200	363	21	37	-	62	1
		炭粉未満	炭粉未満	95	545	1096	102	194	-	143	15
		炭粉 (<2mm) *	炭粉 (<2mm) *	-	20	-	-	-	-	-	-
		炭粉 (<2mm)	炭粉 (<2mm)	-	37	144	-	-	-	-	-
		炭粉未満 (<2mm)	炭粉未満 (<2mm)	-	59	61	-	-	-	-	-
		炭粉	紙片	19	144	359	57	69	-	33	6
		枝・幹丸	炭粉*	-	1	-	-	-	-	3	-
		炭粉*	炭粉*	-	-	-	-	-	-	1	-
		炭粉*	炭粉*	1	4	5	10	5	-	10	7
		炭粉*	炭粉*	-	-	3	-	14	-	1	15
		炭粉未満	炭粉未満	-	9	13	26	53	-	84	80
		炭粉	紙片	-	1	-	5	6	-	2	5
	炭粉	炭粉未満	-	-	-	-	-	-	9	-	
	枝・幹丸	炭粉*	-	2	-	-	-	-	1	-	
	炭粉*	炭粉*	-	-	-	16	-	-	-	-	
	炭粉*	炭粉*	2	3	5	6	10	-	1	-	
	炭粉*	炭粉*	-	-	-	-	-	-	1	-	
	炭粉*	炭粉*	3	15	8	18	300	-	6	-	
	炭粉	紙片	-	1	1	5	1	-	-	4	
	枝・幹丸 (塊状)	炭粉	-	-	-	1	-	-	-	-	
	枝・幹丸 (基部)	炭粉	-	3	1	1	-	-	-	-	
	枝・幹丸	炭粉	13	200	200	200	11	-	59	8	
	炭粉	炭粉	-	-	-	0.125g/0.135g	-	-	-	-	
	炭粉	炭粉	18	-	-	-	7	-	-	1	
	枝 (側面)	紙片	-	-	-	-	-	-	1	-	
	枝	炭粉	-	5	-	14	-	-	2	11	
	枝	炭粉	-	-	-	1	1	-	1	6	
	枝	炭粉	-	-	-	-	-	-	-	1	
	枝・幹丸・アワ類	紙片	-	-	-	-	-	-	16	-	
	アワ	紙片	-	-	-	-	-	-	16	-	
	枝・幹丸 (塊状)	炭粉	-	-	-	8	1	-	2	-	
	枝・幹丸	炭粉	-	-	-	8	1	-	200	-	
	炭粉	炭粉	-	-	-	-	-	-	0.09g	-	
	炭粉	紙片	-	-	-	-	-	-	6	-	
	炭粉	炭粉	-	-	-	2	-	-	-	-	
	アワ	炭粉	-	-	-	2	-	-	-	-	
	炭粉	炭粉	-	-	-	1	-	-	-	-	
	炭粉	炭粉	-	10	11	4	-	-	-	-	
	炭粉	炭粉	-	-	-	1	-	-	-	-	
	炭粉	炭粉	-	2	-	-	-	-	-	-	
	炭粉	炭粉	-	-	-	-	1	-	-	-	
	炭粉	炭粉	-	-	-	-	-	-	3	-	
	炭粉	炭粉	-	7	16	-	-	-	-	-	
	炭粉	紙片	-	-	2	-	-	-	-	-	
	炭粉	炭粉*	-	1	2	5	-	-	-	-	
	炭粉	炭粉	-	-	-	1	-	-	-	-	
	炭粉未満	炭粉未満	-	2	2	6	-	-	2	-	
	炭皮	紙片	-	6	6	58	-	-	1	-	
	種子	炭粉	-	-	-	-	-	-	1	-	
	炭粉	炭粉	-	-	-	-	-	-	1	-	
	炭粉	炭粉	-	1	1	-	2	-	-	-	
	炭粉	紙片	1	-	-	-	-	-	-	-	
	炭粉	炭粉	-	9	22	-	-	-	2	-	
	炭粉	炭粉	-	-	-	-	-	-	2	-	
	炭粉	炭粉	-	1	-	-	-	-	2	-	
	炭粉	炭粉	1	4	76	-	-	-	-	-	
	炭粉*	炭粉*	3	4	7	5	-	-	1	-	
	炭粉	炭粉	-	-	-	-	-	-	1	-	
	炭粉	炭粉	-	40	13	-	-	-	-	-	
	炭粉	炭粉	-	-	1	-	-	-	-	1	
	炭皮	紙片	-	7	10	-	-	-	-	-	
	種子	炭粉	-	2	-	-	-	-	1	-	
	炭粉*	炭粉*	-	2	4	5	1	-	-	-	
	炭粉*	炭粉*	-	-	-	2	-	-	-	-	
	炭粉*	炭粉*	-	2	1	-	-	-	1	-	
	炭粉*	炭粉*	-	8	9	2	6	-	1	1	
	炭粉	炭粉	-	-	-	-	-	-	-	-	
	炭粉*	炭粉*	2	3	10	2	7	-	2	-	

第4表 炭化種実同定結果 (1)

3 炭化種実同定

分類群	部位・状態 (※: 計測対象)	中京										備考
		SR1021		SR1613		SR1606		SR1620		P1608	SI1630	
		5層	17層	14層	2層	11層	2層	5層	1層	カマド		
ダイズ類	種子	4	9	19	27	15	-	4	2	-	1	
	種子 (類肉存)	-	10	9	3	-	-	3	1	-	-	
	完形未満	-	25	14	3	-	-	18	4	-	-	
	種子	-	9	3	1	1	-	-	1	2	-	
	完形未満	22	68	67	30	10	-	54	1	1	-	
ソルマメ類?	種子	22	70	102	40	10	-	-	4	-	-	
ハギ類	種子 (類肉存)	-	5	4	-	-	-	2	4	-	-	小型ダイズ類
マメ科?	種子	-	2	-	30	-	-	-	-	-	-	
マメ科?	種子	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	
マメ科?	種子 (胚部)	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
マロン類?	種子 (胚部)	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
エゴマ	種子	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	長さ4.29mm
エゴマ	果実 (種殻)	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	種子	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	6	14	6	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	6	-	28	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	種子	-	4	2	28	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	7	13	6	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	種子	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	1	10	-	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	20	7	-	1	-	-	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
アズキ類	完形未満	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	
アズキ類	完形未満	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
合計		305	1911	2023	909	816	1	563	440	53	9	合計8024個
不明												
遺骸	完形未満	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
遺骸	種子	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
双子葉類	完形未満	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	
双子葉類	半分	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明種実	種子	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明種実A	完形未満	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明種実B	完形未満	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ムギ子孫	完形未満	-	-	-	-	0.7g	-	-	-	-	-	状態不良
ヒエ子孫	完形未満	-	1.00g	0.47g	0.465g	-	-	0.098g	-	-	-	状態不良
アザミ子孫	完形未満	-	-	-	-	-	-	0.19g	-	-	-	状態不良
穀類子孫	完形未満	-	1.687g	2.603g	-	1.641g	-	2.446g	-	-	-	状態不良
非炭化種実 (可能性含む)												
サナエタ子近縁種	果実	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	
マメ科	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
エノキグサ	種子	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
キク科	種子	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	

第4表 炭化種実同定結果 (2)

次いでヒエが約 200 個、オオムギが 99 個、ダイズ類が 81 個と多い。

5) P1608 (1層)

1層からは、6分類群 (イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、ソバ、ダイズ類) 53 個が確認され、イネが 41 個と最も多い。

6) SI1630 カマド (覆土一括)

カマドからは、イネが 8 個、アズキ類が 1 個の、計 9 個が確認された。土壌水流量に対する出土個数は 10 試料中で最も少ない。

以下に、多産したイネと、複数の形状が確認されたアズキ類、ダイズ類の形態的特徴等を述べる。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

本分析では、非可食部の内穎・外穎を「穎 (果)」, 内部の可食部を「胚乳」としている。

穎・胚乳は炭化しており黒色、灰化穎は灰白色を呈する。保存状態が良好な胚乳 256 個の計測値 (表 5) は、重量が最小 0.000 ~ 0.012 (平均 0.006 ± 標準偏差 0.003) g、長さが 2.8 ~ 5.7 (平均 4.6 ± 0.5) mm、幅が 1.2 ~ 3.3 (平均 2.4 ± 0.4) mm、厚さが 0.7 ~ 2.5 mm (平均 1.7 ± 0.3) mm である。また、

炭化種 (可能性含む)	中世												古代	
	SK1621			SK1613		SK1606		SK1620		P1608		SI1620		カマド
	5層	7層	17層	14層	2層	11層	2層	5層	1層	カマド				
乳石	-	4	3	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イモ (類)	-	122	27	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-	-
イモ	204	1154	2283	221	326	-	281	31	41	8	-	-	-	-
オオムギ	-	1	15	21	41	76	-	99	111	5	-	-	-	-
ムギ主体	-	-	-	-	-	149	-	-	9	-	-	-	-	-
コムギ	5	21	14	30	328	-	8	-	4	-	-	-	-	-
ヒエ (雑状)	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒエ	31	203	201	201	18	-	59	8	1	-	-	-	-	-
ヒエ主体	-	1574	671	666	-	-	182	1	-	-	-	-	-	-
キビ	-	5	-	15	1	-	3	18	-	-	-	-	-	-
アワ類	-	-	-	-	-	-	-	17	-	-	-	-	-	-
アワ (雑状)	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
アワ	-	-	-	10	1	-	-	206	-	-	-	-	-	-
アワ主体	-	10	11	4	1	-	2	390	-	-	-	-	-	-
ソバ	3	51	31	5	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
アズキ類	10	22	51	48	35	-	7	14	-	1	-	-	-	-
アズキ類	44	183	195	77	21	-	81	12	1	-	-	-	-	-
ツルヌメ類	-	-	5	4	-	-	-	2	4	-	-	-	-	-
アサ	-	9	11	69	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
メロン類	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
メロン (雑状)	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エゴシ	-	16	16	77	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シソ類	-	7	13	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナス	-	6	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ナス類	1	30	7	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ズク	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第5層	3	6	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ (葉皮)	-	-	-	18	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ (子葉)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トホノネ (葉皮)	-	6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トホノネ (子葉)	-	-	3	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
その他	-	2	-	47	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カンゾウ類	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
ハネ類	-	3	-	23	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマドリ	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
メナモミ類	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオムギ類	-	5	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
オオムギ	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
本朝産日本	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
イボクサ	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スサ	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハロイ類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シンジュガヤ類	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フトイ類	-	1	-	1	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
オオムギ類	-	7	18	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
北シロタケ芋皮組織	1	1	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマボウシ芋皮組織	-	9	22	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-
タケ	1	5	76	1	1	-	5	-	-	-	-	-	-	-
ジュンサイ	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土壌汚染 (鉛濃度・kg)	18.3	27.6	40.1	39.0	37.1	27.6	10.0	4.2	148.7	-	-	-	-	-

*ムギ主体：コムギ1000.005g、ヒエ主体：ヒエ1000.0007g、アワ主体：アワ1000.0005gで換算。
 *土壌汚染：佐藤井表記に基づく。

第5表 炭化種実出土状況

遺構	層位	標本数 (n)	円粒					短粒					長粒				
			極小	極小	小型	中型	大型	極小	極小	小型	中型	大型	極小	極小	小型	中型	大型
SK1621	6層	30	-	-	-	-	-	1	11	10	-	-	-	6	2	-	-
	7層	70	-	-	-	-	-	19	20	1	-	16	10	4	-	-	
	17層	100	-	1	-	-	-	5	41	30	1	-	2	16	4	-	
SK1613	14層	15	-	-	-	-	-	7	4	1	-	-	1	2	-	-	
SK1608	2層	15	-	-	-	-	-	6	3	-	-	3	2	2	-	-	
SK1620	2層	20	-	-	-	-	-	3	12	1	-	-	2	2	-	-	
1層	5	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	3	-	-		
P1608	1層	5	-	-	-	-	-	-	3	2	-	-	-	-	-	-	
SI1620	カマド	5	-	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-	-	-	-	
合計	265	-	1	-	-	-	6	91	84	6	-	21	40	16	-	-	
割合 (%)	100.0%		1					187					77				
			0.4%					70.6%					29.1%				

※大 (長さ×幅)、中 (長さ/幅) は、[佐藤 1988] の定義に従う。

第6表 炭化米の粒大・粒形

計測値より「粒大 (長さ×幅)」、粒形 (長さ/幅) [佐藤 1988] を求めた結果、短粒が187個と全体の70.6%を占め、次いで長粒が77個 (29.1%)、円粒が1個 (0.4%)となる (第6表)。SE1621 (17層・7層)では、長粒が極小~極々小型が高率である。

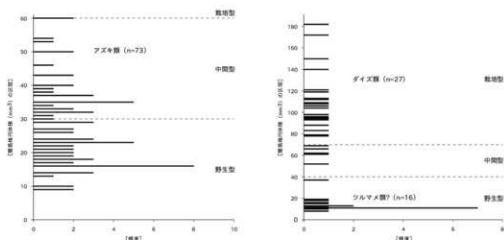
- ・アズキ類 (*Vigna* subgen. *Ceratotropicus*) マメ科ササゲ属
 種子は炭化しており黒色、直方体状楕円体を呈する。腹面正中線の子葉合わせ目上にある長楕円形の臍は「厚膜タイプ」[小畑 2008・2011] で隣接する幼根は突出しない。種皮は薄く表面は平滑である。

完形種子73個の計測値より求めた「簡易楕円体積(長さ/2×幅/2×厚さ/2×4/3×π)〔那須はか2014・2015〕は、最小8.04～最大59.74mm³である(表7)。サイズ範囲〔那須はか2014・2015〕は、「野生型(30mm³以下)」が45個、「野生型」と「栽培型(60～70mm³以上)」のサイズが重なる「中間型」が28個であり、野生型が多い(第18図)。

・ダイズ類(*Glycine max* (L.) Merr.) マメ科ダイズ属

種子は炭化しており黒色、偏平な楕円体を呈する。臍は「露出タイプ」[小畑2008・2011]で隣接する幼根の突出が顕著である。なお、焼き膨れや発泡などにより、保存状態が極めて悪い。

完形種子43個の計測値より求めた「簡易楕円体積(長さ/2×幅/2×厚さ/2×4/3×π)〔那須はか2014・2015〕は、最小7.76～最大181.40mm³である(第7表)。サイズ範囲〔那須はか2014・2015〕は「40mm³以下の野生型」が17個、「40～70mm³の中間型」が5個、「70mm³以上の栽培型」が21個であり(第18図)、変異が大きい。本分析では、とくに20mm³以下の極小型16個をツルマメ(*G. max* subsp. *soja* (Sieb. et Zucc.) Ohashi) ?としている。



第18図 マメ類炭化種子のサイズ頻度分布(簡易楕円体積等は〔那須はか2014・2015〕による)

分析群	状態	炭種	部位	計測 番号	回数	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	簡易楕円体積* (mm ³)	サイズ範囲	臍長 (mm)	臍幅 (mm)	備考
アズキ類	半分	SR1621	18種	1	-	0.016	5.46	4.21	2.06	49.56	中間型	-	-	
アズキ類	半分	SR1621	18種	2	-	0.023	5.45	4.2	2.23	53.43	中間型	-	-	
アズキ類	半分	SR1621	18種	3	-	0.012	4.66	3.03	1.59	22.09	野生型	-	-	
アズキ類	半分	SR1621	18種	4	-	0.011	4.42	2.92	1.67	21.21	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	1	-	0.03	5.33	3.54	3.07	36.24	中間型	2.67	0.85	臍長凸
アズキ類	2/3	SR1621	17種	2	-	0.022	4.62	3.95	3.78	32.84	中間型	-	-	臍長凸; 不明凸, 配付部
アズキ類	2/3	SR1621	17種	1	-	0.017	5.73	3.73	3.42	38.25	中間型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	2	-	0.021	6.41	3.53	3.59	42.51	中間型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	3	-	0.015	5.22	3.18	3.68	31.37	中間型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	4	-	0.009	4.89	3.85	3.68	22.32	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	5	-	0.011	5.07	3.41	3.13	28.32	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	6	-	0.024	4.61	3.06	3.4	25.26	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	7	-	0.012	3.8	2.66	2.5	13.22	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	8	-	0.008	3.76	2.86	2.78	15.65	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	1	-	0.013	5.69	3.48	3.36	34.82	中間型	2.7	0.51	臍長凸
アズキ類	2/3	SR1621	17種	2	-	0.01	4.12	2.58	2.7	15.02	野生型	2.16	0.58	臍長凸
アズキ類	2/3	SR1621	17種	3	-	0.023	5.8	3.85	3.89	45.46	中間型	-	-	臍長凸; 状態平凸
アズキ類	2/3	SR1621	17種	4	-	0.013	5.13	3.24	3.22	28.12	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	1	-	0.025	6.29	4.28	4.24	59.74	中間型	-	-	臍長凸; 状態平凸
アズキ類	2/3	SR1621	17種	2	-	0.015	5.18	2.99	3.23	26.18	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	3	-	0.02	5.01	3.06	3.61	34.64	中間型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	4	-	0.012	4.91	2.71	2.83	19.71	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	5	-	0.015	4.5	3.77	3.98	33.61	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	6	-	0.01	5.71	2.95	3.06	28.97	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	7	-	0.009	3.79	3.03	2.74	16.47	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	8	-	0.009	4.42	2.99	2.86	19.78	野生型	-	-	
アズキ類	2/3	SR1621	17種	9	-	0.04	3.58	3.23	2.05	8.85	野生型	-	-	
アズキ類	半分	SR1621	17種	1	-	0.008	5.35	3.11	1.92	33.44	中間型	-	-	
アズキ類	半分	SR1621	17種	2	-	0.006	3.87	3.39	1.87	25.68	野生型	-	-	
アズキ類	半分	SR1621	17種	3	-	0.005	3.58	2.61	1.36	13.20	野生型	-	-	
アズキ類	半分	SR1621	17種	4	-	0.008	5.44	3.97	1.68	28.89	野生型	-	-	

第7表 マメ類炭化種子のサイズ(1)

分類群	材質	産地	標本 番号	採取 番号	重量 (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	断面積(円形) ¹⁾ (mm ²) ²⁾	積長 (mm)	積幅 (mm)	備考		
アズキ類	半分	SR1621	1789	5	-	0.007	3.07	3.57	1.09	-	23.18	野生型		
アズキ類	半分	SR1621	1789	6	-	0.006	3.56	3.47	1.47	-	15.72	野生型		
アズキ類	半分	SR1621	1789	7	-	0.005	3.74	2.74	1.67	-	17.91	野生型		
アズキ類	完全	SR1613	1489	1	72	0.021	5.59	3.33	3.17	30.88	中間型	2.92	0.5	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	2	-	0.013	4.34	3.23	3.15	23.11	野生型	1.71	0.45	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	3	-	0.018	4.51	3.13	2.99	22.14	野生型	1.74	0.52	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	4	-	0.025	5.4	3.7	3.78	39.52	中間型	1.33	0.38	積長付・不明個、配付者
アズキ類	完全	SR1613	1489	5	-	0.019	5.53	3.5	3.44	34.84	中間型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	6	-	0.014	4.99	3.7	3.54	34.20	中間型	1.92	0.72	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	7	-	0.018	4.59	3.54	3.57	31.52	中間型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	8	-	0.019	5.31	3.81	3.41	36.10	中間型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	2	-	0.014	4.99	2.76	2.62	15.46	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1613	1489	1	-	0.008	5.59	3.73	1.93	42.12	中間型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1613	1489	2	-	0.013	4.69	3.82	2.1	39.38	中間型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1613	1489	3	-	0.006	4.15	2.61	1.58	17.91	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1613	1489	4	-	0.009	3.92	3.22	1.39	18.41	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1613	1489	5	-	0.007	4.34	3.04	1.47	20.30	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1613	1489	6	-	0.006	3.68	3.98	1.57	18.62	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1613	1489	7	-	0.007	3.92	2.62	1.44	15.60	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1613	1489	8	-	0.006	3.71	2.31	1.35	12.11	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1006	228	-	-	0.026	4.92	3.59	3.74	34.57	中間型	-	-	積長付・不明個、配付者
アズキ類	完全	SR1006	228	1	-	0.012	4.45	2.64	2.68	16.48	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1006	228	2	-	0.021	4.58	3.46	3.54	31.92	中間型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1006	228	3	-	0.028	6.38	4.05	4.39	69.56	中間型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1006	228	4	-	0.017	4.14	3.58	3.81	29.55	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1006	228	5	-	0.016	4.23	2.65	3.06	17.95	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1006	228	6	-	0.013	4.14	3.13	3.02	22.71	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1006	228	1	-	0.008	5.47	3.83	1.7	37.28	中間型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1006	228	2	-	0.004	2.99	2.29	1.27	9.10	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1006	228	3	-	0.004	2.72	2.31	1.37	9.01	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	4	-	0.004	2.77	2.93	1.18	8.94	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	5	-	0.005	3.82	2.75	1.43	15.72	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1006	228	6	-	0.006	4.97	2.73	1.54	21.87	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	-	-	0.023	5.16	3.48	3.42	32.14	中間型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1620	1589	1	79	0.008	3.99	3.08	1.58	20.13	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1620	1589	2	-	0.006	4.21	2.86	1.32	13.84	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1620	1589	3	-	0.006	4.15	2.61	1.36	15.42	野生型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1620	1589	4	-	0.01	4.48	3.1	1.52	22.09	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	1	-	0.023	5.55	3.46	3.68	36.36	中間型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1620	1589	5	-	0.008	5.74	3.86	2.07	49.25	中間型	-	-	積長付
アズキ類	半分	SR1620	1589	2	-	0.009	5.55	4.07	2.21	52.25	中間型	-	-	積長付
アズキ類	縦切	SR1620	キマド	-	-	0.003	4.84	2.49	1.26	15.89	野生型	-	-	基部断面欠損
アズキ類	完全	SR1621	1789	1	-	0.049	8.82	6.21	3.67	105.20	栽培型	2.69	1.19	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	2	-	0.027	7.18	5.53	3.91	103.77	栽培型	2.85	1.18	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	3	-	0.042	9.01	5.17	4.62	112.63	栽培型	2.58	1.31	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	4	-	0.046	8.46	5.74	4.66	118.43	栽培型	2.62	1.02	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	5	-	0.052	8.99	5.4	4.24	107.72	栽培型	3.53	1.5	積長付・脱ぎまがれ
アズキ類	完全	SR1621	1789	6	-	0.021	6.74	3.67	4.05	149.26	栽培型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	7	-	0.059	8.98	6.98	5.53	181.40	栽培型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	8	-	0.033	8.71	5.55	3.79	95.88	栽培型	-	-	積長付・不明個
アズキ類	完全	SR1621	1789	9	-	0.024	8.09	5.16	3.53	77.12	栽培型	-	-	積長付・不明個
アズキ類	完全	SR1621	1789	10	-	0.059	8.49	5.62	4.34	108.95	栽培型	-	-	積長付・不明個
アズキ類	完全	SR1621	1789	1	-	0.023	6.43	5.01	3.65	61.53	栽培型	1.8	0.94	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	2	-	0.032	7.76	5.34	4.33	93.90	栽培型	2.2	0.88	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	3	-	0.049	9.21	6.32	4.67	139.21	栽培型	3.02	1.02	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	4	-	0.033	8.44	6.14	3.67	111.32	栽培型	5.18	1.05	積長付
アズキ類	半分	SR1621	1789	5	-	0.029	7.27	5.66	4.1	92.70	栽培型	2.63	1.16	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	6	-	0.029	6.31	5.26	3.55	60.09	栽培型	2.53	1.44	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	7	-	0.062	9.43	6.29	5.52	171.35	栽培型	-	-	積長付・不明個
アズキ類	完全	SR1621	1789	8	-	0.048	8.74	5.38	4.88	120.09	栽培型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	9	-	0.032	7.36	5.39	3.91	82.76	栽培型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	1	-	0.035	6.41	4.82	4.26	68.88	中間型	1.89	0.7	積長付・脱ぎまがれ
アズキ類	完全	SR1613	1489	2	-	0.027	6.7	4.16	3.56	51.30	中間型	-	-	積長付・不明個
アズキ類	完全	SR1613	1489	3	-	0.029	6.79	4.31	4.25	65.09	中間型	1.43	0.52	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	-	74	0.027	8.29	5.03	3.59	78.34	栽培型	1.89	0.67	積長付・幼葉断面含まれる
アズキ類	完全	SR1620	1589	1	-	0.044	9.14	5.56	3.3	87.76	栽培型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	2	-	0.05	8.76	4.83	4.42	97.76	栽培型	2.14	0.54	積長付・不明個
アズキ類	完全	SR1620	1589	3	-	0.015	5.39	3.66	3.64	36.56	野生型	1.51	0.71	積長付・脱ぎまがれ、側面・背面欠損
アズキ類	半分	SR1621	1789	1	76	0.013	4.59	5.51	2.47	84.47	栽培型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	1	-	0.003	4.28	3.77	1.25	7.76	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	2	-	0.006	5.06	3.18	2.13	17.77	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	3	-	0.004	4.92	3.21	2.26	18.68	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	4	-	0.005	4.27	2.34	2.21	11.95	野生型	1.34	0.65	積長付
アズキ類	完全	SR1621	1789	5	-	0.004	4.41	3.11	1.72	13.43	野生型	1.36	0.33	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	-	76	0.005	3.52	2.96	2.15	10.54	野生型	1.75	0.59	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	1	-	0.008	3.85	2.81	2.19	12.40	野生型	1.69	0.52	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	2	-	0.004	4.04	2.46	1.96	10.19	野生型	1.62	0.43	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	3	-	0.005	4.08	2.67	2.41	15.80	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	2	-	0.005	3.7	2.57	2.06	10.25	野生型	1.61	0.69	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	3	-	0.006	3.85	2.61	2.07	10.89	野生型	-	-	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	4	-	0.007	4.07	2.84	2.35	14.22	野生型	1.19	0.55	積長付
アズキ類	完全	SR1620	1589	1	-	0.006	3.65	2.71	2.18	10.88	野生型	1.89	0.67	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	2	-	0.007	3.9	2.3	2.05	9.62	野生型	1.13	0.52	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	3	-	0.009	3.76	2.51	2.06	10.15	野生型	1.74	0.68	積長付
アズキ類	完全	SR1613	1489	4	-	0.003	3.07	3.71	1.94	10.10	野生型	1.62	0.44	積長付

1) 断面積(円形)は最大断面(長径×短径)にπ/4で乗ずる。*断面は2014-2015に適用した。

2) *断面積(円形)は「1」で表す。

*断面積(円形)は「1」で表す。

第7表 マメ類炭化種子のサイズ(2)

D 考 察

1) 栽培植物

中世の井戸跡を主体とする各遺構の埋植物より得られた炭化種実群には、栽培種で果樹のモモ、穀類のイネ、オオムギ、コムギ、ヒエ、キビ、アワ、ソバ、繊維植物のアサ、果菜類のメロン類、ナス、油料植物のエゴマ、ゴマが確認された。この他、栽培の可能性のあるエノコログサ属（アワ?）、マメ類のアズキ類、ダイズ類、ツルマメ類?、シソ属-イヌコウジュ属、ナス属が確認され、栽培種（可能性含む）が多数（約97%）を占める組成が明らかとなった。

炭化種実群は、穎（籾）が残る個体を含む穀類や雑穀類を主体とするが、その組成は遺構・層位間で異なる状況が確認された。SE1621は遺構単位では分類群数・個数が最も多く、層位別では多寡があるものの、イネ、ヒエ、ダイズ類を主体とする傾向を示す。また、SE1613（14層）がヒエ主体、SE1606（2層）がイネ、コムギ主体、SE1620（5層）がアワ主体、SE1620（2層）、P1608（1層）及びSI1630（カマド）はイネ主体という傾向が認められた。

炭化種実群のうち、最も多く確認されたイネの胚乳（炭化米）は、一部を対象に大きさを計測した結果、短粒が全体の70.6%を占め、次いで長粒が29.1%、円粒が0.4%となり、SE1621の17層・7層で長粒・極小〜極々小型が多いという傾向が確認された（第6表）。

また、ダイズ類やアズキ類などのマメ類は、縄文時代以降の栽培やサイズの大形化が検討されている（例えば、中山2010）、[西本^{ほか}2012]、[那須^{ほか}2014,2015]など）。なお、古代以降の資料を対象とした計測事例は少ないことから、今回の分析では出土マメ類について計測を行った。その結果、アズキ類種子は、6割が現生のヤブツルアズキに類似するサイズの「野生型」、4割が現在の栽培種アズキのサイズ範囲である「栽培型」と「野生型」との間の「中間型」に該当し、ダイズ類・ツルマメ類?の種子は、4割が現生のツルマメに類似するサイズの「野生型」、1割が「中間型」、5割が現在の栽培種ダイズのサイズ範囲である「栽培型」に該当することが確認された（第18図）。この結果を踏まえると、個体間で変異が大きい状況や、複数系統のアズキ類やダイズ類、ツルマメ類?が利用されていた可能性などが推定される。

なお、本遺跡や周辺の遺跡では、今回と同様に井戸跡埋植物や出土種実遺体を対象とした分析調査が実施されている。これらの調査で確認された栽培種についてみると、柄目木遺跡Ⅱの13世紀後半〜14世紀後半と推定される井戸跡からは、モモ、イネ、アワ、ヒエ、オオムギ、コムギ、アサ、マメ類、シソ属、ナス科、メロン類（モルディカメロン型、マクワ・シロウリ型、雑草メロン型）が確認されている[パリオ・サーヴェイ株式会社2013]。また、鴨深甲遺跡の14世紀後半とされる井戸跡からはモモ、イネ、オオムギ、コムギ、アサ、マメ類、エゴマ、シソ属、メロン類、ヒョウタン類[パリオ・サーヴェイ株式会社2006]が、境塚遺跡の中世の井戸跡からはウメ、モモ、イネ、アサ、ヒョウタン類が確認されている[パリオ・サーヴェイ株式会社2016]。

以上の結果などから、本遺跡の中世の井戸跡埋植物より確認された栽培種（可能性含む）の炭化種実群の組成は、既存の調査事例で明らかとされている組成と概ね類似する傾向を示すことが指摘され、これらの栽培種は当該期には普遍的に利用されていた植物質食料と考えられる。また、古代のSI1630より検出された炭化種実が僅かであったが、確認されたイネやアズキ類は当時利用されていた植物質食料を示すと考えられる。

なお、今回の調査では、穀類及び雑穀類には穎（籾）が残る個体が認められたことから、穎（籾）が付

いた生の状態で火を受け炭化したものも含まれると考えられる。このような、炭化した穀類とともに顕が
 多量検出された事例は、田屋道遺跡の中世の井戸跡埋積物に確認された黒色層（炭化した植物層）に確認さ
 れているほか、SE88の炭化植物主体とする層準（1～3層）の植物珪酸体（灰像）分析ではイネの顕に形成
 される植物珪酸体（イネ属顕珪酸体）が非常に多く含有されることが明らかとされている[パノノ・サーヴェ
 イ株式会社 2008]。また、田屋道遺跡では、井戸跡覆土の埋積状況が分類されており、炭化植物層は井戸



第19図 炭化種実（1～30が放射性炭素年代測定試料）

覆土中位～上位に認められることや、上述した栽培種（可能性を含む）が多量検出されることから、井戸を埋める際の儀礼行為が推定されている [大島 2008]。今回の試料は、遺構及び層位間では炭化種実群の組成は異なる傾向にあるが、確認された栽培種は前述した特徴とともに可食できる部位が多い点で共通しており、調理目的以外による被熱や炭化も想定される。このような、栽培種を主体とする炭化種実群を含む層が形成された背景については、井戸埋植物の形成過程やその他の遺物の出土状況と合わせた検討が期待される。

2) 周 辺 植 生

次に栽培種と栽培の可能性を除いた炭化種実群についてみると、中世の遺構からは、木本のクリ、クワ属、トチノキ、草本のイボクサ、スゲ属、ハリイ属、シンジュガヤ属、フトイ類、ホタルイ属、ギシギシ属、ポントクタデ近似種、ヤナギタデ近似種、タデ属、ジュンサイ、ハギ属、マメ科？、メナモミ属、オナモミ属、キク科が確認された。

木本は全て落葉高木で、河畔林要素のトチノキ、二次林要素のクワ属やクリは、調査地周辺や阿賀野川流域に分布した林分由来と考えられる。なお、堅果類のクリは果皮内の子葉が食用され、トチノキはあく抜きすることにより種皮内の子葉が食用できることから、上述した栽培種とともに植物質食料として利用されていたと考えられる。出土したクリやトチノキは、確認された状態から利用後の食料残滓の可能性があり、子葉片などは食用されることなく火を受けたと考えられる。

一方、草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群から構成される。おそらく、調査地周辺に生育した草本群落由来と考えられる。また、浮葉植物のジュンサイや抽水植物のイボクサ、フトイ類、ホタルイ属、湿生植物のハリイ属、シンジュガヤ属、ポントクタデ近似種、ヤナギタデ近似種などの水湿地生植物も確認されることから、周辺域にはこれらの分類群が生育可能である水湿地の存在も示唆される。

4 骨 同 定

A 試 料

試料は、SE1621 (17層)、SE1613 (14層)、SE1606 (2層)、SE1620 (2層) の水洗選別により回収・抽出された骨片 4 試料 (選別骨片: 1.50g) である (第 2 表)。

B 分 析 方 法

試料を肉眼及び実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。

C 結 果

分析に供された骨片は、いずれも微細な破片であり、白色～黒色を呈し、表面に細かなひび割れがみられるなど焼骨の特徴を示す。確認された分類群は、硬骨魚綱がコイ科・トゲウオ科 (イトヨ属?) の 2 種類、哺乳綱がネズミ類の 1 種類である (第 8 表)。同定結果を第 9 表に示す。以下、遺構 (試料) 別に結果を記す。

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
硬骨魚綱	Class Osteichthys
糸鱗亜綱	Subclass Actinopterygii
コイ目	Order Cypriniformes
コイ科	Family Cyprinidae
コイ科	Gen. et. sp. indet.
トゲウオ目	Order Gasterosteiformes
トゲウオ亜目	Suborder Gasterosteoidae
トゲウオ科	Family Gasterosteidae
イトヨ属?	<i>Gasterosteus</i> ?
哺乳綱	Class Mammalia
ネズミ目 (齧歯目)	Order Rodentia
ネズミ類	Gen. et. sp. indet.

第 8 表 検出分類群一覧

1) SE1621 (17層)

コイ科の胸鰭棘、硬骨魚綱の鰭棘等、種類(第9表では脊椎動物門と表記)及び部位不明の破片が確認される。

2) SE1613 (14層)

コイ科の胸鰭棘、トゲウオ科(イトヨ属?)の腹鰭棘、硬骨魚綱の前上顎骨・椎骨・鰭棘等、ネズミ類の尾椎、種類部位不明の破片が確認される。

3) SE1606 (2層)

硬骨魚綱の椎骨・鰭棘等、種類部位不明の破片が確認される。

4) SE1620 (2層)

種類部位不明の破片が確認される。

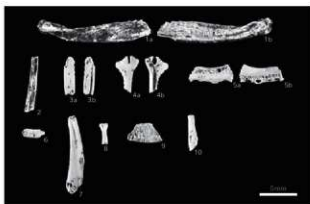
D 考 察

中世の井戸跡埋積物より検出された骨は、いずれも焼骨の特徴を示すことから、何らかの要因により焼かれたものとみられる。なお、骨片が回収された土壌からは、3で述べたように植物質食料として利用できる栽培種を主体とする炭化種実群が確認されており、これらと同様に意図的に焼かれた骨、あるいは利用後の残渣などの状況が想定される。

確認された分類群のうち、トゲウオ科は鰭棘が検出され、イトヨ属の可能性がある。イトヨ属は、降海型と陸封型があるが、いずれにしても淡水域で生活する。また、コイ科は淡水生の魚類である。これらの魚類は、おそらく遺跡周辺の河川で漁獲されたものと考えられる。一方、破片のため種類を明らかにできなかったが、SE1613(14層)で検出された硬骨魚綱の前上顎骨は、上記したコイ科・トゲウオ科のほか、アユ・イワナ・ヤマメ・サケなどを含むサケ目とも異なる形態を示すことから、これら以外の種類であるとみられる。

遺構名	層位	時期	選別骨片(g)	種類	部位	状態等	数量	炭化	備考
SE1621	17層	中世	0.26	コイ科	胸鰭棘	破片	1	○	
				硬骨魚綱	鰭棘等	破片	3	○	
				脊椎動物門	不明	破片	54	○	
				残渣			0.14 g		
SE1613	14層	中世	0.80	コイ科	胸鰭棘	破片	1	○	
				トゲウオ科(イトヨ属?)	腹鰭棘	破片	1	○	
				硬骨魚綱	前上顎骨	破片	1	○	
				硬骨魚綱	椎骨	破片	1	○	
				硬骨魚綱	鰭棘等	破片	27	○	
				ネズミ類	尾椎	略定	1	○	
				脊椎動物門	不明	破片	71	○	
残渣			0.51 g						
SE1606	2層	中世	0.06	硬骨魚綱	椎骨	破片	1	○	
				硬骨魚綱	鰭棘等	破片	1	○	
				脊椎動物門	不明	破片	4	○	
残渣			0.01 g		確				
SE1620	2層	中世	0.38	脊椎動物門	不明	破片	6	○	
残渣			0.41 g						

第9表 骨同定結果



1. コイ科 胸鰭棘 (SE1621 17層)
2. 硬骨魚綱 鰭棘等 (SE1621 17層)
3. コイ科 胸鰭棘 (SE1613 14層)
4. トゲウオ科(イトヨ属?) 腹鰭棘 (SE1613 14層)
5. 硬骨魚綱 前上顎骨 (SE1613 14層)
6. 硬骨魚綱 椎骨 (SE1613 14層)
7. 硬骨魚綱 鰭棘等 (SE1613 14層)
8. ネズミ類 尾椎 (SE1613 14層)
9. 硬骨魚綱 椎骨 (SE1606 2層)
10. 硬骨魚綱 鰭棘等 (SE1606 2層)

第20図 出土骨

< 引用文献 >

- Bronk Ramsey, C., & Lee, S., 2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal. *Radiocarbon*, 55, 720-730.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 笠原安夫, 1982, 鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実タール状塊について, 鳥浜貝塚1980年度発掘調査概報・研究の成果一縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査2ー, 福井県教育委員会, 65-87.
- 中山誠二, 2010, 縄文時代のアズキ亜属に関する基礎的研究, 東海史学, 第44号, 83-103.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版), 東北大学出版会, 678p.
- 那須浩郎・中沢道彦・中村 豊・森泉かよ子・会田 進, 2014, 縄文-弥生移行期におけるアズキ亜属の大型化, 第29回日本植生史学会大会講演要旨集, 38.
- 那須浩郎・会田 進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・興石 甫, 2015, 炭化種実資料からみた長野県諏訪地域における縄文時代中期のママの利用, 資源環境と人類, 第5号, 明治大学黒曜石研究センター, 37-52.
- 西本豊弘・住田雅和・竜子正彦・高橋 潔・近藤奈央・吉崎 伸, 2012, 縄文時代のアズキについてー京都市上里遺跡出土のアズキ類の検討ー, 動物考古学, 第29号, 45-53.
- 小畑弘巳, 2008, ママ科種子同定法, 極東先史古代の雑穀3, 日本学術振興会平成16~19年度科学研究費補助金(基盤B-2)(課題番号16320110)「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書, 小畑弘巳編, 熊本大学埋蔵文化財調査室, 225-252.
- 小畑弘巳, 2011, 東北アジア古民族植物学と縄文農耕, 同成社, 309p.
- 大島秀俊, 2008, 5まとも2)井戸, 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXVII 田屋遺跡Ⅰ 宮の越遺跡Ⅰ, 新潟県埋蔵文化財調査報告書第181集, 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 77-80.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2006, 自然科学の分析, 一般国道49号安田バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 鴨巣甲遺跡, 新潟県埋蔵文化財調査報告書第172集, 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 35-41.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2008, 自然科学分析, 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXVII 田屋遺跡Ⅰ 宮の越遺跡Ⅰ, 新潟県埋蔵文化財調査報告書第181集, 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 57-73.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2013, 井戸内出土土塊の種類, 一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書VI 柄目木遺跡Ⅱ, 新潟県埋蔵文化財調査報告書第237集, 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 59-62.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2016, 自然科学分析, 一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書IX 塚塚遺跡Ⅱ, 新潟県埋蔵文化財調査報告書第262集, 新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, 66-79.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Ni, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.
- 佐藤敏也, 1988, 弥生のイネ, 弥生文化の研究2 生業, 金関 愚・佐原 真編, 雄山閣, 97-111.
- Stuiver Minze and Polach A Henry, 1977, *Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data*, *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種と果実 一形態や大きさが一目でわかる植物の種と果実632種一, 誠文堂新光社, 272p.
- 橋坂恭代, 1993, アワ・ヒエ・キビの同定, 吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」, 261-281.
- 谷城勝弘, 2007, カヤツリグサ科入門図鑑, 全国農村教育協会, 247p.
- 吉崎昌一, 1992, 古代雑穀の検出, 月刊考古学ジャーナル, No.355, 2-14.

第八章 調査のまとめ

1 中世の調査成果

A 中世の柄目木遺跡

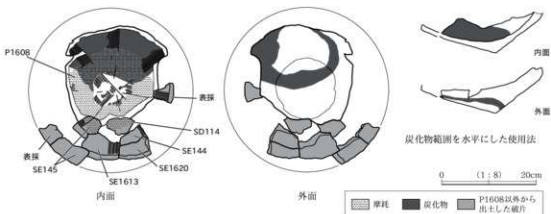
2016年度調査では5基の井戸を検出した。いくつかの井戸の覆土には、泥炭層や炭化物を多量に含む層が折り重なって堆積する状況が確認できた。土壌を洗浄して分析した結果、検出した炭化種実の約97%を穀類・雑穀類を主体とする栽培種が占めることが分かった。炭化種実群の組成は既調査区〔加藤^{ほか}2013〕や鴨深甲遺跡〔高橋^{ほか}2006b〕と大きく異ならないが、今回、対象となる層位の土壌をすべて洗浄・分析したところ、層位によって主体となる炭化種実に違いがあることも明らかとなった（第VII章）。こうした状況が偶然または意図的なものなのか、食糧事情の変化を示しているのかといった問題は、さらに分析事例を積み重ねて検討する必要がある。

2016年度調査区の井戸やピットから出土した土器・陶磁器は『柄目木遺跡1』〔佐藤^{ほか}2010〕で報告した東側の調査区の井戸と接合するものが多く、継起的に構築・使用・廃絶が繰り返された一体の遺構群と捉えられる。第VI章では遺構間接合資料の垂直分布を基に遺構の埋没順序を推測した（第13図・第14図）。本節では出土遺物の観察も加えて検討を深めたい。

最も多くの遺構(SE144・145・1613・1620・SD114・P1608)から出土した破片が接合した珠洲焼片口鉢(61)の使用痕を観察すると、内面には、器面が剥離するほどの摩耗と、この剥離面を覆うように底部から口縁部にかけて付着する炭化物が認められる。外面には、内面の炭化物範囲と対応する位置に輪状に炭化物が付着する(図版30)。外面の付着物の状況は、SI1630から出土した小甕(82)と類似する(第21図)。こうした使用痕の成因は、底面中心部に直接火が当たらない状態、すなわち地面に直置きで加熱したことによると考えられる〔小林2011〕。以上から、片口鉢61は通常の使用後に加熱具に転用されたこと、その際は側面を下にして使用されたことが推察される。なお、内・外面の炭化物が延びていく状況から、二次利用の時点で第22図の上側の口縁部が残存していたことは確実である。



第21図 小甕(82)底部外面の炭化物

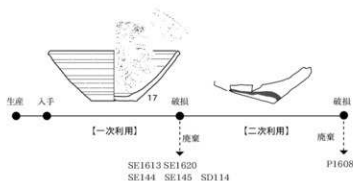


第22図 珠洲焼片口鉢61の接合状況と二次利用モード

さて、二次利用の時点で片口鉢が完形であったとすれば、あえて傾けて加熱することは不自然である。しかし、P1608 から出土した以外の接合破片が、この時点ですでに本体から分離していたとすれば、器体の傾きは使用時のバランスを保つためと合理的に解釈できる。すなわち、この片口鉢は、通常の用途に使用さ

れた後、側面を打ち欠いて加熱具に転用され、その後、完全に使用が不可能になった段階で、P1608 に投棄されたと考えられる。P1608 が遺物を意図的に詰め込んだような状況から「ゴミ穴」と判断できることは第VI章で述べたとおりである。

以上のような片口鉢の変遷を模式化したのが第23図である。これにより、二次利用以前に本体から分離した破片が出土した SE144・145・1613・1620・SD114 は P1608 よりも先に埋没していたことが判明する。このように、モノの二次利用を考慮することで、遺構間の遺物接合関係が当該遺構の異時期性を示す場合があることに注意しておきたい。



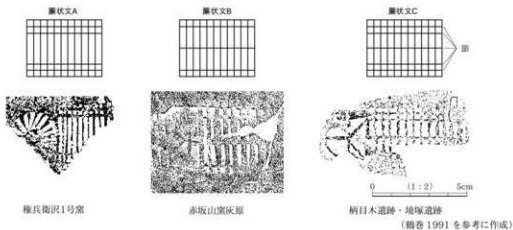
第23図 珠洲焼片口鉢61の生産から廃棄まで

B 押印を有する瓷器系陶器について

2016年度の調査では、押印を有する瓷器系陶器の破片が1点出土し、既報告資料との接合作業によって、全体の形状や施文手法が判明するまでに復元できた(51)。本節では瓷器系笹神窯製品に関する先行研究に拠りつつ、本資料の位置付けを考察する。

笹神窯製品の押印は、長方形の地下に直交する直線や×印を配する主文様と、菊花文や「大」の字をあしらう副文様の組み合わせで構成される。主文様と副文様は一体的な施文具によるものであり〔鶴巻1991〕、それぞれが独立的に存在するわけではない。柄目木遺跡出土例は、主文様が鶴巻分類の簾状文に該当するが、長辺に各2本、中央に1本の筋が入る笹神窯では未発見の様式である(第24図簾状文C)。副文様は、「大」の字を主文様に接する側を下にして五角形の枠内に配置する。

簾状文Aは権兵衛沢1号窯、簾状文Bは狼沢1号窯・赤坂山2号窯覆土で確認できる。簾状文Bは、

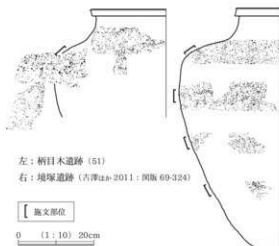


第24図 簾状文の分類と出土例

主と文様に接する側を上にして「大」の字の副文様を配置する例が2パターン確認されている(第24図)。このように、柄目木遺跡出土例は、個々の文様要素は笹神窯製品に酷似するものの、同一の印は確認できない。

柄目木遺跡例と同一の施文具による押印を持つ瓷器系陶器甕は、境塚遺跡で大量に出土している[古澤ほか2011]。復元率の高い資料では、いずれも肩部から胴部にかけて多段に押印されていることが確認できる。一方、柄目木遺跡例は、境塚遺跡例であれば押印が施される胴部中段まで復元できたにもかかわらず押印が存在しないことから、肩部に一段しか押印されていないことが明らかである(第25図)。すなわち、柄目木遺跡例と境塚遺跡例は、同一の施文具を使用するものの押印の手法に相違があることが指摘できる。

瓷器系笹神窯の操業期間は、権兵衛沢段階(常滑5型式)と狼沢段階(常滑6a型式)に細分できる。権兵衛沢段階の特長として、甕の口縁に受口状とN字状の2種が存在し、押印を肩部から胴部にかけて多段に行うのに対し、狼沢段階ではN字状口縁に統一され、押印は肩部または胴部の1段のみとなる[鶴巻1997]。すなわち、柄目木遺跡・境塚遺跡の瓷器系陶器甕は、押印手法の観点から権兵衛沢段階と狼沢段階の中間的な様相を示しており、過渡期的な段階の未発見窯の存在を予測させる資料と言える。



第25図 施文部位の比較

2 古代の調査成果

A 古代の柄目木遺跡

2014年度調査で2棟、2016年度調査で1棟の竪穴建物を検出した。これら3棟は『柄目木遺跡Ⅱ』で報告した2棟(SI778・SI803)をあわせて5棟で居住域のまとまりを形成する(第26図Ⅰ群)。Ⅰ群と40m程度を隔てた東側には『柄目木遺跡Ⅰ』で報告した居住域が存在する(第26図Ⅱ群)。Ⅰ・Ⅱ群とも出土土器の年代は8世紀後半から9世紀初頭を示すが、Ⅱ群は竪穴建物4棟、掘立柱建物3棟で構成され、竪穴建物のみⅠ群とは様相が異なる。

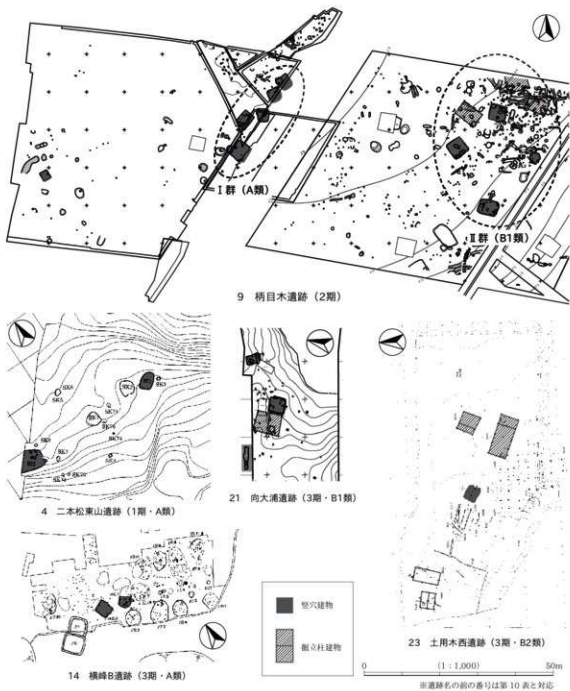
2011年度調査では古代の土坑SK774から漆紙が出土しており[加藤ほか2013]、隣接する2016年度調査区では工房的な遺構の検出も想定されたが、結果的に存在しなかった。このことから古代の柄目木遺跡の位置付けとしては、山口遺跡や蕪木遺跡といった拠点のまたは官衙集落の周辺に立地する一般的な集落と理解しておくのが穏当であろう。

B 新潟平野周辺における古代の竪穴建物

古代の柄目木遺跡は、竪穴建物を主な居住施設とする集落であることが判明した。新潟平野の周辺において古代(8世紀以降)の竪穴建物の検出が報告された遺跡は28を数える(第10表)。棟数は、153棟(ただし、報告書によっては遺存状況や火処の有無などにより建物と認定しない場合もあるため、実数は前後する)のうち90棟が山三賀Ⅱ遺跡で検出されており、これを除くと一遺跡あたり平均2.3棟となる。調査面積にも

よるため一概には比較できないが、柄目木遺跡は14棟を検出した上条遺跡に次いで検出数が多い。ただし、柄目木遺跡I群の5棟はカマドの方位が一定しないことや隣接しすぎる建物があることから、同時に利用されたのは1、2棟程度と考えられ、一時的な集落景観は山三賀II遺跡を除く竪穴建物検出遺跡と類似するものであったと思われる。

竪穴建物を遺跡における存在形態によって分類すると、竪穴建物のみで居住施設を構成するA類と、竪穴建物と掘立柱建物が共存するB類に類型化でき、B類は掘立柱と竪穴の比率により、掘立柱より竪穴が多いか同程度程度存在するB1類と、竪穴が掘立柱より少ないB2類に細分できる。以下では集落・竪穴の年代が判明する事例について、時期別・地域別の各類型の消長を検討する。



第26図 古代竪穴建物の存在形態の諸類型

1期(8世紀前半:春日編年Ⅲ期)の遺跡は、日本海沿岸の砂丘地域・沖積地に分布する。存在形態はすべてA類である。A類は、7世紀以前からの普遍的な居住形態と考えられる。すべての建物がカマドを有し、円筒形土製品などの土製カマド補強材を伴うことが特徴として指摘できる。

2期(8世紀後半~9世紀前半:春日編年Ⅳ・Ⅴ期)の遺跡は、1期から続く四十石遺跡を除き、分布域が阿賀北に限定される。存在形態はA類が多い中、B1類の柄目木遺跡Ⅱ群が出現する。竪穴建物を主体とする集落に掘立柱建物が取り入れられる初期の様態を示すと考えられる。

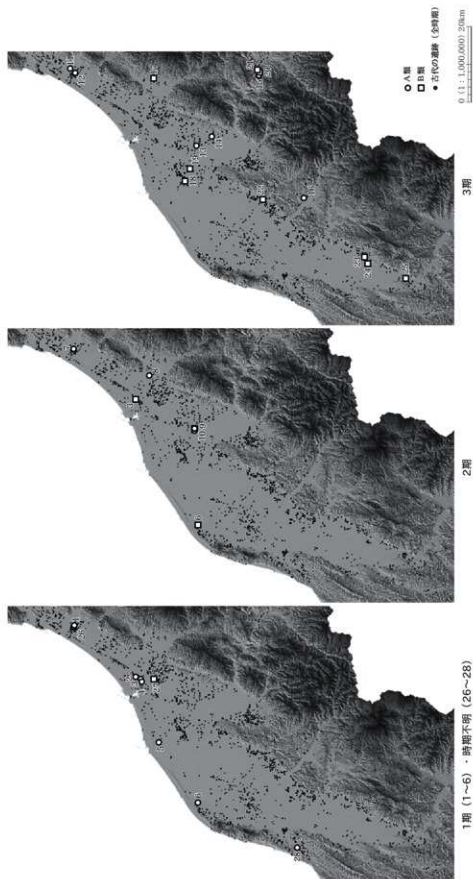
3期(9世紀後半以降:春日編年Ⅵ期以降)は、内陸部に分布域が広がり、山間部へも

進出する。存在形態はB類が増加し、A類は阿賀北と山間部のみとなる。なお、B類には春日真実が「竪穴・掘立柱併用建物」の可能性を指摘する坂の沢C遺跡(A群)、向大浦遺跡、山三賀Ⅱ遺跡(一部)を含む[春日2016]。上条遺跡の集落構成は、9世紀中葉~末がB1類、9世紀末~10世紀初頭がB2類、10世紀前半以降は掘立柱建物のみとなり、竪穴建物利用形態の推移が追える。土用木西遺跡の竪穴建物は、柱穴が一列に並ぶ特異な建物である。上郷A遺跡・上条遺跡(9世紀末~10世紀初頭)は農作業等に伴う簡易な建物と考えられている。これらの例はカマドが伴わず、竪穴建物の意義の変化が読み取れる。一方、A類が残存する阿賀北の田島遺跡や三辺稲荷遺跡では、竪穴建物から緑輪陶器の優品が出土しており、竪穴建物が掘立柱建物に比べ格の低い居住形態であるとは一概に言い切れない。

以上のように、新潟平野周辺では、竪穴建物が主たる居住施設から仮設的・付随的建物に変質していくA類→B1類→B2類という方向性と、9世紀以降もA類が継続する阿賀北の地域性が指摘できる。柄目木遺跡は、その両面が看取できる点において、古代集落における居住施設の変遷を端的に示す遺跡と言える。

No.	遺跡名	所在地	時期	類型	棟数	文献
1	坂町宮ノ郷B	村上市	1	A	2	吉井1993
2	金巻	聖籠町	1	A	1	石田as-2009
3	山三賀Ⅱ	聖籠町	1~2	A-B	90	坂井as-1989
4	二本松金山	聖籠町	1	A	2	伊藤1993
5	山木戸	新潟市	1	A	1	漢山2004
6	四十石	新潟市	1~2	A-B	2	渡邊ますみ2012
7	坂町宮ノ郷D	村上市	2	A	1	吉井2000
8	松嶋	新発田市	2	A	1	鎌倉1998
9	柄日本	阿賀野市	2	A-B	10	佐藤as-2010・加藤as-2013・本書
10	村前東A	阿賀野市	2	A	1	加藤as-2010
11	田島	村上市	3	A	3	吉井2001
12	田屋	村上市	3	A	1	吉井2003
13	三辺稲荷	阿賀野市	3	A	4	阿賀野市教育委員会2008
14	磯崎B	阿賀野市	3	A	2	石川as-1981
15	上野東	阿賀野市	3	A	1	高橋as-2006a
16	南中五輪跡	三条市	3	A	1	千葉1977
17	坂ノ沢CⅡ	新発田市	3	B	2	渡邊美穂子2001
18	日本	新潟市	3	B	2	今井as-2007
19	上郷A	新潟市	3	B	1	春日as-1997
20	大坂上道	阿賀野市	3	B	1	榎原as-2008
21	向大浦	阿賀野市	3	B	2	金井as-2011
22	道下	田上市	3	B	1	田屋1994
23	土用木西	長岡市	3	B	1	田中as-2007
24	上条	長岡市	3	B	14	山賀as-2016
25	金塚	小千谷市	3	B	3	江川as-1999
26	坂町宮ノ郷C	村上市	-	A	1	吉井2003
27	空毛	新発田市	-	B	1	鈴木as-2012
28	赤良崎	長岡市	-	A	1	春日as-2002

第10表 新潟平野周辺の古代竪穴建物



※本図は第10表と対応
 国土院地理院式地図用座標変換プログラムを使用

第 27 図 新潟平野周辺における古代型穴建物分布

要 約

- 1 柄目木遺跡は新潟県阿賀野市下ノ橋・小里に所在する。遺跡は、阿賀野川右岸の沖積地に立地する。調査前は農業用水路と道路が通っていた。
- 2 調査は一般国道 49 号阿賀野バイパスの建設に伴い、2014 年度から 2016 年度に実施した。調査面積は、中世 589m²、古代 765m²の 1,354m²である。
- 3 調査の結果、中世の掘立柱建物 1 棟（柱穴 2 基）、井戸 6 基、土坑 10 基、ピット 37 基、溝 7 条、性格不明遺構 3 基、古代の竪穴建物 3 棟、土坑 4 基、ピット 60 基、焼土 1 基、性格不明遺構 1 基を検出した。
- 4 出土品は、中世の土師質土器・青磁・珠洲焼・瓷器系陶器・鍛冶関連遺物・金属製品・石製品、古代の土師器・須恵器・金属製品がある。このほかに近世の遺物が 2015 年度調査で少量出土した。中世の遺物には、笹神窯で未発見の押印を施す瓷器系陶器がある。
- 5 中世の調査では、2016 年度に 5 基の井戸が狭い範囲から集中的に検出され、既調査区との遺構間接合遺物の検討から遺構の埋没過程の一端を明らかにした。また、井戸の土壌中に含まれる炭化種実の同定を実施した。
- 6 古代の調査では、2014・2016 年度に計 3 棟の竪穴建物を検出した。柄目木遺跡全体では 10 棟となり、90 棟を検出した山三賀Ⅱ遺跡を除くと、一遺跡での検出数としては新潟平野でも有数と言える。

引用・参考文献

- 相沢 央 2004 『蝦夷「征伐」と発久遺跡』『管仲村史』通史編 新潟県管仲村
- 阿賀野市教育委員会 2008 『阿賀野市文化財年報』3
- 荒川隆史・加藤 学 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史¹⁾ 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史²⁾ 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第232集 塚塚遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史³⁾ 2016 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第262集 塚塚遺跡II』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒谷伸郎⁴⁾ 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第215集 山口遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 謙山えりか 2004 『新潟市山木戸遺跡 マンション等建設予定地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 石川日出志⁵⁾ 1981 『安田町文化財調査報告書 5 上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告書 横峯A遺跡 横峯B遺跡』新潟県安田町教育委員会
- 石田守之⁶⁾ 2009 『聖籠町埋蔵文化財調査報告書 第4集 金港遺跡 携帯電話基地建設に伴う発掘調査報告書』新潟県聖籠町教育委員会
- 伊藤康倫 1993 『新潟県聖籠町二本松東山遺跡発掘調査報告』山武考古学研究所
- 今井さやか⁷⁾ 2007 『日本遺跡第3次調査 鍋田土地区画整理事業に伴う日本遺跡第3次発掘調査報告書』新潟市教育委員会・新潟市埋蔵文化財センター
- 江口友子⁸⁾ 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第92集 金塚遺跡 三仏生遺跡 割目A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荻野正博 1986 『第6章 荘園と武士 第2節 荘園と国術領』『新潟県史』通史編1 原始・古代 新潟県
- 小田由美子 1999 『第5章 第2項 五頭山麓古宮跡群』『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 小田由美子⁹⁾ 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第99集 堀越館跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野本敦 2016 『中世の道路遺構について』『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第266集 山口野中遺跡III』新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 『土器編年と地域性』『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実 2016 『古代越後の竪穴・掘立柱併用建物』『三面川流域の考古学』奥三面を考える会
- 春日真実¹⁰⁾ 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第87集 上郷遺跡II』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実¹¹⁾ 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第116集 奈良崎遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実¹²⁾ 2004 『例言』『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 加藤 学¹³⁾ 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第223集 村前東A遺跡 村前東B遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学¹⁴⁾ 2013 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第237集 柄目木遺跡II』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金内 元・小村正之 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第222集 向大浦遺跡 上空野中丸遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 桐原雅史²⁰、2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第186集 大坂上道遺跡Ⅱ 猿額遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 京ヶ瀬村 1969 『村史』新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015 『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成26年度』
- 小林正史 2011 「土器使用痕の分析方法」『土器使用痕研究—スース、コゲからみた縄文・弥生土器・土師器による調理方法の復元—』小林正史編
- 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2011 『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成22年度』
- 坂井秀弥²¹、1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤友子²²、2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第216集 柄目木遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木 暁²³、2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第43 空毛遺跡 発掘調査報告書 経営体育成基盤整備事業(佐々木南部郷2期地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県新潟市教育委員会
- 高橋保雄²⁴、2006a 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第160集 上野東遺跡 現明山遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄²⁴、2006b 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第172集 鴨深甲遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中 靖・新田康則 2007 『土用木西遺跡 新潟県立長岡屋内総合プール建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』新潟県長岡市教育委員会
- 田畑 弘 1994 『田上町埋蔵文化財調査報告書 第4集 道下・白地遺跡 大正川筋小規模河川改修事業及び道路新設事業埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』田上町教育委員会
- 田村 裕 2004 『南北朝・室町前期の白河荘』『笹神村史』通史編 新潟県笹神村
- 千葉英一 1977 『下田村文化財調査報告書 第7 新潟県南蒲原郡下田村県営前谷岡場整備地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 南中赤坂遺跡・南中五輪峠遺跡・飯田五輪峠遺跡』新潟県下田村教育委員会
- 鶴巻康志 1991 「瓷器系笹神窯製品について」『新潟考古学談話会会報』第7号 新潟考古学談話会
- 鶴巻康志 1992 「六野瀬遺跡と赤坂窯」『新潟県安田町文化財調査報告書 12 六野瀬遺跡 1990年調査報告書』新潟県安田町教育委員会
- 鶴巻康志 1997 「北越窯の年代と技術系譜」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 鶴巻康志 1998 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第19 市道関係遺跡発掘調査報告書山王遺跡第1・2次調査 松橋遺跡 岡塚館跡』新潟県新潟市教育委員会
- 鶴巻康志 2005 「新潟県北部の中世陶器窯」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』資料集(第2版)
- 鶴巻康志 2015 「新潟平野の潟に面した古代集落—新潟県曾根遺跡—」『入り海の記憶 知られざる出雲の面影』鳥根根立古代出雲歴史博物館
- 中野豆任 1976 「白河荘について」『社会科研究』第12集 新潟県高等学校教育研究会社会科部会
- 樋口真巳 2004 「白河荘の成立と城氏の展開」『鎌倉期の白河荘』『笹神村史』通史編 新潟県笹神村
- 古澤安史²⁵、2011 『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集 県営湛水防除事業関連遺跡発掘調査報告書田 境塚遺跡・山口野中遺跡・三辺稲荷遺跡』新潟県阿賀野市教育委員会
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 水澤幸一 2007 「中世越後の土器と陶磁器—11～14c.前半」『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施軸陶器・瀬戸美濃製品』第20回北陸中世考古学研究会資料集 北陸中世考古学研究会
- 山賀和也・竹部佑介 2016 『上条遺跡 上条高畑土地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県長岡市教育委員会
- 山本信夫 2000 「4、陶磁器の分類」『太宰府条跡 XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会

- 山本信夫 2005 「貿易陶磁中世前期(11～14世紀前半)編年」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集(第2版)
- 山本信夫 2010 「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究』No.30 日本貿易陶磁器研究会
- 吉井雅勇 1993 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告第1集 坂町宮ノ腰B遺跡 カントリーエレベーター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県荒川町教育委員会
- 吉井雅勇 2000 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第6集 坂町宮ノ腰D遺跡 公共下水道最終処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県荒川町教育委員会
- 吉井雅勇 2001 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第7集 田島遺跡 県営圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県荒川町教育委員会
- 吉井雅勇 2003 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第10集 田原遺跡・坂町宮ノ腰C遺跡 町道西大通線建設および県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV』新潟県荒川町教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 渡邊ますみ 2012 『四石遺跡 第2次調査(仮称)新赤塚埋立処分地整備工事に伴う四石遺跡第2次発掘調査報告書』新潟市教育委員会・新潟市文化財センター
- 渡邊美穂子 2001 『新発田市埋蔵文化財調査報告 第23-2 坂ノ沢C遺跡II(平安時代編)県営広域営農団地農道整備事業(北蒲原東部地区)関係発掘調査報告書』新潟県新発田市教育委員会

観 察 表

2015年度調査 遺構観察表(1)

中世 掘立柱建物の柱穴 (SB300) 観察表

遺構番号	グリッド	形跡			規模 (cm)			底面標高 (m)	層土層積状況	出土遺物	構出面	重畳関係
		平面形	断面形	立ち上がり	長さ	幅	深さ					
P12	441J	円形	U字状	垂直	32	29	42	5.39	Ⅱ			>SD1502
P13	441E	円形	U字状	垂直	32	30	42	5.38	Ⅱ			>SD1505、SK1508

中世 井戸 (SE) 観察表

遺構番号	グリッド	形跡			規模 (cm)			長軸方向	底面標高 (m)	層土層積状況	出土遺物	構出面	重畳関係
		平面形	断面形	立ち上がり	長さ	短径	深さ						
1530	482D2 - 24、489F3	円形	円筒状	急斜度	210以上	198以上	290以上	N43°E	—	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	>SX1580

中世 土坑 (SK) 観察表

遺構番号	グリッド	形跡			規模 (cm)			長軸方向	底面標高 (m)	層土層積状況	出土遺物	構出面	重畳関係
		平面形	断面形	立ち上がり	長さ	短径	深さ						
1501	441E-11	長方形	円筒状	緩やか	135	82	8	N49°E	5.92	D	Ⅱ		
1508	43110・441E	長方形	円筒状	緩やか	72	43	13	N4°E	5.82	D	Ⅱ	>SK300P13、SD1505	
1518	441J2-17	長方形	円筒状	急斜度	68	22	16	N34°E	5.76	F	Ⅱ	>SD255	
1521	43125・441J2	楕円形	円筒状	緩やか	100	87	11	N33°E	5.75	D	Ⅱ	>P1576 >SD1514	
1525	43125	長方形	円筒状	緩やか	83	67	22	N55°W	5.65	A	Ⅱ	土層Ⅰ上部	
1526	441J6	長方形	壺状	急斜度	63	33	31	N31°E	5.57	A	Ⅱ	>SD1514	
1531	47716-17	長方形	円筒状	急斜度	93	66	14	N57°W	5.48	A	Ⅱ	土層Ⅰ上部中盤 Ⅱ	>SD1532、SK1573

古代・中世 溝 (SD) 観察表

遺構番号	グリッド	形跡			規模 (cm)			長軸方向	底面標高 (m)	層土層積状況	出土遺物	構出面	重畳関係	
		平面形	断面形	立ち上がり	長さ	幅	深さ							
330	431J5、441J1・16・17	円筒状	壺状	急斜度	364以上	90~133	70	N53°W	5.4	A	Ⅱ	土層Ⅰ上部、浅溝状、断面扇形、底面扇形 16・17	Ⅱ	>SD320、SD1505、SD1614、SK1618、P1622
330	43125、43M4 5・9・10	長方形	溝状	急斜度	388以上	300	133	N55°W	4.63	A	Ⅱ	土層Ⅰ上部小径19・20、溝淵、段石(溝淵21・22、溝淵、中埋溝、橋脚、溝、板石、土器片30、磁石31、木製品、金属製品、打39・40	Ⅱ	>SD255
1502	441J・2	円筒状	円筒状	急斜度	166	38	15	N79°W	5.70	B	Ⅱ	土層Ⅰ上部、鉄片 41	Ⅱ	>SD1520 >SD300P12
1505	43110・15・20、441J4	円筒状	円筒状	緩やか	489以上	70	22	N34°E	5.79	D	Ⅱ	断面寸25、土層Ⅰ上部小径18、打、断面扇形	Ⅱ	>SD255、SK1508 >P1513、SK300P13
1514	43125、441J7・11・12・16・21	円筒状	円筒状	緩やか	628	47	13	N30°E	5.89	A	Ⅱ	土層Ⅰ上部盤23、溝淵、貫通、打	Ⅱ	>SD255 >SK1521、SK1526、P1576
1520	441J・7・8	円筒状	円筒状	急斜度	196以上	33	28	N55°W	5.69	D	Ⅱ	土層Ⅰ上部	Ⅱ	>SK1509 >SD1502
1532	47717・18・22・23	円筒状	壺状	緩やか	450以上	62	20	N58°W	5.46	A	V		Ⅱ	>SK1521、P1575 >SK1573

中世 性格不明遺構 (SX) 観察表

遺構番号	グリッド	形跡			規模 (cm)			底面標高 (m)	長軸方向	出土遺物	構出面	重畳関係	
		平面形	断面形	立ち上がり	長さ	幅	深さ						
1509	441J・3・7・8	不明	不明	不明	258以上	150	34	5.65	N42°W	Ⅱ	土層Ⅰ上部盤24、浅溝淵、段石32、打34・35、鉄片36	Ⅱ	>SX1519、SD1520
1519	442E2・23、441J・3	不明	不明	不明	176以上	140以上	24	5.83	N42°W	Ⅱ	土層Ⅰ上部、浅溝淵25、軸心製品33、金属製品	Ⅱ	>SX1509
1580	482D2 - 24、489F3	不明	不明	不明	235以上	160以上	70	5.43	N73°E	Ⅱ	浅溝淵(打)26	Ⅱ	>SE1520

古代 土坑 (SK) 観察表

遺構番号	グリッド	形跡			規模 (cm)			長軸方向	底面標高 (m)	層土層積状況	出土遺物	構出面	重畳関係
		平面形	断面形	立ち上がり	長さ	短径	深さ						
1533	47715・20	楕円形	円筒状	緩やか	93	83	8	N26°E	5.57	A			
1528	47712・13・17・18	不整形	円筒状	緩やか	158	150	43	N36°W	5.12	A			>SK1573、P1534、P1544、P1557、>SK1579
1579	47712・13・17・18	不整形	壺状	緩やか	112	110	24	N47°W	5.24	A			>P1555、P1552、SK1573、SK1578

古代 性格不明遺構 (SX) 観察表

> 遺構番号 () は埋没痕跡を示す。

遺構番号	グリッド	形跡			規模 (cm)			底面標高 (m)	長軸方向	出土遺物	構出面	重畳関係	
		平面形	断面形	立ち上がり	長さ	幅	深さ						
1573	47711 ~ 13・16 ~ 19・21 ~ 24、4763 ~ 3	不明	不明	不明	(618)	(495)	25	5.36	N4°W	Ⅱ	土層Ⅰ上部	V	>SK1531、SD1532、P1584 ~ P1587、P1544、P1545、P1552 ~ P1555、P1567、P1566、P1572、P1575 >SK1578、SK1579

古代・中世 ビット (P) 観察表 (1)

遺構番号	グリッド	形跡			規模 (cm)			底面標高 (m)	層土層積状況	出土遺物	構出面	重畳関係
		平面形	断面形	立ち上がり	長さ	短径	深さ					
1503	442E2	方形	壺状	急斜度	42	32	13	5.77	A			
1504	441E	楕円形	U字状	急斜度	30	24	36	5.64	A	Ⅱ	土層Ⅰ上部	
1506	441E・7	長方形	U字状	急斜度	43	38	31	5.62	A			
1507	441J・1	円形	V字状	急斜度	55	50	51	5.50	A	Ⅱ	土層Ⅰ上部、打	
1510	43120	方形	円筒状	急斜度	24	23	19	5.67	D			
1511	43120	円形	円筒状	急斜度	25	22	18	5.66	D			
1512	43120	円形	壺状	急斜度	22	18	10	5.76	D			
1513	441E	円形	壺状	急斜度	40	20	24	5.54	D			>SD1505
1516	441J・12	楕円形	壺状	急斜度	31	24	18	5.76	A			
1517	441J7	円形	壺状	急斜度	32	26	12	5.81	D			
1522	441J6	円形	U字状	急斜度	29	26	40	5.52	A			

2015年度調査 遺構観察表(2)

古代・中世 ビット(P) 観察表(2)

- 計測値の()は視外観を示す。

遺構番号	グリップ	形状		規格 (cm)			総高規格 (m)	層上階級状況	出土遺物	検出層	参照図表
		平面形 (断面形) (寸法上の)	断面形	長さ	幅	厚さ					
1523-4417	方形	方形	急斜度	26	18	35	5.06	D		Ⅲ	>P1524
1524-4417		楕円形	U字状	急斜度	61	42	31	5.07	E	Ⅲ	>P1523
1527-44131		円形	方形	急斜度	18	16	7	5.71	D	Ⅲ	
1572-47724		円形	U字状	急斜度	24	(113)	29	5.18	E	Ⅲ	>SK1573
1574-47721		円形	U字状	急斜度	24	(14)	39	5.38	B	Ⅲ	
1575-47717		楕円形	U字状	急斜度	29	(24)	36	5.54	D	Ⅲ	>SD1532, SK1573
1576-43125-44121		円形	半円状	急斜度	52	40	16	5.71	D	Ⅲ	>SD1514, SK1521
1584-47713-18		円形	方形	急斜度	46	40	8	5.05	A	V	>SK1573, SK1576
1535-47717		円形	U字状	急斜度	23	22	28	5.26	E	V	>SK1573, SK1579
1536-47718		円形	U字状	急斜度	21	19	32	5.32	A	V	>SK1573
1537-47718		円形	U字状	急斜度	18	8	29	5.35	B	V	>SK1573
1538-47719		円形	蓋状	急斜度	17	(16)	8	5.52	D	V	
1539-47714		円形	蓋状	急斜度	14	(4)	13	5.48	B	V	
1540-47714		円形	U字状	急斜度	18	(8)	24	5.34	D	V	
1541-47714		円形	U字状	急斜度	20	(8)	21	5.39	B	V	
1542-47720		円形	半円状	急斜度	18	18	30	5.33	A	V	
1543-47715		円形	蓋状	急斜度	24	22	9	5.53	D	V	>P1551
1544-47712-13		円形	U字状	急斜度	22	(8)	27	5.35	E	V	>SK1573, SK1578
1545-47716		楕円形	U字状	急斜度	22	(8)	26	5.38	E	V	>SK1573
1546-48711		円形	方形	急斜度	20	(11)	15	5.46	A	V	
1547-4877		円形	U字状	急斜度	24	(10)	35	5.33	E	V	
1548-4876		円形	半円状	急斜度	30	26	14	5.55	D	V	
1549-4876		円形	方形	急斜度	22	(10)	15	5.51	E	V	>P1559
1550-4876		円形	方形	急斜度	18	(12)	9	5.58	D	V	>P1549
1551-47715		円形	方形	急斜度	22	(6)	9	5.53	D	V	>P1543
1552-47717		円形	U字状	急斜度	22	(20)	35	5.38	E	V	>SK1573, SK1579
1553-47723		円形	U字状	急斜度	18	(6)	36	5.25	E	V	>P1553, SK1573
1554-47723		円形	U字状	急斜度	16	(10)	36	5.25	D	V	>SK1573
1555-47718		円形	U字状	急斜度	19	(10)	31	5.31	E	V	>SK1573
1556-47721		円形	方形	急斜度	16	(9)	11	5.53	D	V	
1557-47713		楕円形	U字状	急斜度	20	(12)	30	5.45	B	V	>SK1573, SK1578
1558-48723		円形	U字状	急斜度	23	(11)	24	5.47	D	V	
1559-47721		円形	半円状	急斜度	16	(16)	7	5.58	D	V	
1560-4871		円形	半円状	急斜度	27	(14)	14	5.57	D	V	
1561-4872		円形	半円状	急斜度	37	(19)	14	5.6	A	V	
1562-47720		円形	U字状	急斜度	15	(8)	21	5.41	B	V	
1563-48711		円形	U字状	急斜度	26	20	27	5.44	E	V	
1564-4872		楕円形	U字状	急斜度	23	12	21	5.52	B	V	
1565-4871		円形	U字状	急斜度	20	6	21	5.51	B	V	
1566-47723		円形	U字状	急斜度	17	(10)	16	5.43	B	V	>SK1573
1567-47719		円形	U字状	急斜度	18	(10)	17	5.41	D	V	
1568-4873		円形	蓋状	緩やか	18	(11)	3	5.07	D	V	
1569-4876		円形	方形	急斜度	22	(13)	13	5.53	D	V	
1570-4872		楕円形	蓋状	緩やか	53	22	7	5.62	D	V	
1571-4877-12		円形	方形	急斜度	28	(17)	21	5.59	B	V	
1577-48711		円形	U字状	急斜度	22	21	21	5.43	D	V	

2015年度調査 遺物観察表(1)

土器・陶磁器観察表

凡例：部位は以下のように表記する。

□=口縁部、蓋=蓋部、内=内底、外=外底

斜：△=白色、▽=黄色、●=赤色、○=石丸、◇=灰石、☆=蓋、◎=全周、◎=全周、◎=全周、◎=全周、◎=全周、◎=全周、◎=全周

検出番号	分類		グリップ	遺物名	単位	法線 (cm)			色澤	土段・土層、下段：土層	出土	形状・調整	備考
	種類	器種				口径	器高	器径					
16	肥前磁器	瓶	44E11	SD055	3	-	-	5	灰白 灰白		Ⅲ		
17	肥前磁器	瓶	44E11	SD055	3	-	-	3.9	灰白 灰白		Ⅲ		
18	土俵瓦土器	小皿	44E6	SD1505	1	-	-	6	①赤い模様 ②赤い模様	白・赤・長	Ⅲ	口口成形 底：別紙へ9参照	内面に黒線付番
19	土俵瓦土器	小皿	43M4	SD030	5	8	1.5	5.8	灰白 灰白	白・赤・長	Ⅲ	口口成形 底：別紙へ9参照	
20	土俵瓦土器	皿	43M4-5	SD030	3-6	11.8	2.5	7.6	灰白 灰白	長・緑	Ⅲ	口口成形 底：別紙へ9参照	
21	埴網焼	白口鉢	43M4	SD030	6	-	-	14.8	灰 灰	白・黒・長・黄・青	Ⅲ	口口成形 底：別紙へ9参照	
22	埴網焼	白口鉢	43M10	SD030	6	21.6	-	-	灰 灰	白・黒・長・黄・青	Ⅲ	口口成形	
23	土俵瓦土器	皿	44E12	SD1514	1	12.6	3.9	8.4	灰白	白・赤・石・長	Ⅲ	口口成形 底：別紙へ9参照	底面に黒線
24	土俵瓦土器	皿	44E25	SK1509	2	11.4	3.1	7.8	①灰 ②灰	白・黒・緑	Ⅲ	口口成形 底：別紙へ9参照	
25	埴網焼	徳	44E23	SK1519	1	-	-	-	灰 灰	白・石・長・黄・青	Ⅲ		
26	埴網焼	白口鉢	48E24	SK1580	5	28.6	-	-	灰 灰	白・石・長・黄・青	Ⅲ	口口成形 内：別紙目111番	
27	土俵瓦土器	小皿	47F16	SK1531	2	7.8	1.1	6.7	黄 黄	白・長	Ⅲ	口口成形 底：別紙へ9参照	
28	肥前系陶器	白口鉢	44E11		5	28.6	-	-	灰 灰	白・長・黄・青	Ⅲ		

観察表

2015年度調査 遺物観察表(2)

土製品観察表

報告番号	種類	グリッド	遺物名	標高 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
29	灰面土	43L10	SD1505	1	1.6	1.6	0.6	1.65

石製品観察表

* 注目の () は残存率を示す。

報告番号	種類	グリッド	遺物名	標高 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石種	備考
30	円石	43M4	SD330	2	8.8	6	6	357.81	砂岩	
31	扁石	43M4	SD330	0	4.1	2.9	2.9	55.38	砂岩	
32	扁石	44L3	SD1509	2	18.25	22.81	121	34.29	砂岩	
33	解石製品	44K23	SD1519	1	2.89	33.11	12.90	10.6	砂岩	

金属製品観察表

* 注目の () は残存率を示す。

報告番号	種類	標種・細分	グリッド	遺物名	標高 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
34	鉄製品	釘	44E2	SD1509	1	5.1	0.5	0.6	8.0	
35	鉄製品	釘	44E3	SD1509	1	4.4	0.5	0.3	4.9	
36	鉄洋	-	44E3	SD1509	3	2.4	1.7	1	2.6	
37	鉄製品	釘	43L10	SD1506	1	4.4	0.4	0.5	3.7	
38	鉄製品	釘	44E17	SD1518	1	2.5	0.4	0.4	0.5	
39	鉄製品	釘	43M5	SD230	4	11.1	0.6	0.7	30.9	
40	鉄製品	釘	43M5, 43L29	SD230	5	18.8	0.6	0.5	25.4	
41	鉄洋	-	44E2	SD1502	2	2.4	1.8	1	4.6	
42	鉄製品	釘	44E2	SDa	3(3.0)	0.5	0.5	0.5	5.8	
43	鉄製品	釘	43M4	SDb	5.2	0.5	0.6	11.4		
44	鉄洋	-	44E6	SDb	3.2	2.6	2.1	6.5		

2016年度調査 遺構観察表(1)

中世 井戸 (SE) 観察表

* 注目の () は残存率を示す。

遺構番号	グリッド	形制			規模 (cm)			柱傾斜 (°)	底面傾高 (m)	溝上層階 状況	出土遺物	検出面	発掘箇所
		平面形	断面形	立上り	長径	短径	深さ						
1606	47122・22, 4722・3	楕円形	U字状	垂直	255	188	249	N20°E	3.61	A	漆油焼板・片目録 45・46, 漆油系陶器片目録, 釘 72, 棒	Ⅱb	
1613	46J15・20, 47J11・16	円形	U字状	垂直	172	166	155	-	4.58	A	土俵管(土俵管・小皿 52・54, 漆油焼板・片目録 49, 白磁製 48)	Ⅱb	>P1605
1620	46J8・9・13・14	円形	漏斗状	急斜度	196	187	154	-	4.45	A	土俵管(土俵管・小皿 52・54, 漆油焼板・片目録, 漆油系陶器 51・54, 白磁製 24)	Ⅱb	
1621	47J16	円形	U字状	垂直	169	144	173	-	4.28	A	漆油焼板・片目録 56, 白磁製 55	Ⅱb	>P1603・1604・1607
1626	46J18・19	円形	漏斗状	急斜度	224	180	203	-	4.38	A	漆油焼板	Ⅱb	

中世 土坑 (SK) 観察表

遺構番号	グリッド	形制			規模 (cm)			柱傾斜 (°)	底面傾高 (m)	溝上層階 状況	出土遺物	検出面	発掘箇所
		平面形	断面形	立上り	長径	短径	深さ						
1610	46J10・15	円形	平円状	急斜度	96	86	21	-	5.92	A	土俵管(土俵管 57)	Ⅱb	>SK1614
1612	46J10・15, 47J6・11	楕円形	矩形	緩やか	112	74	8	N10°E	6.02	D	漆油焼板	Ⅱb	>SK1614
1614	46J10・15, 47J6・11	円形	漏斗状	急斜度	158	151	122	-	4.88	A	漆油焼板・片目録 60	Ⅱb	>SK1610・1612

中世 ビット (P) 観察表

* 注目の () は残存率を示す。

遺構番号	グリッド	形制			規模 (cm)			柱傾斜 (°)	底面傾高 (m)	溝上層階 状況	出土遺物	検出面	発掘箇所
		平面形	断面形	立上り	長径	短径	深さ						
1602	47J6・11	円形	平円状	急斜度	63	58	30	-	5.92	A	漆油系陶器 58	Ⅱb	>P1623
1603	46J19	円形	平円状	急斜度	49	45	24	-	5.58	D	漆油焼板	Ⅱa	>SK1626
1604	46J19	楕円形	平円状	急斜度	45	49	29	-	5.81	A	漆油焼板・片目録 59	Ⅱa	>SK1626
1605	46J15・20	楕円形	平円状	急斜度	57	46	19	-	5.53	斜位		Ⅱb	>SK1613
1607	46J19	円形	平円状	急斜度	43	30	15	-	5.98	C		Ⅱa	>SK1626
1608	47J11	円形	平円状	急斜度	48	43	31	-	5.60	A	漆油焼板 (60)・片目録 61・62, 漆油系陶器 63	Ⅱb	
1609	47J6	楕円形	矩形	緩やか	41	32	11	-	5.98	D	漆油焼板	Ⅱb	
1611	47J1・2	楕円形	矩形	緩やか	74	56	13	-	5.95	D		Ⅱb	
1615	47J24	円形	平円状	急斜度	23	22	11	-	5.90	D		Ⅱb	
1618	46J21	楕円形	平円状	急斜度	32	28	20	-	5.78	D		Ⅱb	
1617	47J25	楕円形	U字状	垂直	32	27	25	-	5.66	D		Ⅱb	
1618	46J13	円形	平円状	急斜度	37	36	15	-	5.86	D		Ⅱb	
1622	48J16	円形	U字状	垂直	115	25	30	-	5.60	B		Ⅱb	
1623	48J1・2	円形	平円状	急斜度	18	18	12	-	5.79	A		Ⅱb	
1624	47J6	円形	U字状	垂直	23	22	37	11	5.57	E		Ⅱb	>P1602
1625	46J15	円形	U字状	垂直	30	26	28	15	5.73	E		Ⅱb	
1627	47J6	円形	U字状	垂直	24	23	19	15	5.70	E		Ⅱb	

2016年度調査 遺構観察表(2)

古代 壁穴建物(SI)観察表

*計測線の()は残存線を示す。

遺構番号	グリッド	形質			規模 (cm)			長軸方向	北山傾高 (m)	壁土層積 状況	出土遺物	検出品	垂直関係
		平面形	断面形	立上り	長径	短径	深さ						
1620	45J10・14・15・19・20・25a 46J10・7・11・12・16・21	方形	階段	巻折	520	(410)	22	N65°W	5.41	B	I(漆器長敷類・小鏡1)、K2、 銅製銅白粉	V	-5K746
1620-P1	46J10	円形	平円状	巻折	20	18	12	-	5.29	D		V	SI1620内
1620-SK1	46J10・21	不整形	平円状	巻折	60	48	21	N32°W	5.17	B		V	SI1620内
1620-SK2	46J16・21	楕円形	巻折	踵やか	60	44	13	N50°W	5.23	D		V	SI1620内

古代 土坑(SK)観察表

遺構番号	グリッド	形質			規模 (cm)			長軸方向	北山傾高 (m)	壁土層積 状況	出土遺物	検出品	垂直関係
		平面形	断面形	立上り	長径	短径	深さ						
SK746	45J14・15・19・20	楕円形	平円状	巻折	209	170	36	N12°W	5.44	D	I(漆器長敷)	V	-5J1620

古代 焼土(SF)観察表

遺構番号	グリッド	形質			規模 (cm)			長軸方向	北山傾高 (m)	壁土層積 状況	出土遺物	検出品	垂直関係
		平面形	断面形	立上り	長径	短径	深さ						
1628	45J3・4	円形	巻折	巻折	47	44	10	-	5.68	A		V	

古代 ビット(P)観察表

遺構番号	グリッド	形質			規模 (cm)			北山傾高 (m)	壁土層積 状況	出土遺物	検出品	垂直関係	
		平面形	断面形	立上り	長径	短径	深さ						
1629	46J1	円形	U字状	巻折	30	29	28	18	5.44	E		V	
1632	46J1	円形	U字状	巻折	26	26	26	-	5.23	A	I(漆器長敷)	V	
1633	46J1・6	円形	U字状	巻折	32	31	21	-	5.20	A		V	
1634	45J25	円形	平円状	巻折	29	26	20	-	5.29	A		V	
1635	46J21	円形	平円状	巻折	23	21	6	-	5.21	D		V・V	

2016年度調査 遺物観察表(1)

中世 土器・陶磁器観察表(1)

凡例：部位は以下のように表記する。口=口縁部、底=底面、外=外面、内=内面。

* 製土：石=石系、土=粘土、灰=灰石、灰=灰砂、骨=海綿骨付、白=白色粘土、赤=赤色粘土、黒=黒色粘土、黄=砂礫、砂=砂礫。

* 産出箇所：(R1)→「R1(本調査)」「R2(調査外)」「R3(調査外)」

報告 番号	分類	形状	グリッド	遺構名	層位	法線 (cm)			色澤	胎土	成形・装飾	備考	遺物の時期
						口径	器高	口径					
45	珠洲焼	片口鉢	4722	SR1606	2	23.8	11.8	12.8	灰白 灰白	丸、 凸	ロクゴ成形 内：押し付	人跡 古河編年目録	13世紀末～14世紀 第2～4半期
			4723	SR1606	2								
			4724	SR1606	2								
			4629	SR1620	1								
46	珠洲焼	片口鉢	4722	SR1606	2	20.4	7.3	11.2	灰白 灰白	丸、 溝	ロクゴ成形 内：素文	中鉢 古河編年目録	13世紀末～14世紀 第2～4半期
			(R1) 4628	SD420	3								
47	土師貫土器	壺	46220	SR1613	13	11.8	3.5	7.2	橙 橙	石、丸、 砂	ロクゴ成形 内：押し表印付	中鉢 古河編年目録	14世紀末～14世紀 第1半期
			46220	SR1613	13								
48	白磁	壺	46J15	SR1613	14	18.6	-	-	灰白 灰白	筒口、 溝	ロクゴ成形 内：玉縁1線	産出箇所不明 磁器区分不明	13世紀末～14世紀 第1半期
49	青磁	壺	46J20	SR1613	14	13.2	-	-	青緑 青緑	筒口、 溝	ロクゴ成形 外：素文文	産出箇所不明 磁器区分不明	13世紀末～14世紀 第1半期
50	珠洲焼	片口鉢	46220	SR1613	13	-	-	13.4	灰 灰	凸、 溝	ロクゴ成形 内：押し付	中鉢 古河編年目録	13世紀末～14世紀 第1半期
			46220	SR1613	13								
			4717	-	B a								
51	産駒系陶器	壺	(R1) 47K	SR344	-	39.0	-	-	灰 灰	丸、 溝	口：文字1線 外：口縁花ココナテ、筋線 罫一筋(ヒコナテ)、筋部 に濃文と縁文(人)の押印 内：ココナテ、筋線	鏡沼田	13世紀末～14世紀 前期
			(R1) 47J	SR345	1								
			(R1) 47J	SR345	3								
52	土師貫土器	小皿	46J14	SR1620	2	7.3	1.3	5.0	にこい にこい	赤	ロクゴ成形 内：押し表印付	中鉢	14世紀末～14世紀 第1半期
			46J14	SR1620	2								
53	土師貫土器	小皿	46J14	SR1620	2	6.8	1.2	5.0	にこい にこい	赤	ロクゴ成形 内：押し表印付	中鉢	14世紀末～14世紀 第1半期
			46J14	SR1620	2								
54	土師貫土器	小皿	46J14	SR1620	2	6.7	1.3	5.2	にこい にこい	赤	ロクゴ成形 内：押し表印付	中鉢	14世紀末～14世紀 第1半期
			46J14	SR1620	2								
55	青磁	壺	47J16	SR1621	17	-	-	-	青緑 青緑	筒口、 溝	ロクゴ成形 内：片彫文と縁付文	産出箇所不明 磁器区分不明	12世紀中頃～13世紀 前期
56	珠洲焼	片口鉢	47J16	SR1621	1	24.4	-	-	灰 灰	凸	ロクゴ成形 内：素文	中鉢	12世紀中頃～13世紀 前期
			46J20	-	B a								
57	土師貫土器	小皿	46J15	SR1610	2	7.7	1.8	5.4	にこい にこい	赤	ロクゴ成形	中鉢	14世紀末～14世紀 第1半期
58	産駒系陶器	壺	4728	FR002	1	-	-	9.6	青 青	丸、 溝	ココナテ	中鉢	13世紀末～14世紀 第1半期
			46J15	-	B a								
59	珠洲焼	片口鉢	46J19	FR004	1	-	-	13.0	灰 灰	丸、 溝	ロクゴ成形 内：押し付	人跡 古河編年目録	13世紀末～14世紀 第2～4半期
60	珠洲焼	壺	47J11	FR008	1	61.8	-	-	灰白 灰白	凸、 溝	平行叩き	人跡 古河編年目録	13世紀末～14世紀 第2～4半期

観 察 表

2016年度調査 遺物観察表(2)

中世 土器・陶磁器観察表(2)

報告 番号	分類		グリッド	遺物名	部位	法線 (cm)			色澤	胎土	成形・調整	備考	遺物の時期	
	種類	器種				口径	器高	底径						上段・外面 下段・内面
61	珠洲焼	片口鉢	47211	P1608	2	33.8	13.2	12.4	灰～に赤い濁 灰～に赤い濁	黒	ロクワ成形 内：手彫み技法による 縁の折し目多量	土跡 古河編年早期 再掘にドーナツ状に 埋付層	13世紀第1四半期～ 第2四半期	
			47212	P1608	2									
			47211	P1608	2									
			47211	P1608	2									
			47211	P1608	2									
			46220	SE1613	7									
			46224	SE1630	2									
62	珠洲焼	片口鉢	47211	P1608	1	-	-	12.4	灰白 灰白	骨、蒸、 塵	ロクワ成形 内：折し目	土跡		
			47212	P1608	2									
			47211	P1608	1									
			47211	P1608	1									
			47211	P1608	1									
63	安部系陶器	壺	47211	P1608	1	-	-	-	濃褐色 黒褐色	丸蓋	ココナテ			
			47211	P1608	1									
64	土師系土器	壺	47925	-	II a	-	12.0	3.4	8.6	褐色 灰白	ロクワ成形 底：厚板成形	瓦種	14世紀第1四半期	
65	青磁	瓶	47929	-	II a	-	-	-	-	オリーブ系 オリーブ系	羅瓦 羅瓦	羅瓦系系群II-1a類 青・羅瓦片文	13世紀前半～前半	
66	青磁	鉢	48924	-	II a	21.2	-	-	-	灰オリーブ 灰オリーブ	羅瓦 羅瓦	羅瓦系系群III-2a類 青・内：灰文	13世紀前半～14世紀 前半前後	
67	青磁	合子	47925	-	II a	6.6	2.5	4.8	-	オリーブ系 オリーブ系	羅瓦 青・灰文	羅瓦系系 群		
68	安部系陶器	片口鉢	4726	-	II a	-	-	-	-	に赤い濁 灰	丸蓋	内：羅瓦に1条の浅い溝		
			(前1) 4727	SE145	1									
69	安部系陶器	片口鉢	4625	-	II a	-	-	-	-	に赤い濁 に赤い濁	丸蓋	内：折し目		
			47926	-	II a	-	-	-	-	-	-	-		

中世 石製品観察表

*計測値の()は残存値を示す。

報告 番号	器種・組合	グリッド	遺物名	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	長さ (g)	石材	備考
70	石鉢	46214	-	II b	-	-	-	(40)	安山岩	
71	石鉢	468	-	-	-	-	-	(112)	安山岩	

中世 金属製品観察表

*計測値の()は残存値を示す。

報告 番号	種類	器種・組合	グリッド	遺物名	部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	長さ (g)	備考
72	鉄製品	釘	4722	SE1606	2	(3.6)	-	0.5	(1)	頭：先端部欠損、上字状に折れ曲がる
73	鉄製品	鉢	4629	SE1630	4	(12.1)	3.6	0.9	(21)	餅形鉢
74	鉄製品	輪軸製品	46214	SE1620	7	(1.9)	2.2	0.9	(3)	
75	鉄製品	釘	47929	-	II a	(4.0)	0.7	0.6	(3)	餅形釘、先端部欠損
76	鉄片	輪軸製品片	4722	-	II a	6.8	(5.2)	3.7	(98)	
77	鉄片	輪軸製品片	4629	-	II a	7.1	(4.5)	2.6	(73)	上面に木炭粒、下面に砂土
78	鉄片	輪軸製品片	46215	-	II a	5.0	(3.5)	2.0	(26)	
79	鉄片	輪軸製品片	4727	-	II a	4.1	3.1	1.9	19	

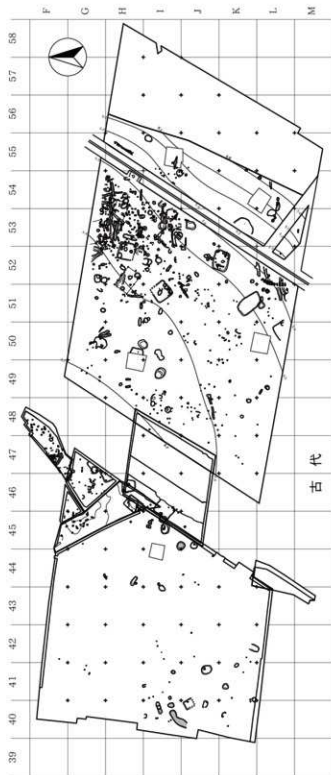
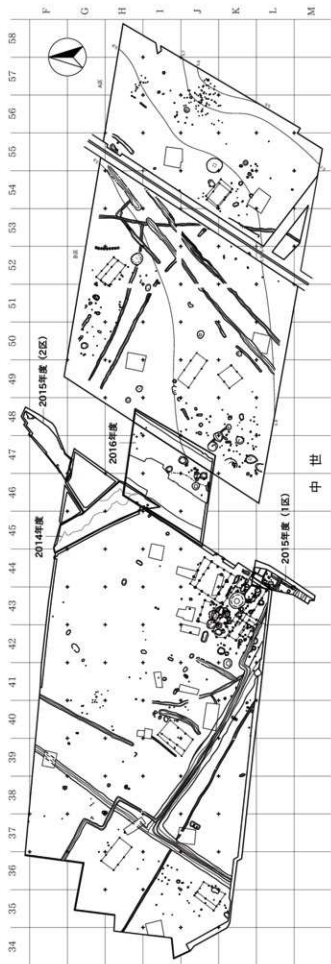
古代 土器観察表

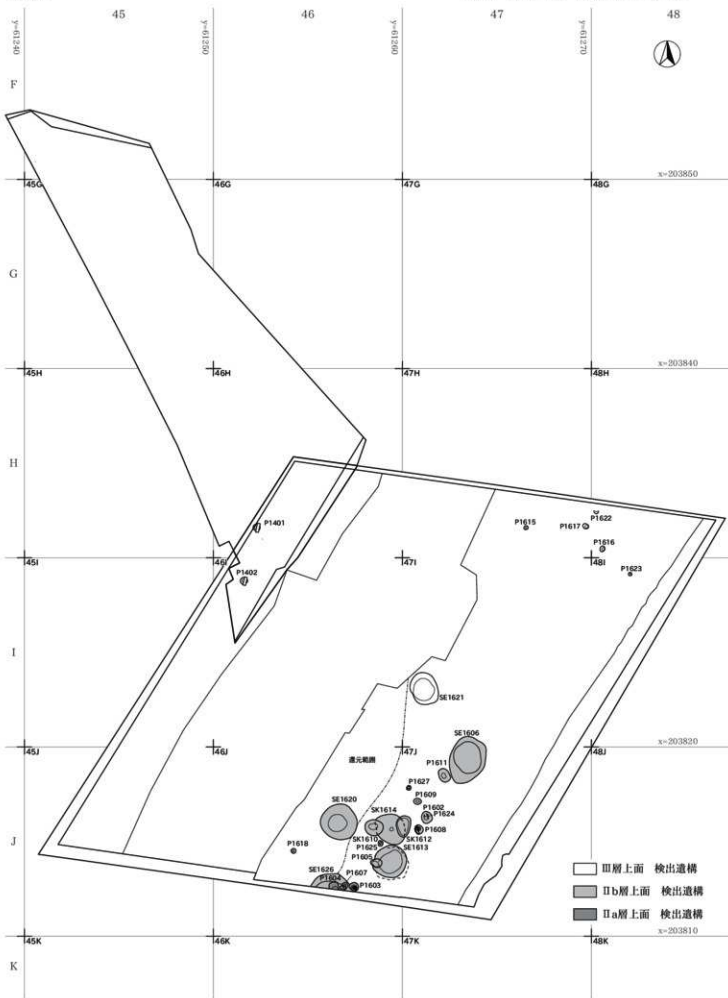
凡例：部位は以下のように表記する。口=口縁部、底=底面、再=再面、内=内面。

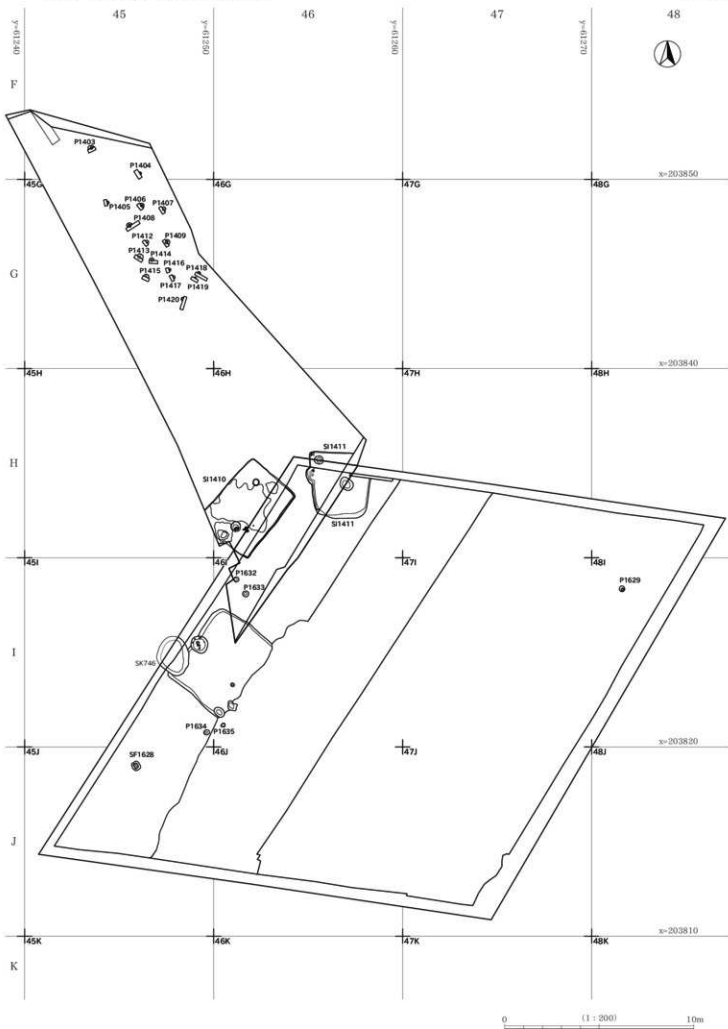
胎土：胎土=石、灰=灰石、再=再面石、底=底面、骨=骨層付、白=白色胎土、赤=赤色胎土、黒=黒色胎土、濃=濃色、砂=砂付。

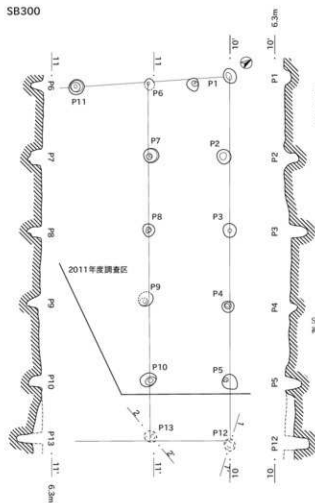
報告 番号	分類		グリッド	遺物名	部位	法線 (cm)			色澤	胎土	成形・調整	備考
	種類	器種				口径	器高	底径				
80	土師器	土甕	4815	SI1630	巾下口	24.8	-	-	浅黄帯 浅黄帯	石、灰	ロクワ成形	
81	土師器	小甕	46911	SI1630	1	13.0	-	-	に赤い濁 に赤い濁	石、蒸、 赤	ロクワ成形 赤・青々メ	口縁部に炭化物付着
82	土師器	小甕	46911	SI1630	1	-	-	7.4	に赤い濁 に赤い濁	石、蒸、 赤	ロクワ成形 赤・青々メ	
83	土師器	無台瓶	47220	-	V	11.6	4.1	5.0	浅黄帯 浅黄帯	丸蓋、赤	ロクワ成形 底：厚板成形	
84	東海部	無台鉢	4692	-	V	12.0	3.5	7.8	灰 灰	丸蓋	ロクワ成形 底：厚板成形	
			46928	-	V							
85	東海部	甕	46920	-	V	-	-	-	灰 灰	丸蓋、蒸	再：平文タタキ 内：厚板成形	
			46922	-	V							

圖 版









SB300P12

- 1 褐色シルト におい黄褐色シルトわずかに含む。
- 2 褐色シルト 炭化物含む。
- 3 におい黄褐色シルト 褐色シルト含む。



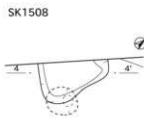
SB300P13

- 1 におい黄褐色シルト 褐色シルト含む。
- 2 におい黄褐色シルト 炭化物わずかに含む。



SK1501

- 1 褐色シルト 褐色シルト露跡状に含む。



SK1508

- 1 灰黄褐色シルト 炭化物多量含む。褐色シルト含む。



SK1518

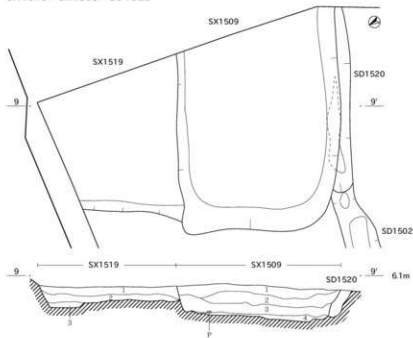
- 1 におい黄褐色シルト 褐色シルト含む。
- 2 におい黄褐色シルト 底面に炭化物が露出。



SK1525

- 1 灰黄褐色シルト 炭化物、におい黄褐色シルト含む。
- 2 黄褐色シルト 褐色シルト含む。

SX1519・SX1509・SD1520



SX1519

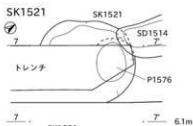
- 1 灰黄褐色シルト 黄褐色シルト含む。
- 2 灰黄褐色シルト 褐色シルト含む。
- 3 褐色シルト 褐色シルトわずかに含む。

SX1509

- 1 灰黄褐色シルト 褐色シルト多量含む。地山ブロック、炭化物含む。
- 2 暗褐色シルト 炭化物。地山ブロック多量含む。
- 3 灰黄褐色シルト 黄褐色シルトわずかに含む。腐床積土。
- 4 におい黄褐色シルト

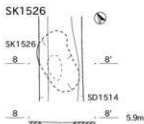
SD1520

- 1 暗褐色シルト 地山ブロック、炭化物含む。



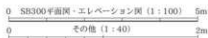
SK1521

- 1 暗黄褐色シルト 炭化物、褐色シルト粒を含む。

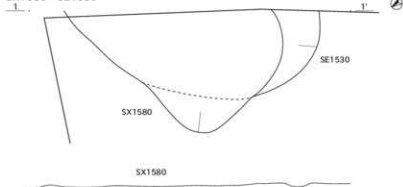


SK1526

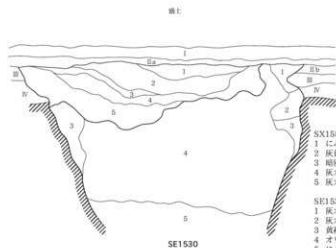
- 1 灰黄褐色シルト 褐色シルト多量含む。炭化物わずかに含む。
- 2 黄褐色シルト 褐色シルトわずかに含む。



SX1580・SE1530



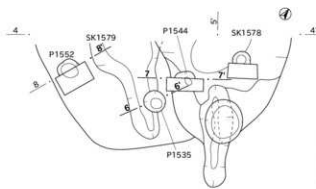
1. 7.0m



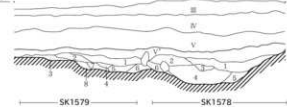
SX1580
1 におい黄褐色シルト しまりあり、粘性なし。
2 灰黄褐色シルト しまりあり、粘性なし。
3 暗灰黄色シルト しまり強い、粘性なし。
4 灰オリーブ色シルト 粘性なし、1層含む。
5 灰オリーブ色シルト 粘性強い。

SE1530
1 灰オリーブ色シルト しまり強い、粘性弱い。
2 灰オリーブ色シルト しまり強い、粘性弱い。
3 黄褐色シルト しまりなし、粘性あり。
4 オリーブ黄色シルト しまりやや強い、粘性ややあり。
5 におい褐色粘土 しまりなし、粘性強い。

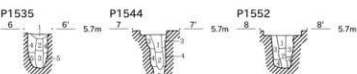
SK1578・1579・P1535・1544・1552



4. 6.0m



SK1578



P1535
1 オリーブ褐色粘土質シルト 地山ブロック含む。
2 オリーブ褐色粘土質シルト しまりなし。
3 暗灰黄色粘土質シルト しまり弱い。
4 オリーブ褐色シルト 炭化物ごく微量含む。
5 黄褐色シルト しまり強い。

P1544
1 オリーブ褐色シルト しまり強い。
2 オリーブ褐色シルト しまりなし。
3 暗オリーブ色シルト しまり強い。
4 暗オリーブ色シルト 粘性強い。
5 黄褐色シルト 粘性強い。

P1552
1 暗灰黄色シルト しまり弱い、炭化物ごく微量含む。
2 オリーブ褐色シルト しまり弱い。
3 オリーブ褐色シルト しまり強い、炭化物ごく微量含む。
4 オリーブ褐色シルト しまり強い。

V' 褐色シルト 炭化物・焼土をごく微量含む。

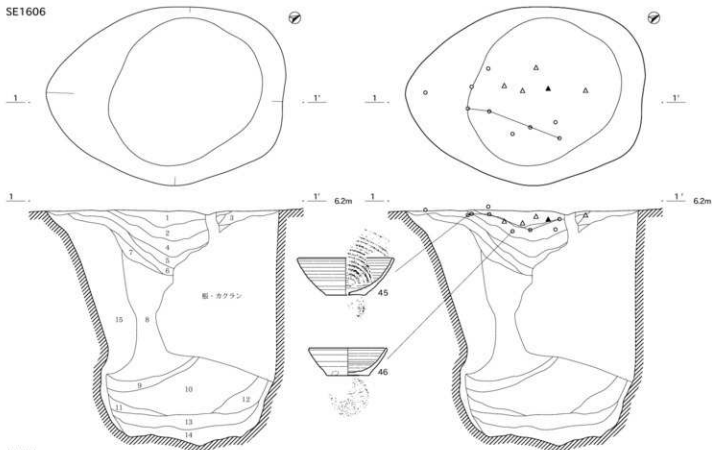
SK1578
1 褐色シルト 粒径50mm大の炭化物やや多く含む。焼土少量含む。
2 褐色シルト 焼土ブロック少量含む。

3 炭化物
4 褐色シルト 明赤褐色焼土ブロックシルトをほぼ同量。炭化物を極く微量含む。
5 褐色シルト 焼土・炭化物・におい黄褐色粘質シルトブロックを少量含む。
6 におい赤褐色シルト 焼土とシルトの混合土。

SK1579
1 暗褐色シルト 5層やや多く含む。粒径5cm以上の炭化物を極く微量。5cm大の炭化物を少量含む。
2 褐色シルト 粒径5cm大の炭化物を含む。
3 褐色シルト 粒径50mm大の炭化物ごく微量含む。
4・8 褐色シルト 焼土とシルトの混合土。炭化物をやや多く含む。
5 明赤褐色焼土
6 褐色シルト 焼土とシルトの混合土。
7 におい黄褐色粘質シルト

0 (1:40) 2m

SE1606



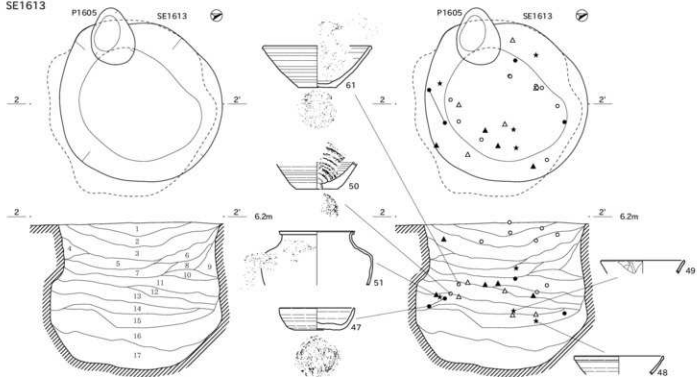
SE1606

- 1 におい黄褐色シルト 黄褐色シルトをブロック状に含む。大粒の炭化物を少量含む。しまりあり。
- 2 黒褐色シルト におい黄褐色シルトと炭化物の混合土。
- 3 におい黄褐色シルト 黄褐色シルトをブロック状に含む。大粒の炭化物を少量含む。しまりあり。
- 4 におい黄褐色シルト 炭化物をやや多く含む。
- 5 黄褐色シルト 炭化物をごく微量含む。しまり・粘性あり。
- 6 におい黄褐色シルト 黄褐色粘質シルトを多く、炭化物を少量含む。
- 7 におい黄褐色シルト 黄褐色粘質シルト。形状を残す炭化物を多く含む。
- 8 灰黄褐色シルト 炭化物をごく微量含む。粘性あり。
- 9~14は断面により注記なし。

遺物凡例

- 土師質土器
- 灰洲坑
- ▲ 炭洲乳海器
- ★ 青磁・白磁
- △ 石

SE1613



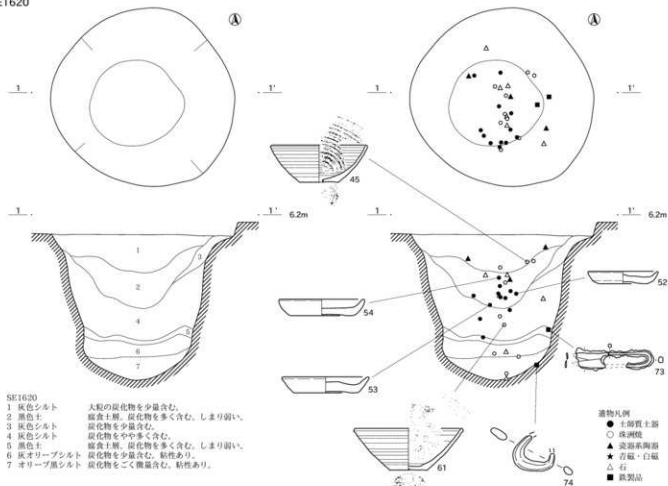
SE1613

- 1 におい黄褐色シルト 黄褐色シルト・灰白色シルトをやや多く、炭化物をごく微量含む。
- 2 におい黄褐色シルト 黄褐色シルト・灰白色シルトをやや多く、炭化物をごく微量含む。
- 3 黄褐色シルト 炭化物をごく微量含む。粘性あり。
- 4 褐色シルト 地山の流れ込み。
- 5 黄褐色シルト 炭化物をごく微量含む。粘性あり。
- 6 褐色シルト 地山の流れ込み。炭化物をごく微量含む。
- 7 暗灰黄色シルト 灰白色粘土をやや多く、炭化物を含む。粘性あり。
- 8 におい黄褐色シルト

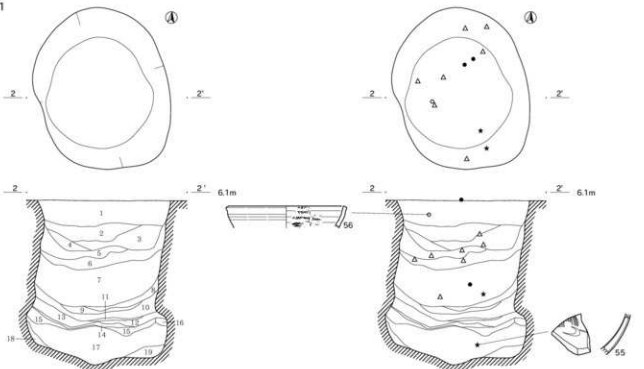
- 9 褐色シルト 地山の流れ込み。
- 10 におい黄褐色シルト 灰白色粘土・炭化物を少量含む。
- 11 暗灰黄色シルト 灰白色粘土・炭化物をやや多く含む。粘性あり。
- 12 暗灰黄色シルト 灰白色粘土を多く、炭化物をやや多く含む。粘性あり。
- 13 におい黄褐色シルト 大粒の炭化物を含む。粘性あり。
- 14 黄褐色シルト 炭化物を多く含む。
- 15 黄褐色粘土

0 (1:40) 2m

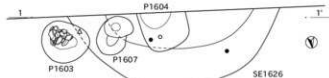
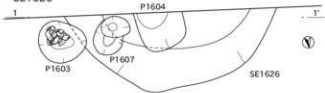
SE1620



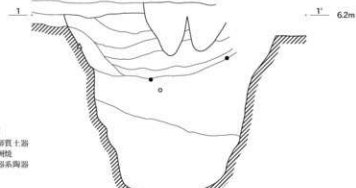
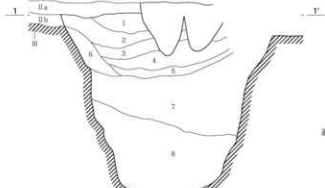
SE1621



SE1626



敷土

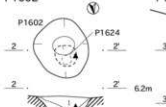


- 遺物凡例
- 土師質土器
 - 漆器
 - ▲ 炭系系陶器
 - △ 石

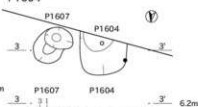
SE1626

- 1 におい黄褐色シルト 明黄褐色シルトブロックを非常に多く、炭化物を少量含む、しまり強い。
- 2 暗褐色シルト 明黄褐色シルトブロックを多く、炭化物をやや多く含む、しまり弱い。
- 3 オリーブ褐色シルト 明黄褐色シルトブロック、炭化物を少量含む、炭化物をごく微量含む、砂状。
- 4 におい黄褐色シルト 灰白色シルトを多く、炭化物を少量含む、炭化物を少量含む、しまり弱い。
- 5 におい黄褐色シルト 暗褐色シルトブロックを非常に多く、炭化物を少量含む、炭化物をごく微量含む、しまり・粘性あり。
- 6 におい黄褐色シルト 暗褐色シルトブロックを非常に多く、炭化物を少量含む、炭化物をごく微量含む、しまり・粘性あり。
- 7 におい黄褐色シルト 暗褐色シルトブロックを非常に多く、炭化物を少量含む、炭化物をごく微量含む、しまり・粘性あり。
- 8 におい黄褐色シルト 暗褐色シルトブロックを非常に多く、炭化物を少量含む、炭化物をごく微量含む、しまり・粘性あり。

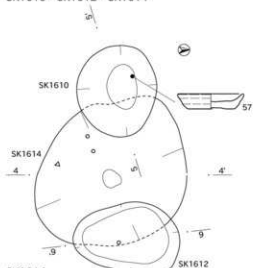
P1602



P1604



SK1610・SK1612・SK1614



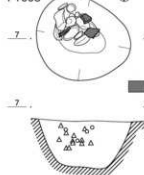
P1602

- 1 におい黄褐色シルト 黄褐色シルト、大粒の炭化物を少量含む、しまりあり。
- 2 におい黄褐色シルト 黄褐色シルト、大粒の炭化物を少量含む、しまりあり。

P1604

- 1 褐色シルト 灰白色シルトをごく微量含む、しまりあり。(IIa層を切る。)
- 2 におい黄褐色シルト 黄褐色シルト、灰白色シルトを少量含む、黄褐色シルト、灰白色シルトを少量含む。
- 3 におい黄褐色シルト 黄褐色シルト、灰白色シルトを少量含む、炭化物をごく微量含む、しまり弱い。
- 4 におい黄褐色シルト 灰白色シルトをやや多く含む。

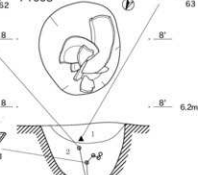
P1603



P1603

- 褐色シルト 灰白色シルトをごく微量含む、しまりあり。

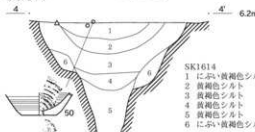
P1608



P1608

- 1 褐色シルト 炭化物を非常に多く含む。
- 2 褐色シルト 褐色シルト

SK1614



SK1614

- 1 におい黄褐色シルト 灰白色シルトを多く、炭化物をやや多く含む、しまりあり。
- 2 黄褐色シルト 黄褐色シルト、灰白色シルトを多く含む、2層より粘性高い、炭化物をごく微量含む。
- 3 黄褐色シルト 2層より粘性高い、炭化物をごく微量含む。
- 4 黄褐色シルト 3層より粘性高い、炭化物をごく微量含む。
- 5 黄褐色シルト 4層より粘性高い。
- 6 におい黄褐色シルト 灰白色シルトをやや多く含む。

SK1610

- 1 褐色シルト 黄褐色シルト、灰白色シルト、炭化物をごく微量含む、しまりあり。
- 2 におい黄褐色シルト 灰白色シルトを多く含む、灰白色シルトを多く含む。
- 3 暗褐色シルト 黄褐色シルト、灰白色シルト、炭化物を少量含む、しまり弱い。

SK1610



SK1612



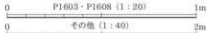
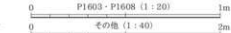
SK1612

- におい黄褐色シルト 炭化物を少量、灰白色シルトをごく微量含む。

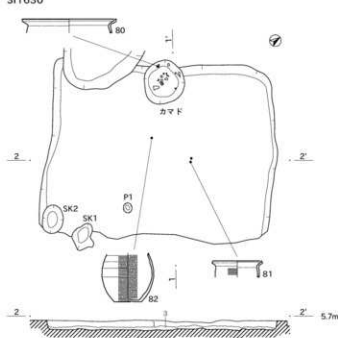
P1609

- におい黄褐色シルト 灰白色シルト、炭化物をごく微量含む、しまりあり。

P1609



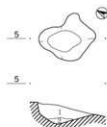
SI1630



SI1630

- 1 褐色シルト 炭化物・焼土をごく微量含む。
 2 に近い黄褐色シルト 大粒の白色粘土・炭化物をやや多く含む(カマド遺跡土)。
 3 褐色シルト 炭化物・焼土をごく微量含む。粘性あり。

SI1630-SK1



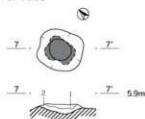
SI1630 SK1

- 1 に近い黄褐色シルト 炭化物を含む。灰黄褐シルトをブロック状に多く含む。
 2 に近い黄褐色シルト 粘性あり。

SI1630 SK2

- 1 に近い黄褐色シルト 炭化物・焼土を少量含む。

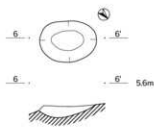
SF1628



SF1628

- 1 明褐色焼土 大粒の炭化物を少量含む。
 2 暗褐色焼土 炭化物をごく微量含む。

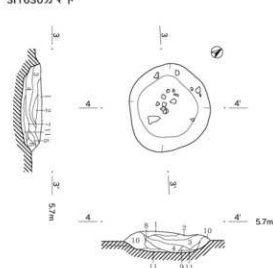
SI1630-SK2



P1632

- 1 明褐色シルト 炭化物を少量含む。
 2 暗褐色シルト 炭化物を含む。粘性あり。

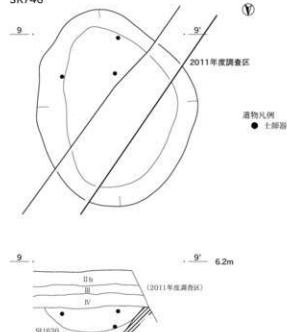
SI1630カマド



SI1630カマド

- 1 に近い黄褐色シルト 炭化物・焼土を少量含む。
 2 に近い黄褐色シルト 炭化物・焼土を含む。
 3 褐色シルト 直径5mm大の焼土を多く含む。炭化物を少量含む。
 4 暗褐色シルト 炭化物・焼土を含む。灰白色粘土を少量含む。
 5 褐色シルト 焼土を少量。灰白色粘土をやや多く含む。
 6 褐色シルト 焼土・灰白色粘土をごく微量含む。
 7 に近い黄褐色シルト 焼土・炭化物・灰白色粘土を少量含む。
 8 黄褐色シルト 焼土を多く。炭化物を少量含む。
 9 に近い黄褐色シルト 粘性あり。
 10 褐色シルト 焼土・炭化物を含む。灰白色粘土をやや多く含む。しまりあり。
 11 褐色シルト 焼土・炭化物をやや多く。灰白色粘土を多く含む。粘性あり。

SK746

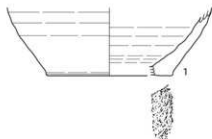


SK746

- 褐色シルト 炭化物を含む。焼土を少量含む。

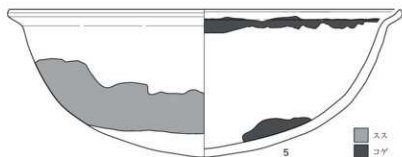
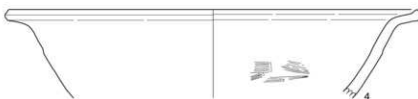
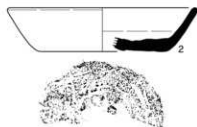
中世の土器 (1)

遺構外出土 (1)



古代の土器 (2~14)

SI1410 (2~5)



■ スス
■ コゲ

SI1410-P1 (6・7)



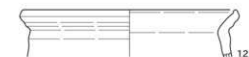
SI1411-SK1 (11・12)



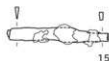
SI1411 (8~10)



遺構外出土 (13・14)



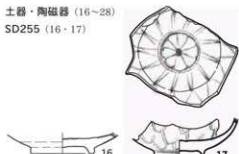
古代の金属製品 遺構外出土 (15)



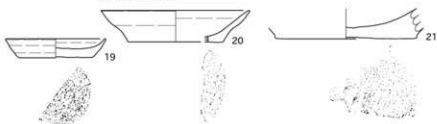
0 (5) 20cm (1:4)
0 (その他) 15cm (1:3)

土器・陶磁器 (16~28)

SD255 (16・17)



SD330 (19~22)



SD1505 (18)



SX1509 (24)



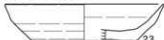
SX1519 (25)



SX1580 (26)



SD1514 (23)



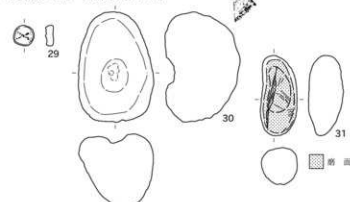
SK1531 (27)



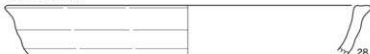
タール

土製品・石製品 (29~33)

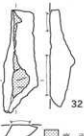
SD1505 (29) SD330 (30・31)



遺構外出土 (28)



SX1509 (32)

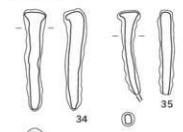


SX1519 (33)



金属製品 (34~44)

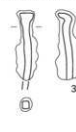
SX1509 (34~36)



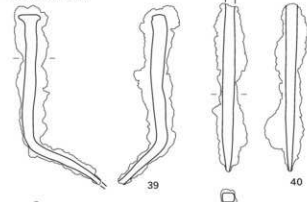
SK1508 (37)



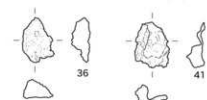
SK1518 (38)



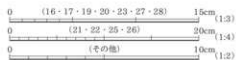
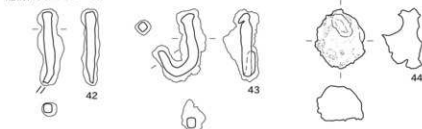
SD330 (39・40)



SD1502 (41)

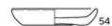
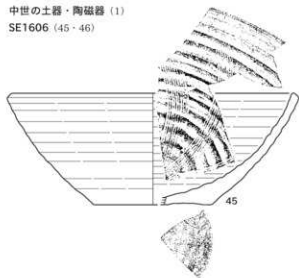


遺構外出土 (42~44)

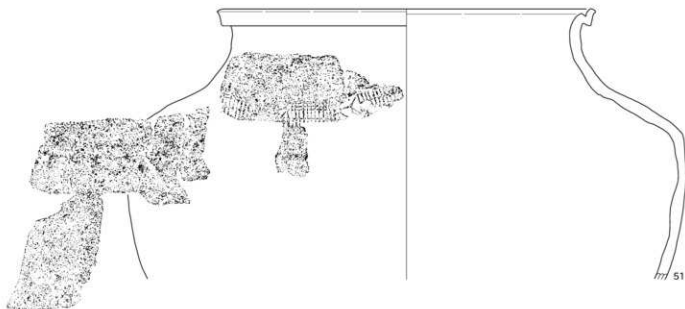
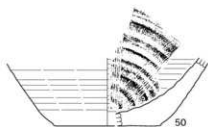


中世の土器・陶磁器 (1)

SE1606 (45・46)



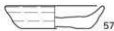
SE1613 (47~51)



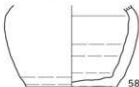
SE1621 (55・56)



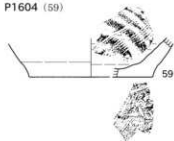
SK1610 (57)



P1602 (58)



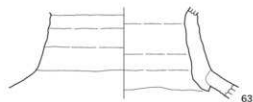
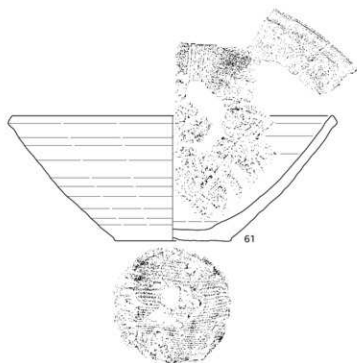
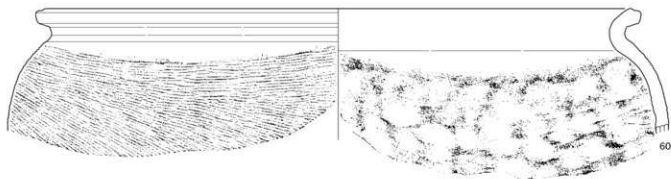
P1604 (59)



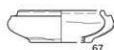
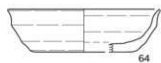
0 (47~49・52~55・57) 15cm (1:3)
0 (その他) 20cm (1:4)

中世の土器・陶磁器(2)

P1608 (60~63)



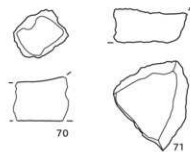
遺構外出土 (64~69)



0 (64~67) 15cm (1:3)
0 (その他) 20cm (1:4)

中世の石製品 (70・71)

遺構外出土 (70・71)

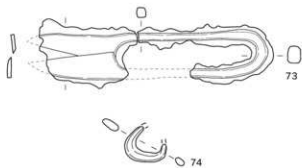


中世の金属製品 (72~79)

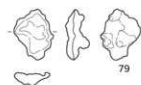
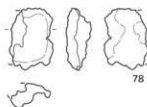
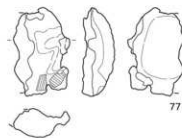
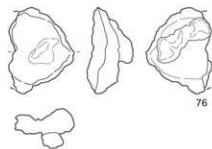
SE1606 (72)



SE1620 (73・74)

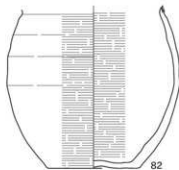


遺構外出土 (75~79)

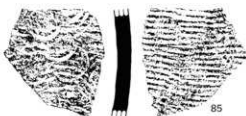
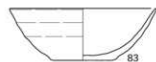


古代の土器 (80~85)

SI1630 (80~82)



遺構外出土 (83~85)





SI1410・SI1411 機能面全景(北東から)



SI1410 カマド検出状況・床面遺物出土状況(北東から)



SI1410 カマドセクション(北西から)



SI1411 カマド検出状況・遺物出土状況(東から)



SI1411 カマドセクション(東から)



中世面全景 (北西から)



古代面全景 (北西から)



SI1410 セクション (北西から)



SI1410 貼床検出状況 (南西から)



SI1410-P1 セクション (東から)



SI1410 完掘 (東から)



SI1411 カマド検出状況・床面遺物出土状況 (東から)



SI1411-SK1 検出状況 (東から)



1区 全景(北から)



SB300-P12 セクション(南から)



SB300-P13 セクション(南から)



SK1501 セクション(北から)



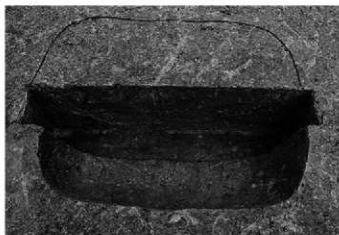
SK1508 完掘(東から)



SK1518 セクション(西から)



SK1521・P1576 完掘(西から)



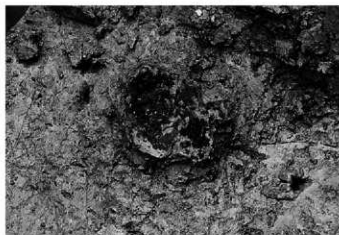
SK1525 セクション(南から)



SK1526 セクション(南から)



SD255 セクション(南東から)



SD330 漆器出土状況(北から)



SD330 上層出土状況(西から)



SD330 セクション(西から)



SD1502 セクション(南東から)



SD1514 セクション(南から)



SX1519・SX1509 セクション(西から)



2区 全景 (南西から)



SE1530 セクション (北西から)



SK1531 セクション (北東から)



SK1531 完照 (北東から)



SK1578・1579 完照 (南東から)



SD1532 セクション (南東から)



SD1532 完照 (南東から)



SX1573 検出状況 (南から)



調査区遠景 (古代面 西から)



基本層序 47H グリッド (南から)



中世面全景 (南から)



SE1606 上層セクション (南東から)



SE1606 中層セクション (南東から)



SE1606 下層セクション (南東から)



SE1613 遺物出土状況 (東から)



SE1613 セクション(東から)



SE1613 完掘(東から)



SE1620 上層セクション(南から)



SE1620 下層セクション(南から)



SE1620 完掘(南から)



SE1621 上層セクション(南から)



SE1621 下層セクション(南から)



SE1621 完掘(南から)



SE1626 セクション(北から)



SK1610 セクション(北から)



SK1612 セクション(東から)



P1603 遺物出土状況(北から)



P1608 セクション(北西から)



P1608 遺物出土状況(北西から)



SI1411 セクション(南東から)



SI1411 完掘(北から)



SI1630 セクション(北から)



SI1630 遺物出土状況(南から)



SI1630 機能面全景(南東から)



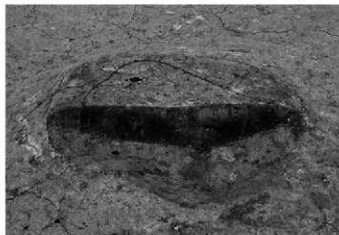
SI1630-カマド セクション(南東から)



SI1630-カマド 遺物出土状況(南東から)



SI1630 完備(南東から)



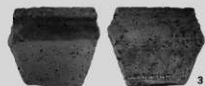
SF1628 セクション(南西から)



P1632 セクション(東から)

中世の土器 (1~14)

遺構外出土 (1)



SI1410-P1 (6~7)

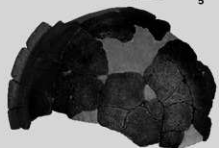
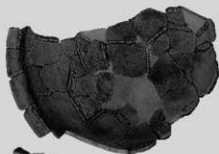


SI1411-SK1 (11~12)



古代の土器 (2~14)

SI1410 (2~5)



※口縁部内面拡大【縮尺任意】

SI1411 (8~10)



遺構外出土 (13~14)



古代の金属製品 遺構外出土 (15)



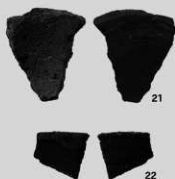
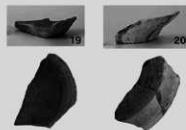
7 (1:4)
5 (1:6)
その他 (1:3)

土器・陶磁器 (16~28)

SD255 (16・17)



SD330 (19~22)



SD1505 (18)



SD1514 (23)



SX1509 (24)



SX1519 (25)



SX1580 (26)



SK1531 (27)



遺構外出土 (28)



土製品・石製品 (29~33)

SD1505 (29)



SD330 (30・31)



SX1509 (32)

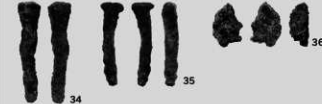


SX1519 (33)



金属製品 (34~44)

SK1509 (34~36)



SD330 (39・40)



SK1508 (37)



SK1518 (38)



SD1502 (41)



遺構外出土 (42~44)



16・17・19・20・23・27・28 (1:3)
21・22・25・26 (1:4)
その他 (1:2)

SE1606 (45・46)



45



46

SE1613 (47~51)



47



48



49



50



51



押印文 (51)

SE1620 (52~54)



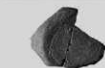
52



53



54



SE1610 (57)



57



SE1621 (55・56)



55



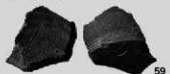
56

P1602 (58)



58

P1604 (59)

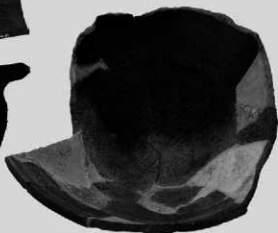


59

P1608 (60~63)



60



(内側面の炭化物)



61



62



(内側面と対応する外側面の炭化物)



63

中世の土器・陶磁器 (64~69)

遺構外出土 (64~69)



中世の石製品 (70・71)

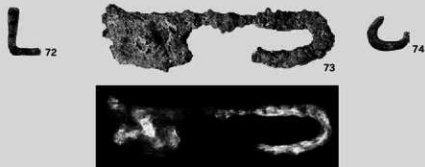
遺構外出土 (70・71)



中世の金属製品 (72~79)

SE1606 (72)

SE1620 (73・74)



X線写真

遺構外出土 (75~79)



古代の土器 (80~85)

SI1630 (80~82)



遺構外出土 (83~85)



72~75 (1:2)
68・69 (1:4)
その他 (1:3)

報告書抄録

ふりがな	がらめきいせきさん							
書名	柄目木遺跡Ⅲ							
副書名	一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第270集							
編者名	小野本政・阿部友晴(埋文事業団)、秋山泰利・湯原勝美(株式会社ノガミ)、松元美由紀・金井慎司(ハリノ・サーヴェイ株式会社)							
編集機関	公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL. 0250(25)3981							
発行年月日	2017(平成29)年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
柄目木遺跡	新潟県阿賀野市 下ノ橋字柄目木地内・ 小里字柄目木地内	15223	398	37° 50′ 06″	139° 11′ 46″	20141001～ 20141106 20150817～ 20150912 20160418～ 20160629	中世589㎡ 古代765㎡ (計1,354㎡)	一般国道49号 阿賀野バイパス 建設
所取遺跡名	種別	時期	主な遺構		主な遺物		特記事項	
柄目木遺跡	集落跡	中世(13世紀後半～14世紀後半)	掘立柱建物1棟(柱穴2基)、土坑10基、井戸6基、ピット37基、溝7条、性格不明遺構3基		土師質土器・青磁・珠洲焼・瓷器系陶器・鍛冶関連遺物・金属製品・石製品			
	集落跡	古代(8世紀後半～9世紀前半)	竪穴建物3棟、土坑4基、ピット60基、焼土1基、性格不明遺構1基		土師器・須恵器・金属製品			
要約	遺跡は、阿賀野川右岸の沖積地に立地する。本書は、一般国道49号阿賀野バイパス建設に伴い、2014年度から2016年度まで行った発掘調査を取録する。 中世の調査では、井戸がまとまって検出され、隣接調査区の出土遺物との接合状況等から遺構の変遷を明らかにした。また、土壌に含まれる炭化種実の分析により、当時の食生活の一端を窺うことができた。古代の調査では竪穴建物を3棟検出し、遺跡全体では10棟を数える。一遺跡での検出数としては新潟平野でも有数である。							

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第270集
一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ

柄目木遺跡Ⅲ

2017(平成29)年3月30日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会
2017(平成29)年3月31日発行 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025(285)5511

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社ハイングラフ
〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号
電話 025(233)0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書第270集 栢目木遺跡Ⅲ 正誤表

ページ	箇所	誤	正
29	下段注	1) 7の口縁部については、	1) 51の口縁部については、